



統合報告

2026

2026年7月1日現在

目次

・編集方針	003
■1章：イントロダクション	
・経営理念	004
・社長メッセージ	005
・財務・非財務ハイライト	
財務ハイライト	006
非財務ハイライト	008
・IJグループについて	012
・IJグループの強み	013
・ビジネスモデル	016
・人的資本	019
・中期計画	025
・財務戦略	027
・IJのサステナビリティ経営・目標	029
・重要課題1 基本的な考え方	034
イノベーションの創出	035
事業を通じた社会課題の解決	039
気候変動への対応	050
・重要課題2 基本的な考え方	055
ネットワークの強靱化	056
セキュリティとプライバシー保護	059
・重要課題3 基本的な考え方	063
ダイバーシティの推進	064
人材の育成	068
安心・安全な労働環境の整備とワークライフバランスの実現	071
・TCFD提言に基づく情報開示	077
・社会への取り組み	081
・コーポレート・ガバナンス	
コーポレート・ガバナンスの全体像	083
取締役会の運営状況	088
監査役会の運営状況	093
指名報酬委員会の運営状況	094
取締役報酬の設計	095
事業運営の状況	097
内部監査の状況	099
情報セキュリティへの取り組み	100
関連当事者取引	101
役員紹介	102
・IJグループの社会貢献	107
・会社情報	113
・用語集	119
■2章：価値創造のしくみ	
■3章：サステナビリティ	
■基本情報	

IIJは、株主・投資家をはじめとした様々なステークホルダーの皆さまに、当社グループが事業を通じて社会課題を解決し、持続的に成長する姿をご理解いただくため、統合報告ポータルを公開しています。

本ポータルでは、財務および非財務の視点を統合すると共に、中長期的な視点で価値を創造していくにあたって重要な情報を掲載しています。また、主に年次での報告を行っていますが、常に最新の情報をお伝えするべく、随時更新しています。

主な対象期間

2025年度（2025年4月1日～2026年3月31日）

ただし、2026年4月以降に開始した事業活動や開示事項の内容を含みます。

対象範囲（対象となる組織）

株式会社インターネットイニシアティブおよびグループ企業

公開時期

本ポータルは常に最新の情報をお伝えするべく、随時更新します。また、本ポータルの内容をまとめたPDFファイルは年に1回公開します。

参照ガイドライン

- 統合報告フレームワーク〔価値報告財団（VRF）〕
- 価値協創ガイダンス〔経済産業省〕



将来の見通しに関する注意

本ポータルの記載のうち、過去または現在の事実に関するもの以外は、将来の見通しに関する記述に該当します。将来の見通しに関する記述は、現在入手可能な情報に基づく当社グループまたは当社の経営陣の仮定及び判断に基づくものであり、既知または未知のリスク及び不確実性が内在しています。また、今後の当社グループまたは当社の事業を取り巻く経営環境の変化、市場の動向、その他様々な要因により、これらの記述または仮定は、将来実現しない可能性があります。

経営理念

当社グループの経営理念（存在意義・パーパス）は、以下の通りであります。

「インターネットイニシアティブ」との社名の通り、100年に一度の技術革新であるインターネットの世界において、その技術革新をリードし、新たな利用形態を提案する画期的なサービス、プラットフォームの提供を通じて、ネットワーク社会の発展に貢献していく。

- 技術革新によりネットワークインフラストラクチャーを発展させる

インターネット技術のイニシアティブを取り続け、より高速化するネットワークとコンピューティングによって新たに創出する価値を通じて、デジタル社会の未来を切り拓いていく。

- ネットワーク社会を支える仕組み（ITサービス）を提供する

世の中の変化を捉え、その変化を先取りした高品質・高付加価値なITサービスを提供し続けることで、社会・個人によるネットワーク利用を支えていく。

- 自己実現する職場の提供（多様な才能・価値観を有する人材が活躍できる場）

技術革新や社会貢献に積極果敢に挑戦する人材が集まり、誇りとやりがいをもって自律的に能力を発揮できる場を提供していく。社員個々人が現状に満足せず常に先の世界を考えることで社会発展に貢献し、世間からも評価されることで成長を実感できるような会社であることを目指す。



インターネット事業を通して 持続可能で豊かな社会の実現に 貢献して参ります。

代表取締役 社長執行役員（Co-CEO & COO）

谷脇 康彦

2026年6月

株主の皆さまにおかれましては、平素より格段のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

日本社会における AI 活用やクラウド化に代表されるデジタルトランスフォーメーション（DX）の流れは強く大きいものであり、企業や官公庁においてはそれらを実現する最適なネットワークやシステムの実装と運用がより求められております。このような環境のなか、当社グループは、事業戦略の根幹は不変にて、領域を拡張しながら発展を続けております。2025 年度では、多様な業種でネットワーク更改等のネットワークやシステム関連の旺盛な需要が継続し、複数年契約の大型案件獲得も恒常化してまいりました。連結売上高は、ネットワークサービスおよびシステム運用保守から成るストック売上の継続伸長と大型案件の売上寄与等で、前年同期比 9.0%増の 3,454 億円となりました。営業利益は、ネットワークサービスとシステムインテグレーションの両輪での粗利規模の増大等で、前年同期比 15.7%増の 348 億円となりました。

当社グループの競争優位性は、国内初のインターネットサービスプロバイダーとして創業来培ってきたインターネット関連技術力、とりわけネットワークやシステムを安定して運用する技術力にあると自負しております。企業活動におけるネットワークの最適運営が求められる昨今、この運用力は益々強い競争力を発揮すると考えております。また、AI 活用の進展は、こうした当社グループの技術基盤をさらに高度化させるものであると確信しております。これらを組み合わせ強化しながら、企業価値の持続的向上を目指してまいります。

今後とも格別のご愛顧とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

財務ハイライト

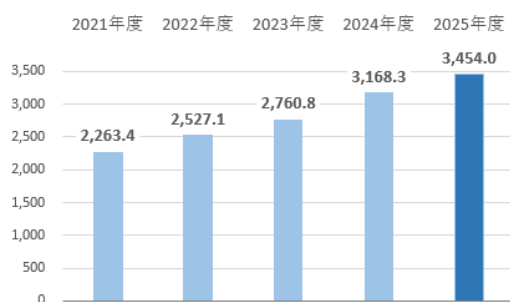
(※) 連結業績。会計基準はIFRS (International Financial Reporting Standards) 国際財務報告基準を採用。

▶ [データブック\[73.8KB\]](#) 

売上・損益状況

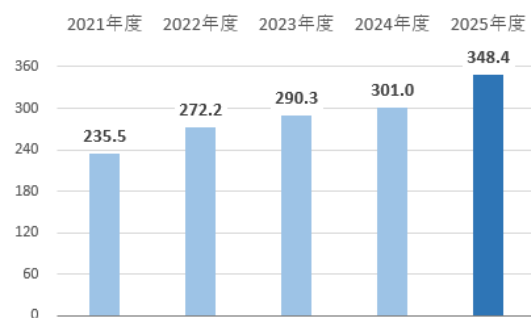
売上収益（売上高）

単位：億円



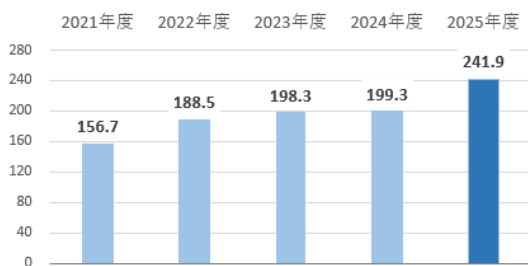
営業利益

単位：億円



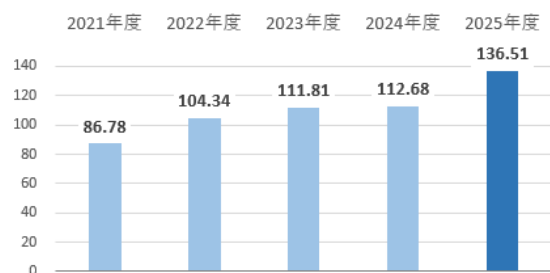
親会社の所有者に帰属する当期利益

単位：億円



基本的1株あたり当期利益

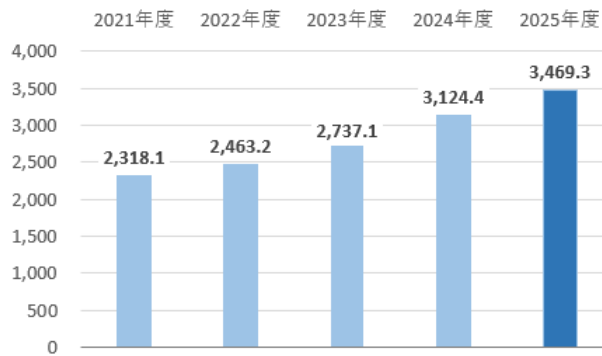
単位：円



資産状況

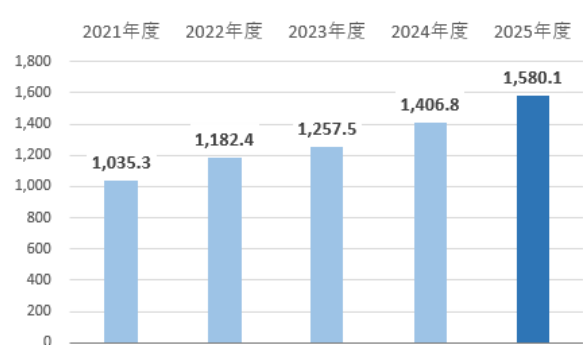
総資産

単位：億円



親会社の所有者に帰属する持分

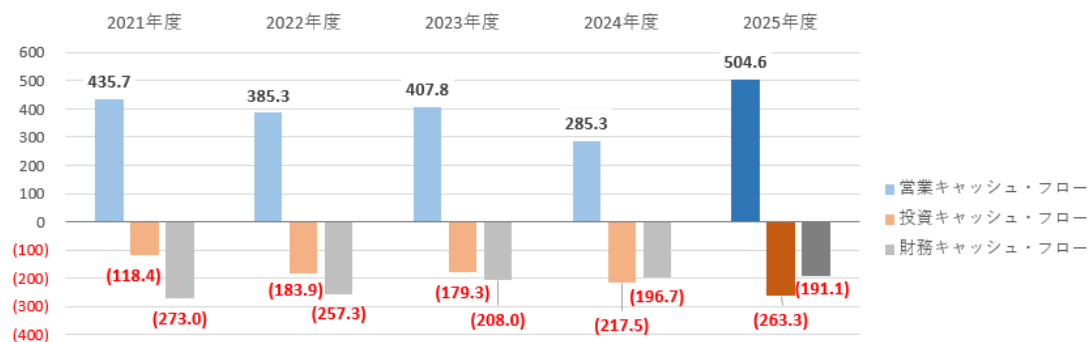
単位：億円



(※) 会計基準の変更（IFRS第16号「リース」の適用）により、FY19より総資産が大幅に増加しております。詳細は「よくあるご質問（IR関連）決算・財務情報についてQ4」をご参照ください。

キャッシュ・フローの状況

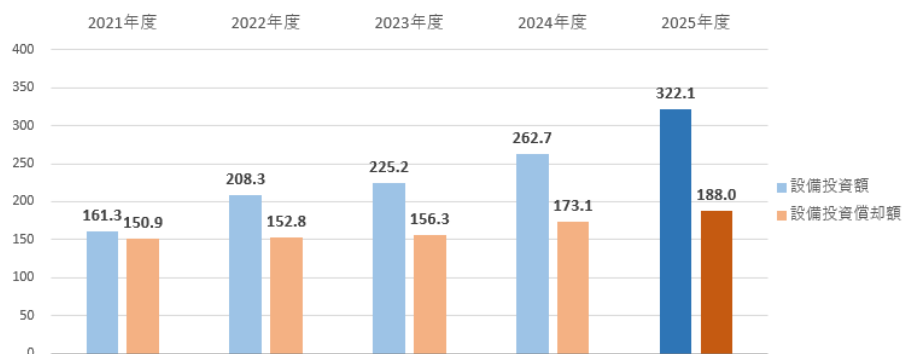
単位：億円



(※) 会計基準の変更（IFRS第16号「リース」の適用）により、FY19よりオペレーティング・リースの支払の一部が営業活動から財務活動に区分変更されております。詳細は「よくあるご質問（IR関連）決算・財務情報についてQ4」をご参照ください。

設備投資額及び設備償却額の状況

単位：億円



(※) 設備投資額は、有形固定資産及び無形固定資産の現金支出による取得額及びファイナンス・リースによる取得額より、セール・アンド・リースバック取引による重複、少額端末等で投資との性質を持たない資産の取得額を除外して算定しております。

(※) 設備投資償却額は、減価償却費及び償却費のうち、設備投資（CAPEX）による資産の償却額を表しており、設備投資との性質をもたない資産（オペレーティングリースの使用権資産、少額端末、顧客関係等）の償却額を除外して算定しております。

人事データ

- IIJ（単体）社員数（男・女別）

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
男性	1,898	1,984	2,139	2,344	2,483
女性	446	491	541	627	691
女性比率（%）	19.0	19.8	20.2	21.1	21.8

- IIJ（単体）採用者数（男・女別）

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
男性	155	179	269	299	271
女性	55	66	70	108	96
女性比率（%）	26.2	26.9	20.6	26.5	26.2

- IIJ（単体）管理職者数・女性管理職比率推移

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度
管理職者数	722	783	851	888	992
男性	681	734	787	813	905
女性	41	49	64	75	87
女性比率（%）	5.7	6.3	7.5	8.4	8.8

（※）各事業年度の4月1日時点の当社全管理職に占める女性管理職の割合

- IIJ（単体）平均年齢及び勤続年数の推移

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
平均年齢	37.7	37.9	37.6	37.4	37.5
平均勤続年数	9.1	9.3	9.2	9.0	9.3

- IIJ（単体）障がい者雇用数・雇用率

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
障がい者雇用数	56	64	64	78	85
障がい者雇用率（%）	2.4	2.4	2.4	2.6	2.7

（※）障がい者雇用状況報告書基準

（※）各事業年度の6月1日時点

- IIJ（単体）育児休業制度利用率及び育児休業後復職率

		2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
育児休業制度利用率（%）	男性	24.6	33.3	53.5	61.9	61.8
	女性	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
育児休業後 復職率（%）	男性	92.9	100.0	100.0	97.0	100.0
	女性	100.0	100.0	93.3	100.0	93.3

- 月平均残業時間

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
月平均残業時間	28.1	27.7	26.2	24.8	24.9

- 有給休暇取得日数・取得率

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
年間平均取得日数（日）	11.3	12.6	13.1	12.6	12.6
年間平均取得率（％）	64.4	71.0	75.0	73.2	73.5

（※）上記有給取得日数・取得率には特別休暇を含まない。

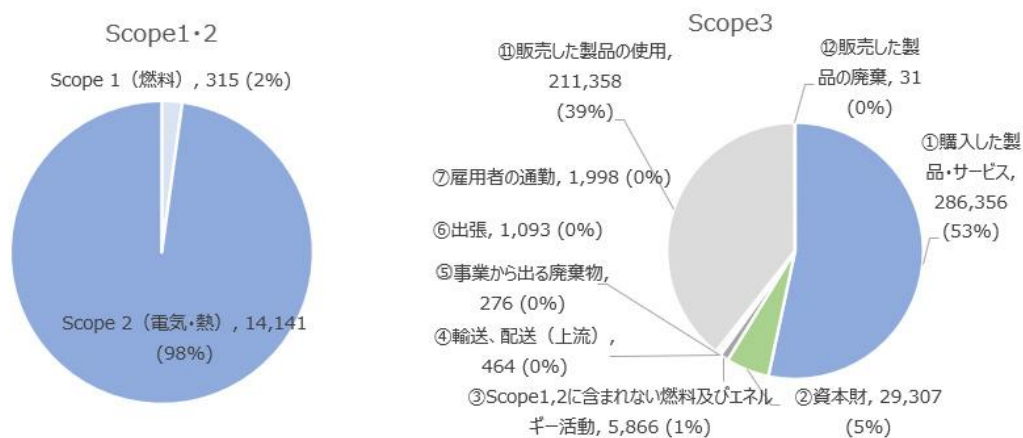
- IIJ（単体）離職率推移

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
離職率（％）	4.2	3.8	4.6	3.9	4.5

環境データ

- 温室効果ガス排出量

2025年度実績（単位：t-CO₂）（※1,2） 算定範囲：IIJ及び全連結子会社



FY2025温室効果ガス排出量 内訳

	IIJ	IIJGS/EG/PTC	その他	合計
Scope1	255	8	52	315
Scope2	12,567	968	606	14,141
Scope3	335,988	111,911	88,851	536,750

IIJ単体実績推移（単位：t-CO2）

	FY2023	FY2024	FY2025
Scope1	340	252	255
Scope2	9,759	12,535	12,567
Scope3	323,724	374,823	371,682 (※3)

（※1）算定方法：「サプライチェーンを通じた温室効果ガス排出量算定に関する基本ガイドライン」（環境省、経済産業省）

（※2）GHG排出量はマーケット基準の数値

（※3）Scope3排出量の主要な構成要素であるカテゴリ1（購入した製品・サービス）は、前年対比で活動量は増加したものの、排出原単位「3EID-産業連関表による環境負荷原単位データベース」の更新に伴う排出係数の低下により排出量が減少しており、Scope3全体の排出量減少の要因となっております。

- 自社データセンターの再生可能エネルギー利用率

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
再生可能エネルギーの利用率	46% (2023年3月)	50% (2024年3月)	55% (2025年4月)	65% (2026年4月)

- 自社データセンターのPUE (※4) (※5)

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
松江データセンターパーク	1.3	1.3	1.3	1.4
白井データセンターキャンパス	1.3	1.4	1.3	1.3

（※4）PUE（Power Usage Effectiveness）：データセンター施設全体のエネルギー使用量÷IT機器のエネルギー使用量

（※5）業界最高水準のPUE値：PUE1.4以下（2026年4月時点において、資源エネルギー庁はデータセンター業におけるベンチマーク指標及び目指すべき水準をPUE1.4以下と設定し、達成事業者は省エネ優良事業者とみなされる）

IIJグループについて

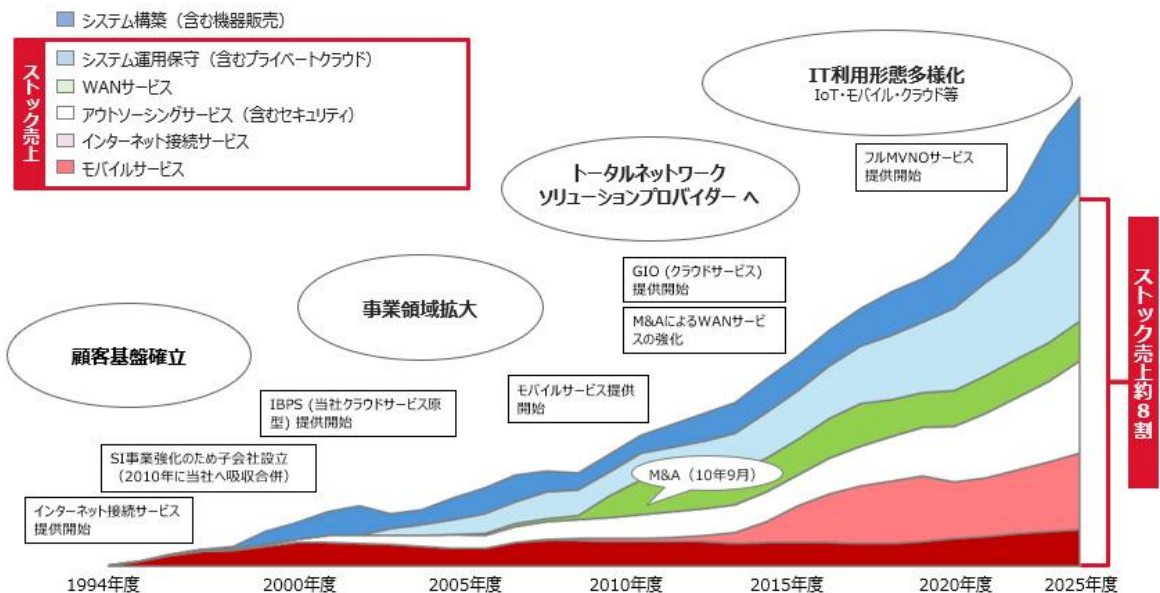
IIJグループの事業展開

1990年代初頭、日本のインターネットは誕生前であり、産学共同にて研究開発活動をしていた「WIDEプロジェクト（※）」が、インターネットに関する諸技術の蓄積として有力なものでした。当社は1992年12月に、このような研究開発に携わっていた技術者を中心に、日本にインターネットとの新たな通信手段を普及したいとの夢により、日本のISPの先駆けとして設立されました。その後、インターネット接続サービス、ダイヤルアップIPサービス、ファイアウォールサービス等の国内初のネットワークサービスを開発のうえ提供開始し、1990年代中頃には国内ISPとして独占的なマーケットポジションを築きました。インターネットの普及につれて、ISP市場への参入者が急増し価格競争は激化し、その後多くのISPが淘汰されました。

そのような市場環境のなかで、当社グループは、強みであるインターネットに関連する技術力の集積と顧客基盤を基に、インターネットを事業用に活用するであろう大規模な法人・官公庁層向けに注力し、信頼性と付加価値の高いインターネット関連サービスを複合的に提供するとビジネスモデルへと戦略的に変革してまいりました。企業がインターネットを使うにあたって必要となる、セキュリティ関連サービス、ネットワークの運用監視、ネットワークやインターネット関連システムの構築・運用等へと領域を広め、子会社・関連会社群も設立していきました。その後、法人向けに複合的なネットワークサービスを提供する必要性によりMVNOの態様でモバイルサービスの提供を開始し、ネットワークとシステムが融合していく流れのなか先んじてクラウドサービスを開発いたしました。グローバルでインターネットネットワークを自社運営するために米国・欧州に拠点を設け、国内顧客の海外進出をネットワーク・システム面でサポートすることを中心に、アジア事業を強化してまいりました。

このような事業展開の経緯のなかで、優良法人・官公庁中心の顧客基盤を築きあげ、総売上上の約8割強となる月額売上に蓄積し、法人IT市場におけるブランド認知と当社グループ独自のポジショニングを確立してまいりました。近年、日本の企業・官公庁において、インターネット技術を取り入れた複合的な企業ネットワーク・システムの運営が定着しつつあります。経営理念に掲げる、日本のインターネットを支え、技術力でネットワーク社会の実現に貢献していきたいとの当社グループの役割は、ますます重要になっていくものと考えております。

（※）1988年に開始された日本のインターネット関連プロジェクト。産官学の多様な人材や団体が緩やかに連携する中で、より便利で安全な未来を目指した技術開発と研究を行うプロジェクト。

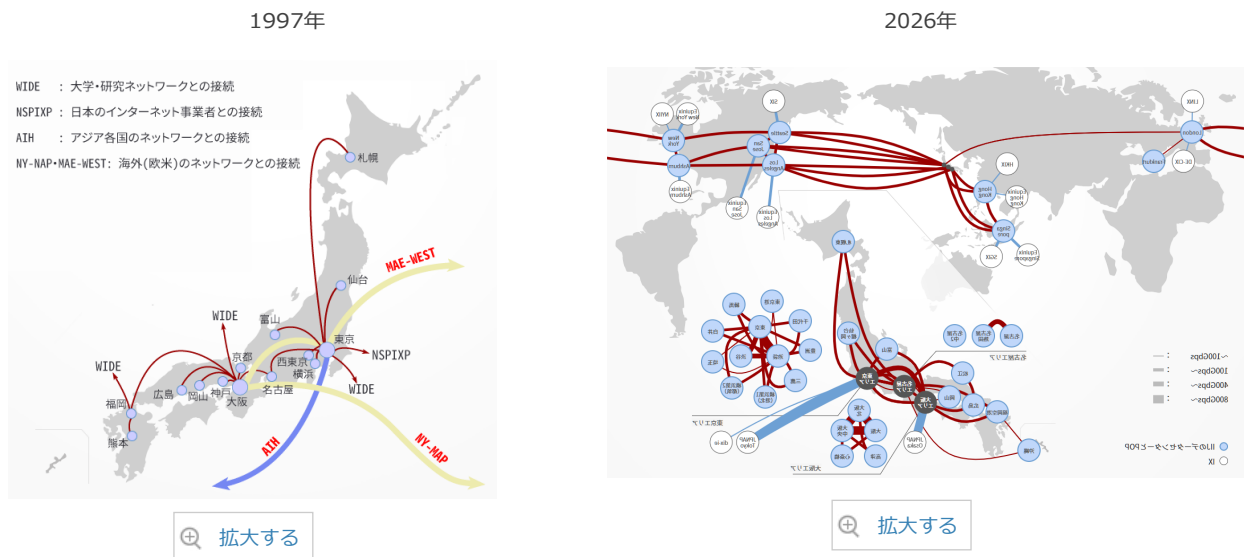


関連リンク

- [会社概要](#)
- [IIJグループの沿革について](#)

国内最大規模のインターネット・バックボーンネットワークと高いインターネット運営技術

当社が自社運営するインターネット・バックボーンネットワーク（以下、「バックボーン」という。）は国内最大級であり、米国・欧州・アジアへと延伸し、現地法人にてこれらを自社運営することで、グローバルで高品質なインターネット環境を提供しております。インターネットトラフィックの増加にあわせて恒常的にネットワークを随時増強しております。



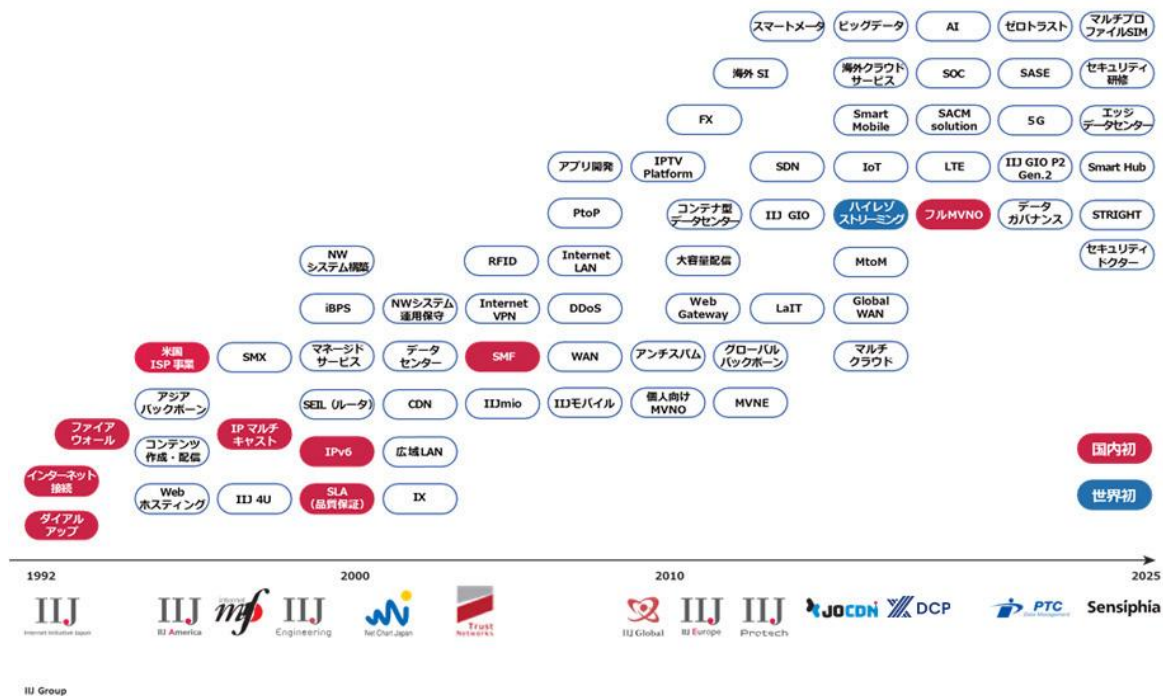
当社のバックボーンは、複数通信事業者の回線を使い分け拠点間を物理的に異なるルートでつなぐ冗長設計に加え、ネットワーク機器の冗長化構成、マルチベンダーの機器・ソフトウェア採用等により、大規模災害等の不測の事態が起こった場合においても止まらない高い可用性を実現しております。当社に蓄積されたインターネット運営技術で障害耐性の高いバックボーンを運用しており、創業以来、約30年にわたり重大な障害は発生しておらず、大規模な法人・官公庁を中心に長期かつ良好なお客様との取引関係を継続しております。当社のバックボーンは、日本のインターネット普及や、トラフィックの増加とともに、拡張を続け今日に至るものであり、それに係る費用はお客様からの月額収入で賄われております。技術に精通したネットワークエンジニアの確保、一定規模の設備投資の継続等も必須であり、後発事業者が容易に模倣できない事業モデルを築き上げております。

当社グループの法人向けインターネット接続サービスやアウトソーシングサービスは、これらバックボーンを含むネットワーク・システムの運用コスト（回線賃借料、機器償却費、データセンター利用料、人件関連費用等）が主要な原価になっており、バックボーン規模の拡大とそれを基に生みだされる月額収入の増加により、スケールメリットが働き利益が増加する事業モデルとなっております。

日本の社会・経済活動におけるIT利活用範囲・規模は拡大しており、堅牢なインターネット・インフラストラクチャーへの需要は今後ますます拡大していくものと展望しております。

付加価値の高いサービス開発力と高度な運用力

インターネットはプログラム・ソフトウェアにより制御されるものであり、サービス開発にあたってはこれら技術の蓄積が重要です。当社グループは、インターネット技術者集団として、最新の技術動向を把握のうえ、柔軟な発想でそれらを適用し、通信キャリアに先行して、付加価値の高い自社サービスを継続して開発のうえ提供し運用することにより、マーケットをリードしてまいりました。当社グループのインターネット関連サービスの開発・創出の実績の概要は下図の通りであり、自社開発サービス群が競争優位の源泉となっています。



当社グループのネットワークサービスは、自社運営のバックボーンを経由して提供し、インターネットに精通したエンジニアがサービス運営すること等にて、安定的な継続提供を実現しています。当社グループの長年に渡るネットワークとサービスの運営実績がお客様からの信頼感を醸成し、低いサービス解約率やサービスの複合利用進展へと繋がり、法人向けネットワークサービス売上蓄積との結果に表れているものと考えております。

大規模な法人・官公庁を中心とする約16,000社の顧客基盤

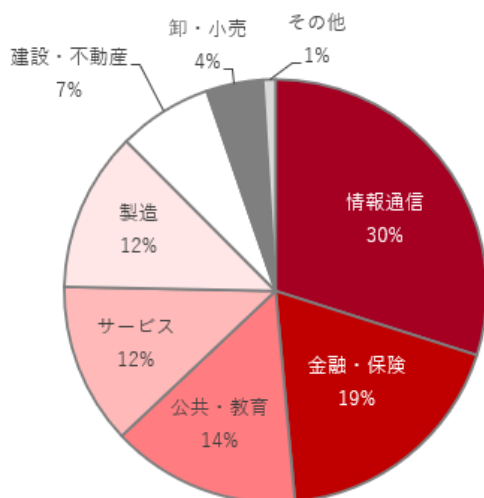
当社グループのお客様は、優良法人・官公庁等を中心に約16,000社にのぼります。インターネット接続・セキュリティ関連サービス等のネットワークサービスは全ての業界で満遍なく利用されているもので、特定業界への偏りはなく、各業界の多くのリーディング企業が当社グループのサービスを採用しております。また、特定のお客様への売上依存度は低く、各お客様向け売上高の全売上高に占める割合は最大でも3%以下（FY25 IIJ単体実績）となっております。

今後も新たなサービスの開発や機能向上・追加を進め、お客様に当社グループのサービス群をより広範囲に複合利用して頂くことにより、売上成長を図ってまいります。

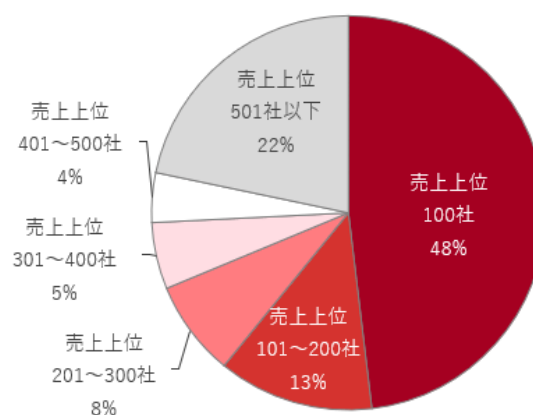
業界TOP10企業への浸透率



顧客業種別売上分布



顧客別売上分布



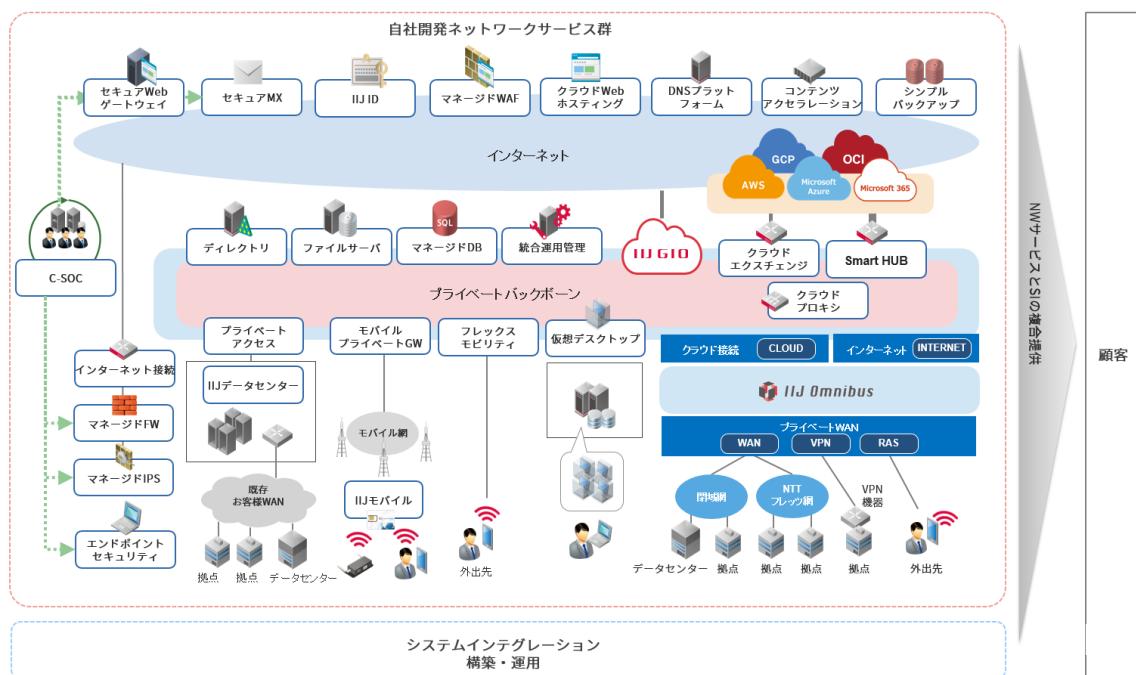
(※) IIJグループ顧客数は2026年3月末時点

(※) 業界TOP10企業への浸透率は、業界ごとの連結売上高上位10社（出典：Yahoo！ファイナンス・売上高・全市場・デイリーを基に当社作成）のうち、IIJがサービスを提供している比率であり、FY25IIJ単体実績を基に当社作成

(※) 顧客別／顧客業種別売上分布はFY25IIJ単体実績を基に当社作成

自社開発ネットワークサービス群とシステムインテグレーションの複合提供

当社は日本にインターネットを新たな通信手段として普及させたいとの思いにより設立され、日本初の商用インターネット接続サービスの提供を開始しました。1990年中頃にはISP市場を寡占するポジションを確立しましたが、インターネット普及に伴う新規参入者の増加により、価格競争は激化しました。そのような環境のなか、当社グループはインターネットを事業の用に供する大規模な企業・官公庁に注力するとともに、インターネットに関連する技術集積を基に、インターネット接続・セキュリティ・クラウド・モバイル等の領域で付加価値の高いネットワークサービス群を自社で開発し、それらを高い運用技術にて月額提供するとビジネスモデルへと戦略的に変革してまいりました。当社グループは、これらサービス群とシステムインテグレーションの複合提供により、企業・官公庁の多様なネットワーク・システム需要に応えています。



顧客基盤への自社開発サービス群のクロスセリング

当社グループの強みであるインターネット・バックボーンネットワークは、創業以来、約30年にわたり重大な障害を起こしておらず、多くのお客様が長年に渡って当社グループのネットワークサービスを継続利用して頂いております。当社グループへの信頼感が醸成されたこれらお客様に対して、信頼性と付加価値の高い自社開発ネットワークサービス群を複合的に提供することにより、お客様との取引規模の更なる拡大を目指します。

大規模な社内システムを運営するお客様へのインターネット関連サービスの提供は、社内システム外側部分でのインターネット接続やゲートウェイ型サービス等が従前の主軸でした。近年、大規模な企業・官公庁のシステムは、クラウド利用進展やリモートアクセス等のインターネット技術の複合利用に加え、高度なセキュリティ機能を具備するゼロトラストを前提としたものへと進化しております。これらにより、当社グループのネットワークサービス群・システムインテグレーションへの需要はますます高まるものと展望しております。

価値創造プロセス

- Purpose

「インターネットイニシアティブ」という社名の通り、100年に一度の技術革新であるインターネットの世界においてその技術革新をリードし、新たな利用形態を提案する画期的なサービス、プラットフォームの提供を通じて、ネットワーク社会の発展に貢献していく。

- 外部環境

- 社会・企業活動の急速なデジタル化進展、ネットワーク・コンピューティング（データ処理）の高速化
- 高速なネットワークやクラウド活用を前提とした新しいシステムへの移行
- 堅牢なインターネット・インフラストラクチャーへの需要の高まり
- セキュリティ・プライバシー保に対するニーズの増大
- 企業に対する社会課題解決に関する期待

- 競争優位の源泉

強み

- 国内最大規模のバックボーンネットワークと高いインターネット運営技術
- 付加価値の高いサービス開発力と高度な運用力
- 大規模な法人・官公庁を中心とする約16,000社の顧客基盤

➤ [IIIグループの強み](#)

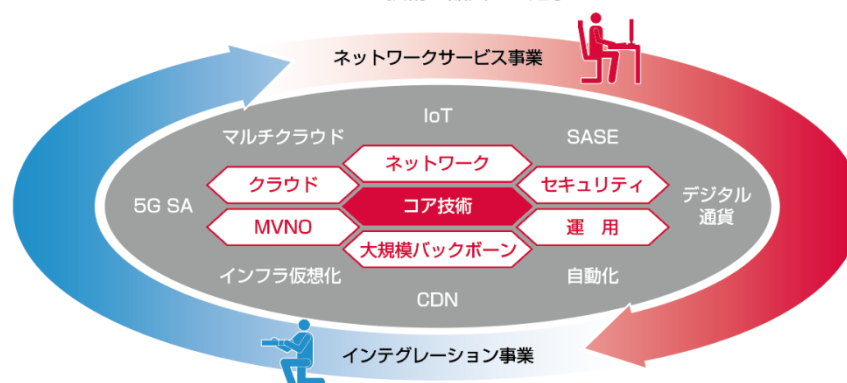
経営資源

（2026年3月末時点）

- 人的資本：従業員数5,533名（内、約7割技術者）
- 子会社：国内6社 海外12社
- データセンター：13カ所、内、自社データセンター2カ所
- 販売パートナー：約450社
- 親会社の所有者に帰属する持分：1,580億円
- 親会社所有者帰属持分比率：45.5%



たゆめ技術・品質への追求



お客様との共創・ビジネスをITで実現

- 競争優位拡大に向けた技術・サービス開発/品質への取り組み

5G SA、SASE、マルチクラウド運用技術、セキュリティ脅威情報分析基盤、インフラ仮想化/自動化技術、サービス品質向上に向けた取り組み

- 長期事業成長に向けた会社運営基盤の強化

➢ コーポレート・ガバナンス

- IIJのサステナビリティ経営・目標

サステナビリティ重要課題

- 技術革新によりネットワークインフラの進化を牽引し、様々な社会課題の解決に貢献
- 社会インフラを支える、安全で強靱なインターネットサービスの提供
- 多様な才能と価値観を持つ人材が活躍し、積極果敢に挑戦できる場の提供

経済価値の創出

- FY2025

- 売上高 3,454億円 (+9.0% YoY)
- 営業利益 348億円 (+15.7% YoY)、営業利益率 10.1%
- 親会社の所有者に帰属する当期利益 242億円 (+21.3% YoY)

➢ 財務ハイライト

➢ 中期計画

社会価値の創出

- 環境

自社DCにおける再生可能エネルギーの利用・エネルギー効率の向上によるGHG排出量削減

➢ TCFD提言に基づく情報開示

- 社会

- ネットワークサービス提供を通じた様々な社会課題解決（行政、医療・介護、農業、教育現場等のIT化）
- インターネットの技術発展・普及への貢献（ISOC、FIRST、ITU-T）
- 世界各国のプライバシー保護規制対応の支援（ISO、ISMAP取得）

➢ セキュリティとプライバシー保護

- 人材

ダイバーシティの推進（2026年4月現在）

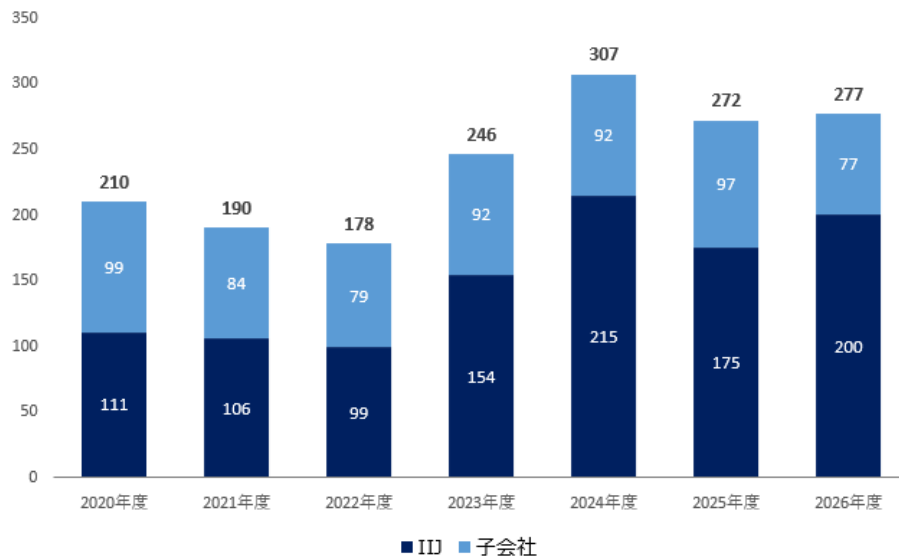
- 女性採用比率 26%
- 女性管理職比率 8.8% (+0.4ポイント YoY)

➢ ダイバーシティの推進

人材獲得の方針

当社グループの人材戦略は、新卒採用の継続及び育成を主軸に、即戦力を中途採用で賄うとの基本方針であり、これを継続しております。当社は国内初の本格的インターネットサービスプロバイダーであり、インターネット関連技術を追求したい学生・技術者による認知度は高く、近年の厳しいIT人材の採用環境においても、単体及び連結の新卒採用は増加しております。単体の新卒採用における技術者の割合は約7割であり、その母数のうち博士・修士の割合は約4割です。新卒採用の施策として、技術系部署（ネットワーク・クラウド・セキュリティ・IoT等）での実践的なインターンシップ機会提供により、技術者を志望する意欲的な学生と早期に接点を持ち、これら学生が当社での業務を通じた成長機会を認知してもらう取り組み等も推進しております。更なる事業成長には人材の継続拡充が必要との認識であり、2026年度の新卒入社規模は、単体200名、連結277名でした。今後も人材獲得に注力してまいります。

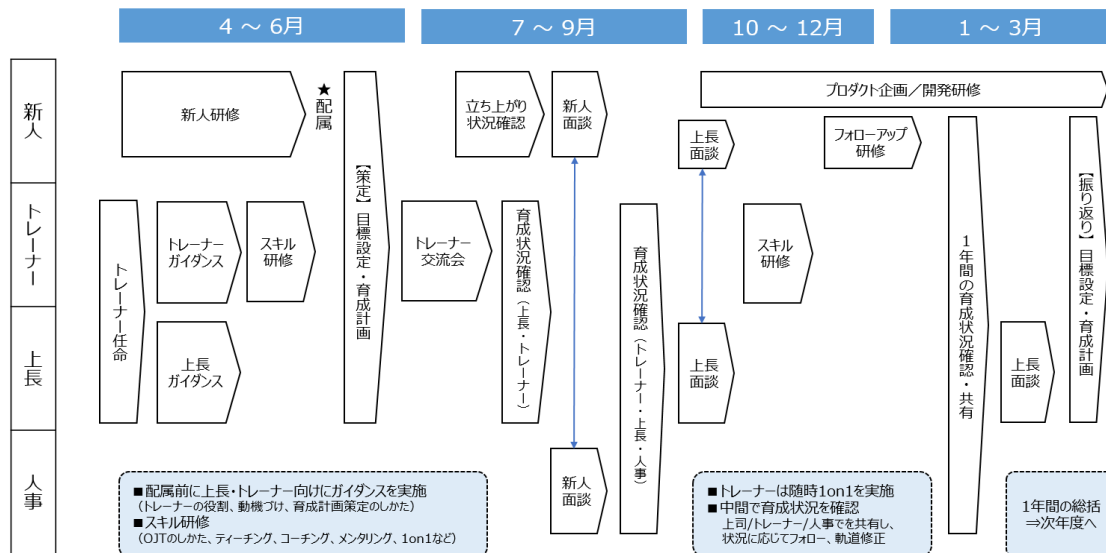
IIJグループ新卒入社数



人材育成の方針

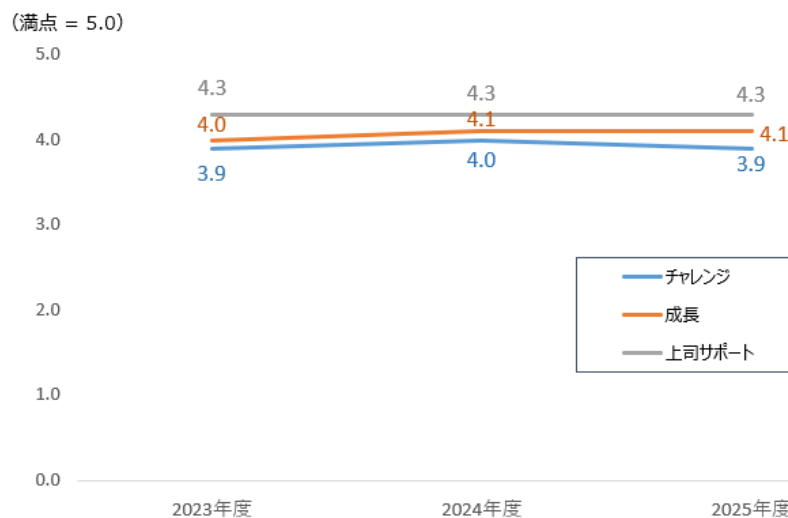
人材育成は業務を通じたOJT（On-the-Job Training）を根幹とし、従業員の年次や役割に応じた階層別研修、専門知識やスキル習得を目的とした部門別研修等ににて補充しています。当社グループは、国内最大規模のインターネットバックボーン構築・運用、斬新なサービスの自社開発・運用等の業務機会を提供することが、意欲的な技術者層のモチベーション向上に繋がるものと考えております。営業職はネットワーク・システム等の知識が必要となりますが、技術基礎研修、IIJサービス理解研修やサービス理解テスト等により、これら知識の習得・定着を図っており、営業活動を通じたOJTを補充しております。営業部門主催によるトップフォーマーの営業アプローチ・成功提案事例等を共有する勉強会等もあり、多くの文系出身者の営業が活躍しております。当社の新卒従業員はこれら業務における上司からの指導に加え、OJTトレーナー研修を受講した上司以外の従業員と個々の特性・志向を勘案した能力開発目標を設定し、一年を通して早期に自律的な業務遂行ができるためのサポートを受けます。2018年度以降、毎年100名を超える従業員がOJTトレーナー研修を新たに受講し、トレーナー経験者は年々増加しております。これら人材の増加は全社的なOJTレベルの向上に繋がるものと考えております。

OJTトレーナー制度概要



当社は、若手従業員の育成が非常に重要と認識しており、OJTが有効に機能しているかを測る指標として、年次の従業員意識調査における若手従業員の「チャレンジ」、「成長」、「上司サポート」（※3）に関する評価結果を重要視しております。当社はこれらの指標の総合が3点台後半以上となるように評価結果の要因分析、改善対応に努めており、今後もそれを継続してまいります。

IIJ（単体）OJT評価指標



（※3）従業員意識調査は年1回実施されるエンゲージメント調査（約50項目）であり、各項目は1（そう思わない）、2（どちらかというと思わない）、3（どちらともいえない）、4（どちらかというと思う）、5（そう思う）の5段階で評価がなされます。OJT評価指標「チャレンジ」、「成長」、「上司サポート」は、以下の要素を包含する設問に係る評価結果となります。

- 「チャレンジ」：チャレンジ支援、新しい発想・提案の受容、再チャレンジできる風土等
- 「成長」：現在の仕事での成長実感、成長支援の仕組み・制度等
- 「上司サポート」：上司・先輩からのアドバイス、上司満足度等

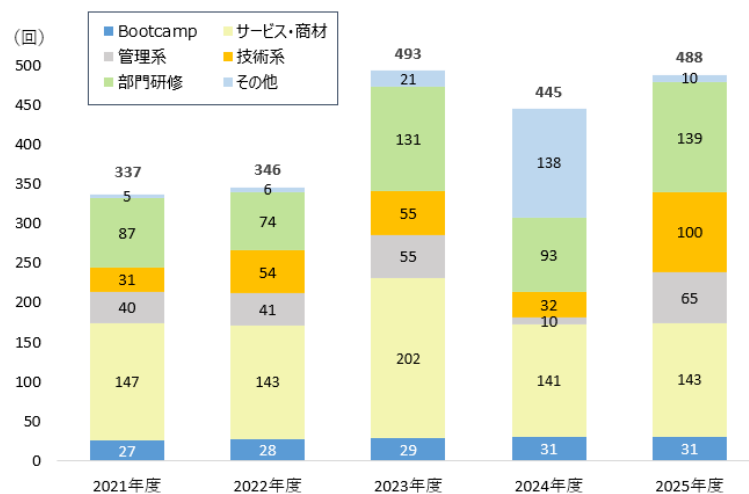
なお、これらの3指標について男女別で見ると女性の方が掲載年度において若干高い結果となっております。

当社はOJTを補完する新人研修（約1カ月間のビジネス基礎研修、技術職は追加で約1ヶ月間の技術研修等）、新任管理職・役員研修（課長・部長・役員向け組織運営・部下育成・意思決定等の研修）、階層別研修（リーダーシップ・マネジメント研修）、専門スキル開発（営業研修、技術研修、IIJサービス理解研修等）、グローバルキャリア開発（海外トレーニー制度、グローバルキャリア制度等）に加え、各部門主催による勉強会・研修に参加する従業員も多く、部門の垣根を超えた活発な人材交流とともに自律的な能力開発がなされています。

各部門主催による主な勉強会・研修

IIJ Bootcamp	様々な技術が登場した経緯や特徴の違う代替技術等に関する座学に加え、TA（Teaching Assistant）のサポートを受け、実際にツールやフレームワークに触ることにより、実践的なスキル習得を目的とした若手技術者向け勉強会
新人技術研修	各技術・サービス領域における社内第一人者が講師を務め、当社での業務遂行に必要な技術・業務知識等の習得を目的とした新卒技術者向け勉強会
IIJ Sales Bootcamp	集合研修やトレーニングコンテンツによるインプット、OJTでの営業活動の実践、成果に対する評価を体系的に連動させ、入社後1年で目指す姿・状態に到達させる新卒入社営業職向けオンボーディングプログラム
IIJサービス理解研修	インターネット接続、クラウド、セキュリティ、モバイル/IoT等のテーマ毎に、IIJサービスのラインアップ・特徴、基礎的な技術概念、業界動向等を体系的に学ぶ基礎研修
その他の部門研修	プロジェクトマネジメント研修（プロジェクト計画、リスク評価・管理、監視・コントロール手法等）、ITサービスマネジメント研修（作業品質向上、運用の継続的改善を目的とした分析方法等）、成功事例共有会等

IIJ（単体）勉強会・研修等の開催回数



- (※) Bootcamp: 技術者向けハンズオン研修
- (※) サービス・商材: 主に営業・技術向けのIIJサービス・その他商材の勉強会
- (※) 管理系: 管理部門主催（情報セキュリティ、財務会計研修等）の研修
- (※) 技術系: 技術情報の勉強会
- (※) 部門研修（自部門向け研修）: プロフェッショナルサービス技術研修、Sales Bootcamp等
- (※) その他: 外部講師による講演会等

また、キャリア申告制度（※4）や公募型の兼務制度であるセレクトジョブ制度（※5）等によるキャリア形成支援、担当業務から1年間離れて新技術の追求や新サービスのアイデア実現を目指すテックチャレンジ制度、専門領域での能力発揮を追求するエキスパート職の設置、タレントマネジメントシステムを活用した適材・適所な役割配置等の人事施策により、個々の従業員の経験・スキル等を勘案したキャリア開発・役割発揮をサポートしております。

（※4）従業員が今後のキャリアの方向性を年1回申告し、上司・人事部が中長期的な視点での人材育成や異動・配置等を検討する制度。

（※5）従業員は各部門の公募（2023年度：61部門が参加）に応募し、他部門での半年間の兼務（目安：業務時間の20%）を通じて、未経験業務へのチャレンジや部門を跨いだミッション遂行を通じて多様な経験を積むことができる制度。

人事制度

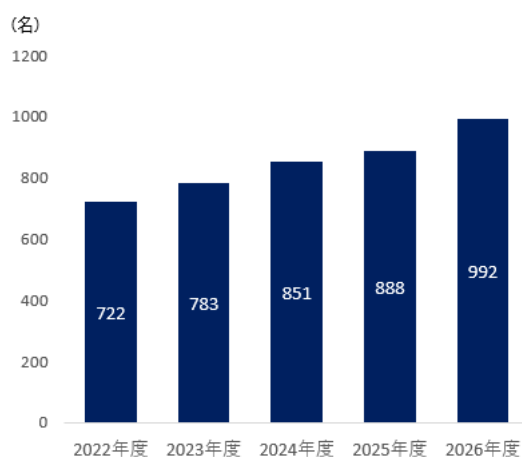
当社は社員の成果や貢献を適切に処遇する仕組みと、仕事を通じた自己実現につながる教育支援環境を整備しています。

人事制度

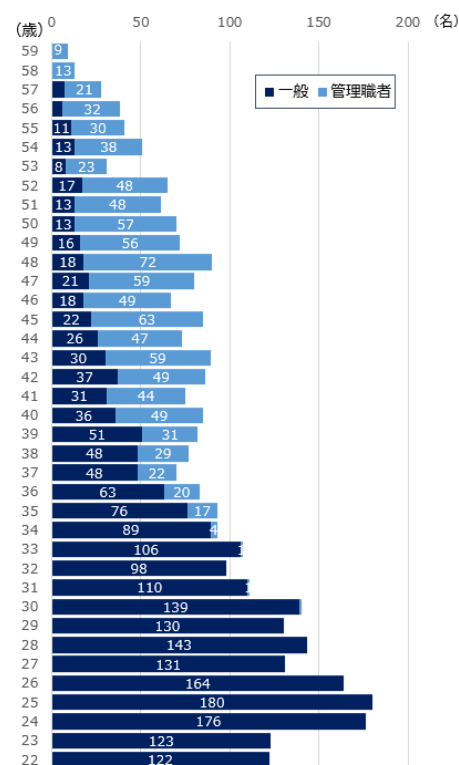
評価・報酬の方針

当社グループは、属性の別に依ることなく、多様な人材を受け入れ、様々な視点や価値観を尊重しながら、能力重視の人材活用・登用を実践しております。当社グループは事業規模・領域拡大による従業員の増加とともに、事業環境に最適な組織新設・改編等を柔軟に実施しております。組織における重要ポジションは継続して増加しており、今後も増加することが見込まれます。そのような状況のなか、自由闊達かつフラットな当社の気風は若手従業員の活躍を後押ししており、新卒入社従業員が30代前半から課長、30代半ばから部長等の重要役職に登用されるケースもあります。

IIJ（単体）管理職者数推移



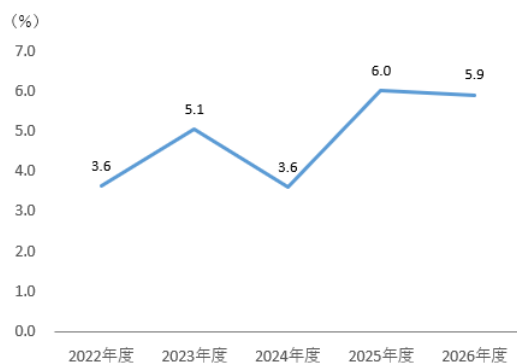
IIJ（単体）年齢別管理職者数（2026年4月現在）



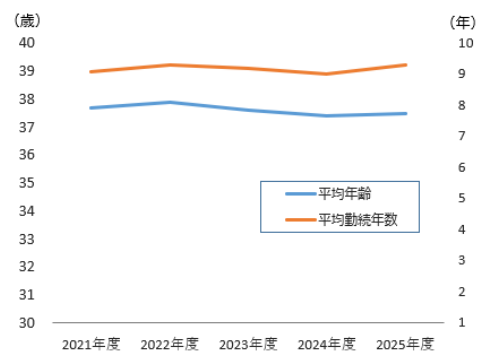
当社の評価・報酬制度の根幹として、従業員は現在の業務内容や貢献度等に応じた役割・グレード設定がなされます。報酬は、その役割・グレードに基づき決定される「基本給」と半期毎の業績評価に基づき決定される「業績賞与」にて構成されます。当社グループは中長期での事業成長と役割発揮を重視し過度に短期的業績で報酬全体に影響を与えるのではなく、業績変動は一定範囲で役割・能力に応じた報酬体系を基本とし、今後もそれを継続してまいります。

当社は事業成長に合わせた給与水準見直しを適時実施しており、2026年度において、2025年度に続き、新卒従業員給与及び既存従業員の給与レンジの改定（※6）をしております。

IIJ（単体）昇給率推移



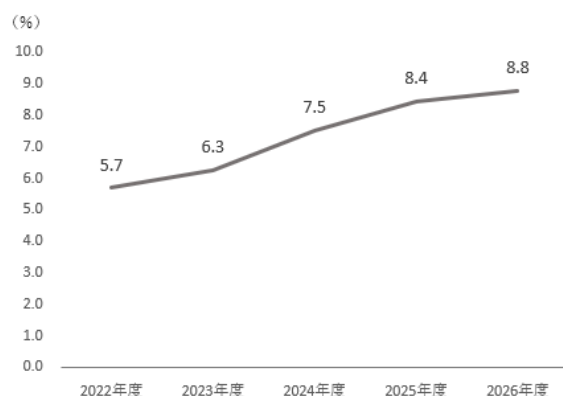
IIJ（単体）平均年齢及び勤続年数の推移



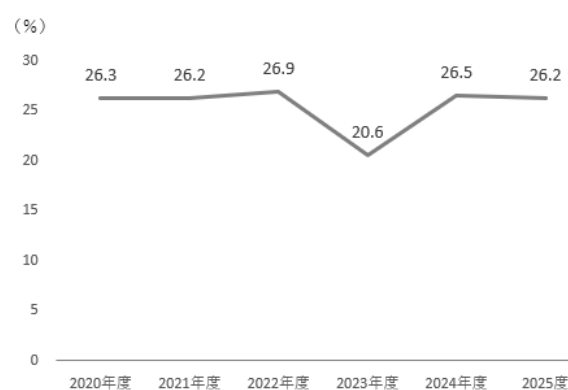
(※6) 詳細は[こちら](#)をご参照ください。

当社グループは、技術・サービス部門に従事する従業員が全体の約7割を構成し、その多くは女性比率が低い理工学を専門分野とする大学他より採用しており、女性比率が低い特性があります。近年、当社の女性採用比率（中途・新卒）は増加しており、従業員女性比率の増加とともに、女性管理職比率（※7）も増加していくと想定しております。2026年4月現在、当社の女性管理職比率は8.8%となり、2026年度目標である8%以上を前倒して達成いたしました。

女性管理職者比率推移



IIJ（単体）女性採用比率推移



(※7) 各事業年度の4月1日時点の当社全管理職に占める女性管理職の割合

社内環境整備の方針

当社グループは従業員が心身ともに健康で安心・安全に働き続けられる環境及びワークライフバランス実現を支援するための環境の整備に積極的に取り組んでおります。

➤ 安心・安全な労働環境の整備とワークライフバランスの実現

IIJグループ 中期計画 FY2024-FY2026及び中長期ビジョン

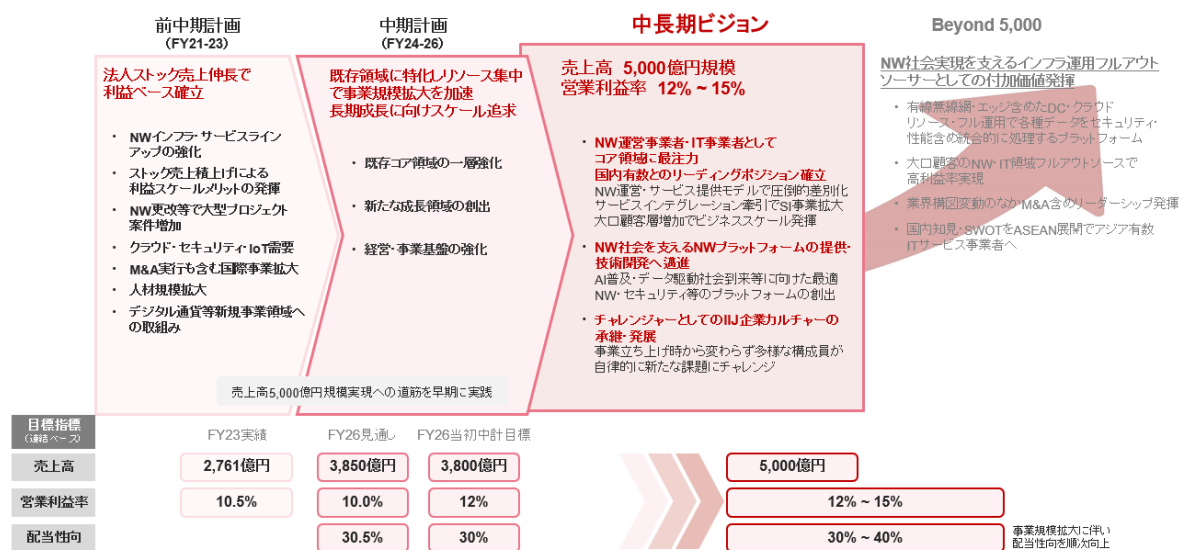
- 業績目標

	連結指標	2027年3月期
事業拡大	売上高（売上収益）	3,800億円規模 (2027年3月期見通し 3,850億円)
収益性	営業利益	460億円規模 (2027年3月期見通し 385億円)

(※) 2027年3月期の業績見通しについては、2026年5月14日発表の [2026年3月期決算短信PDF](#) をご参照下さい。

- 中長期ビジョン及び新中期計画の位置付け

当社グループの経営理念を有効に全うしていくためには、当社グループの強みを生かしつつ、事業規模を継続拡大していくことが大変重要であると認識をしております。日本企業及び官公庁等のIT利活用は、コロナ禍を契機により急進し、中長期での継続した市場拡大が見込まれます。そのような状況認識のもと、当社グループは、中長期で目指すべき通過点の姿として、次ページのとおり、連結売上高5,000億円規模への伸長を含む中長期ビジョンを定めました。新中期計画は、この中長期ビジョンに至る重要な道筋・プロセスとして、実現していくべき3カ年の成長プランと位置付けております。



- IIJグループ 中期計画 FY2024-FY2026

新中期計画において、事業の根幹の絵姿は従前から不変であります。多様な人材が集い自律的に能力を発揮してインターネットとの通信インフラストラクチャー・環境を日本に創り上げたとの自負のもと、高いインターネット関連技術を源泉に、付加価値の高いネットワークサービスを開発し、インターネット関連のネットワーク及びシステムを安定的に運用し、システムインテグレーションの機能も併せて、日本企業等のIT需要に応え支えていくことで、役割を発揮し事業拡大を目指してまいります。特に、2024年3月期におけるサービスインテグレーションでの複数年大型ネットワーク構築案件の増加等の事業状況を鑑み、既存のコアビジネス領域の徹底的な強化により、売上伸長の加速とそれによる利益水準の向上を図ります。また、次の成長に向けた新規領域への取り組みにも注力いたします。それらを実現するための事業基盤の強化にも継続して取り組んでまいります。具体的な内容及び目標は、以下のとおりです。

■ 既存・コアビジネス領域の徹底的な強化：

- I. サービスインテグレーションとの態様で、多業種の顧客層から大型のネットワーク構築・運用等の案件を獲得し遂行していくこと等で、複合取引をより進化させ、大型取引の規模、顧客数を増加します。システムインテグレーションにて売上伸長を牽引いたします。
- II. サービスインテグレーションからの派生も含め、ネットワークサービス等の法人ストック売上の継続的な積み上げによりスケールメリットを発揮し、利益率を向上していきます。ネットワークサービスにて利益伸長を牽引いたします。
- III. 高度・複雑化するセキュリティ需要等に対応し、付加価値の高いサービスラインアップをより充実していきます。DX実現時代に向けて、安定した高品質のネットワーク運用の差別化を継続発揮してまいります。AIやデータレイクの利活用を支えるプラットフォームサービスを創出していきます。
- IV. 事業拡大を支える最適なネットワークインフラストラクチャーの継続拡張を実践します。将来のサービス用設備を収容するため、白井データセンター3期棟への建設投資を実行します。

■ 次の成長に向けた新規領域への取り組み：

- I. データ駆動社会実現に向けた事業化：前中期計画で着手しているデータの分析・流通とのサービス領域を拡張し、社会に有用なデータを能動的に生成し、それを多目的に円滑に作用させる情報流通の仕組みを整え、運用するとの事業モデルの構築を検討、着手いたします。
- II. デジタル通貨（DCJPY）の普及：当社の持分法対象である㈱DCPにて現在展開しているデジタル通貨への取り組みが、実現案件として社会のなかで普及し始め更なる市場成長を展望している状態を目指します。

■ 事業基盤の強化：

- I. 人材採用の強化・拡充を継続し、組織・事業を牽引する次世代マネジメント人材の育成に注力します。
- II. 人件費等も含む原価高騰等の外部要因に対して、価格転嫁も含めて的確に対応していきます。
- III. 引き続き、主として事業成長に必要な人員リソース追加獲得等のためのM&A機会を追求していきます。
- IV. 従前より推進しているサステナビリティを重視した経営、成長に沿うガバナンスの強化等により的確に取り組めます。新中期計画の達成に連動する役員報酬制度を導入し、株主と企業価値向上をより共有していきます。
- V. 案件大口化等に伴い、特にシステムインテグレーション分野の事業・プロジェクト管理手法の高度化を実現します。大型のデータセンター向け設備投資及び運転資金の増加等に対応し、適切なキャピタルアロケーション及びバランスシートマネジメントを遂行します。

- キャピタルアロケーション

キャピタルアロケーション（FY24～FY26、3年間累計）				
キャッシュイン	キャッシュアウト		概要	
利益水準下振れ推移で 想定より低下 事業から創出 されるキャッシュ 約1,340億円 ^(*) 借入調達 ～650億円程度	投資：約900億円 恒常的NW等設備投資 約510億円 スケールメリット享受しながら 安定推移 白井3期棟建設 約300億円 自社サービス設備中心に 収容 戦略 投資		白井3期棟 建設 ◆ 新中期計画期間内に3期棟建設着工・遂行タイミングは未確定 ・ 1期棟：投資額 約83億円、ラック数 約700、19年5月稼働開始 ・ 2期棟：投資額 約128億円（予定）、ラック数 約1,100、23年7月稼働開始	計画通り遂行中
	大型複合案件増加に伴う 運転資金・リース債務増加		戦略投資 ◆ 具体的な投資内容は今後検討・一定投資枠での想定	
	配当性向30% 配当金		運転資金・ リース債務増加 ◆ 複数年大型SI案件増加に伴う仕掛・前払等増加 ・ 大型案件の売上計上恒常化で運転資金影響は徐々に低減	
	長期借入の予定返済		M&A ◆ 借入余力でM&A順次実施と想定 ・ D/Eレシオ・財務規律維持、追加借入での上限700億円規模	遂行候補案件があるが M&A実施は未定
	M&A		～700億円程度	

（※）「IIIグループ 中期計画 FY2021-FY2023」の振り返りにつきましては、「IIグループ 中期計画 FY2024-FY2026 及び中長期ビジョン策定のお知らせ 1. 前中期計画の振り返り」[\[1\]](#)をご参照下さい。

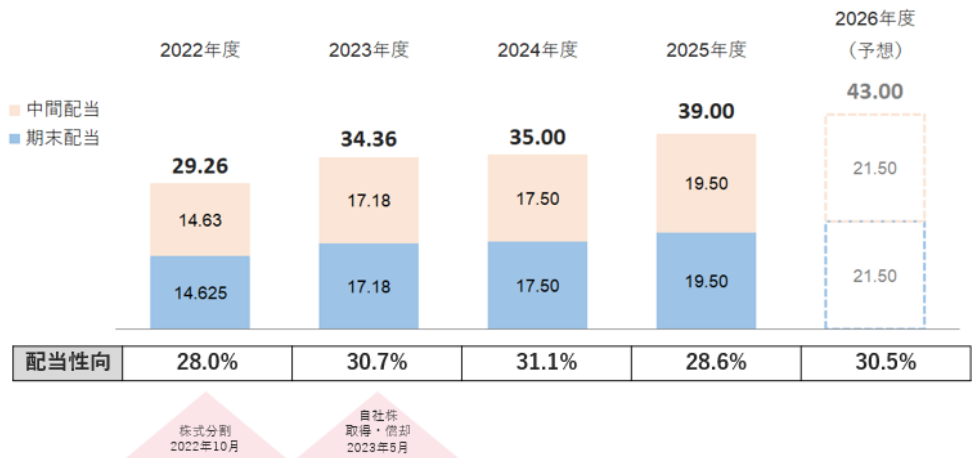
株主還元の基本方針

DX（デジタルトランスフォーメーション）の必要性が提唱されているように、法人ITマーケットの需要は益々拡大すると想定しております。そのような成長市場において、当社グループの事業は成長途中であり、今後も売上高伸長と営業利益率を向上しながら事業規模を拡大することで、継続的な企業価値向上を実現していきたいと考えております。当社は株主還元として実質30%程度の配当性向を継続しており、一株当たり配当金は、ここ数年、利益成長に伴い大きく増加しております。今後も他社に先駆けた事業投資や成長を加速させるM&A機会への機動的な対応等のための一定の内部留保と財務体質の強化にも配慮しながら、利益向上に伴う株主還元増加を進めてまいりたいと考えております。

FY2024-FY2026中期計画期間においては、更なる事業成長に向けた設備投資及び大型案件の獲得増加に伴う運転資金の増加等を勘案したキャピタルアロケーションの計画に基づき、配当性向は30%を目安といたします。詳細は2024年5月10日付の適時開示「[ITグループ 中期計画 FY2024-FY2026 及び中長期ビジョン策定のお知らせ](#)」をご参照ください。

一株当たり配当金推移

(2026年5月現在)



投資についての考え方

事業投資について

当社グループは、成長市場で競争優位性を発揮し続けるためにも、事業規模の拡大が重要と考えており、経営指標として売上高成長率を意識しています。売上高の伸長とともに利益率は向上していく傾向にあり、営業利益及び営業利益率も重要な指標と認識しており、それらはROEとも連動しています（FY25 ROE：16.2%）。また、資本コストの指標として年度毎にWACCを算出し、社内で周知・徹底のうえ、事業投資の判断に利用しております。新規技術領域等への新たな事業投資・サービス開発が順次必要となり、これらを積極的に推進しておりますが、事業投資にあたっては、事業性質により投資回収期間の想定は柔軟にIRR等で評価し、ポートフォリオとして既存コア・成長・新規事業領域等へのリソースアロケーション等も踏まえて、取締役会・経営会議等で判断され、その回収状況は事業・サービス毎にモニタリングしております。

■ 設備投資について

当社グループの主な設備投資は、ネットワーク・クラウド・データセンター等のサービス運営設備やシステムインテグレーション提供にて必要となるお客様向け設備の取得及びソフトウェア開発等です。市場規模拡大を見据え、2017年度以前に設備投資水準を増加して以降、データセンター建設を除く定常的な設備投資は同水準で推移しています。ネットワークインフラは継続的に拡大し、サービス開発にも積極的に取り組んでおりますが、近年は定常的な投資額と償却費がバランスし安定推移しており、当面そのような状況が継続すると想定しております。

■ M&Aについて

当社グループは、これまで自己成長が主軸ではありますが、過去に、WANサービスを提供する（株）IJJグローバルソリューションズ（2010年AT&Tから事業買収）、技術人材を獲得・供給する（株）IJJプロテック（2014年M&A）、シンガポールの現地有カシステムインテグレーターであるPTC SYSTEM（S） PTE LTD（2021年M&A）及びマレーシアのシステムインテグレーターであるPTC SYSTEMS SDN.BHD.（2023年 M&A）とのM&AとPMI（買収後統合プロセス）を実行し、グループ事業連携の効果を発揮しております。更なる成長実現に向けた人的リソースの獲得は非常に重要であり、自社でのリソース確保を補完するものとして、M&Aを継続追求していきたいと考えております。

■ 政策保有株式について

当社は、事業戦略や取引先との事業上の関係及び当社の資本コスト等を総合的に勘案し、当社の企業価値を高め株主の利益に繋がると考える場合に、限定的に上場株式を政策保有株式として保有することがあります。政策保有株式につきましては、2017年度に2銘柄、2019年度に1銘柄の一部、2023年度に2銘柄（内、1銘柄は一部）、2025年度に2銘柄を売却し、2026年3月末時点で3銘柄（貸借対照表計上額103.8億円）を保有しております。当社は、各出資先との継続取引から生じる収益及び配当が資本コストを超過しているかを個別銘柄毎に年次で検証のうえ、取引の推移及び展望と資本コストに照らした事業貢献の観点で、政策保有株式の保有是非を判断しております。政策保有株式に係る議決権行使につきましては、発行会社の経営方針や状況及び議案内容を総合的に検討し、発行会社の中長期的な企業価値の向上に繋がるかどうか等の視点に立ち、判断を行います。

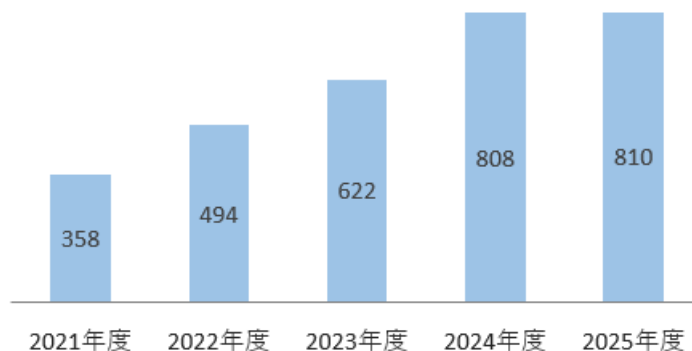
資本市場とのコミュニケーション

当社グループは成長途中であり、資本市場との密なコミュニケーションが非常に重要と考えております。経営陣自ら、国内外のロードショー・カンファレンス・個別面談等で、株主・機関投資家・アナリストの皆様とのコミュニケーションを実施しています。

当社グループの情報を適正・適時・公平に開示するために、有価証券報告書・四半期報告書・決算短信・決算説明資料・株主総会招集通知・統合報告書等の重要情報の日本語・英語の同日開示を実践しております。また、当社グループと社会の長期かつ持続的成長のため、ESG課題に取り組むことが重要と認識しており、TCFDに基づく情報開示、ダイバーシティの考え方・目標等の開示拡充するとともに、ESG評価機関との直接のコミュニケーションも継続しております。

➤ 決算説明会等での主な質疑応答内容

IR面談実績



IIJのサステナビリティ経営・目標

IIJのサステナビリティへの考え方

IIJは国内初のインターネット接続事業者として、創業以来、日本のインターネットインフラを創り、支え、未来のネットワーク社会の実現に貢献するという経営理念を掲げ、安定したネットワークと信頼性・付加価値の高いサービスを提供してきました。

持続的なイノベーションこそが新たな産業、経済、暮らしを創出できるという強い信念をもって事業を展開し、インターネット技術においてイニシアティブを取り続ける一方で、社会インフラを担う立場としての責任も認識し、24時間365日安定したネットワークサービスを提供することで、社会・企業システムの基盤を支えています。

近年、気候変動や資源・エネルギー問題、多様性や機会均等、少子高齢化、医療過疎、データプライバシー問題等、多岐にわたる環境・社会問題が顕在化しており、国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」では企業にもこれらの社会課題への積極的な取り組みが求められています。

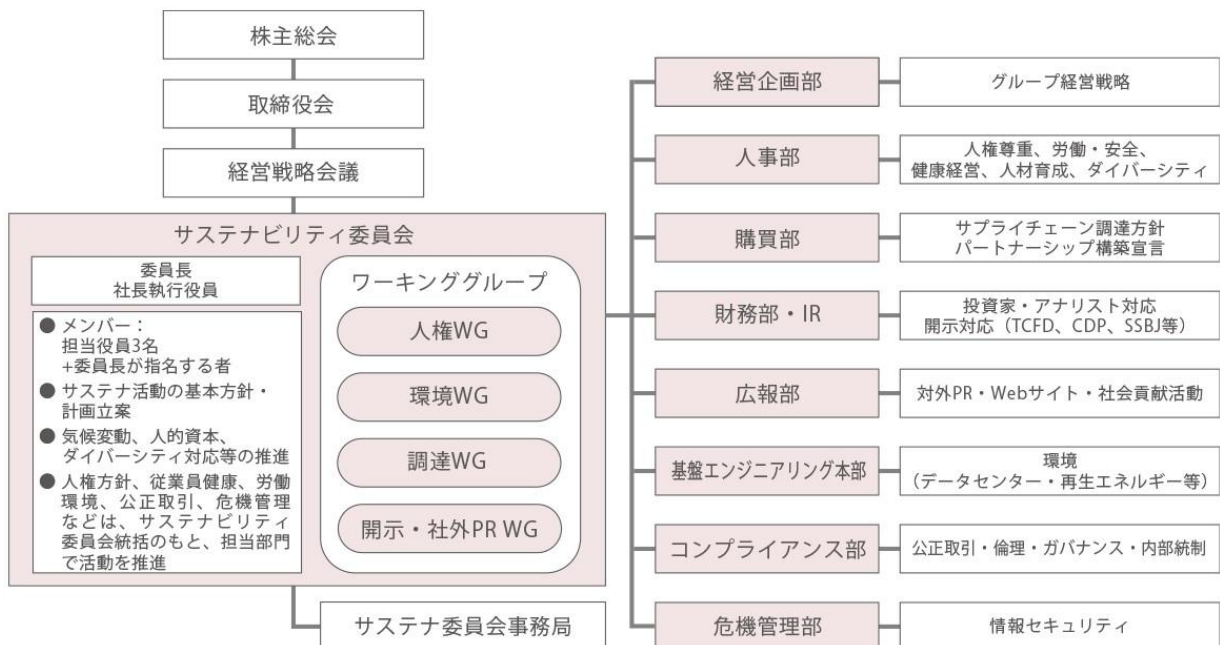
インターネット技術を基盤としたICTは、世の中の仕組みをも根本から変えられる技術です。当社は、IoTやAIに代表される新たな技術の活用により、SDGsをはじめとする社会課題の解決にも大きな貢献ができと考えています。

経営理念を軸に、信頼性や付加価値の高いネットワークサービスの開発・提供を通じ、持続可能な社会の実現に貢献していきます。

➤ [経営理念および中期計画](#)

推進体制

IIJは、サステナビリティ委員長を筆頭に、委員会と各部署が連携しながら全社一体となってサステナビリティ活動を推進しています。



重要課題の特定

SDGsをはじめとした社会課題に対するICT産業への要請・期待の大きさと、社会課題に対するIJのポジティブ・ネガティブインパクトの大きさの2つの視点から、3つの重要課題とそれに紐づく8つの取り組みテーマを特定しました。

今後はこの重要課題に優先的に取り組み、進捗や成果についての情報開示を行っていきます。



重要課題1

技術革新によりネットワークインフラの進化を牽引し、様々な社会課題の解決に貢献

取り組みテーマ

ーイノベーションの創出

より良いネットワーク社会を実現する技術革新を創出し続け、新たな価値と利用形態を提案

ー事業を通じた社会課題の解決

労働人口の減少、生産性の向上、健康と福祉の増進など、社会課題解決に役立つインターネットサービスを提供

ー気候変動への対応

データセンターなどでの省エネと再エネ活用によるカーボンニュートラル実現に向けた取り組みの実施、人・モノの移動に伴うCO2排出量の削減・省資源など、インターネットサービスによる環境貢献を推進



重要課題2

社会インフラを支える、安全で強靱なインターネットサービスの提供

取り組みテーマ

ーネットワークの強靱化

産業、教育、暮らしの基盤として、自然災害や事故、サイバー攻撃に負けない、強靱なバックボーンネットワークの構築と運用

ーセキュリティとプライバシー保護

すべての利用者のプライバシーとセキュリティが、「あたりまえ」に守られている世界を目指す



重要課題3

多様な才能と価値観を持つ人材が活躍し、積極果敢に挑戦できる場の提供

取り組みテーマ

ーダイバーシティの推進

性別、国籍、障がいの有無などに関わらず、すべての従業員の価値観が尊重され、能力を発揮できる職場環境の提供

ー人材の育成

従業員の自己実現や学習意欲、社会貢献のモチベーションを最大限尊重し、支援する風土の維持・発展

ー安心・安全な労働環境の整備とワークライフバランスの実現

心と体の健康を守る職場環境を提供するとともに、従業員の仕事と家庭生活の両立を支援

重要課題特定プロセス

IIIは、以下のプロセスで重要課題を特定しました。

重要課題特定プロセス

STEP1 課題の抽出

27の部門・関連会社にサステナビリティに関するアンケートを実施するとともに、SDGsに掲げられた17目標169のターゲットに代表されるグローバルな社会課題をベースに課題を洗い出しました。

STEP2 課題の評価

STEP1で抽出した課題について、コロンビア大学「ICT & SDGs Final Report」や総務省「デジタル変革時代のICTグローバル戦略懇談会報告書」等を参考に、社会要請・期待を把握するとともに、当社経営理念及び中期計画との整合性、ポジティブ・ネガティブインパクトを加味して重み付けを行いました。

STEP3 妥当性の検証

STEP2で重み付けを行った課題に対して、有識者と当社役員とのダイアログを通じて、妥当性を検証し重要課題を特定しました。

主なご意見

- 重要課題を企業がどのように定義しているのかを明確化することが必要。経営理念との整合性をより意識していくことで、一貫性のある重要課題の特定につなげることができる。
- ICT業界では、データセンターを中心としたエネルギー使用量削減、データプライバシーに代表される人権問題、長時間労働やメンタルヘルス等が主な課題として挙げられる。
- 今後は、重要課題に対する目標を設定し、PDCAを回して達成度を確認していくとともに、中期計画をはじめ、いかに経営に統合していくかが重要である。
- 日本の新しい通信インフラ市場を切り拓いた企業として、持続可能な社会の中でのインターネットのあり方を示し、パイオニア的な役割を担っていただきたい。



一般社団法人サステナビリティ経営研究所
代表理事
富田秀実氏

富田氏のプロフィール

ロイドレジスタージャパン（現 LRQAサステナビリティ株式会社）にて主席コンサルタントおよび代表取締役を務め、現在は一般社団法人サステナビリティ経営研究所 代表理事として、サステナビリティ経営やESG分野を中心に助言・支援活動を行っている。ソニーグループでの長期的なCSRマネジメントおよび様々な国際規格等の策定プロセスの参画など、多面的かつ豊富な経験を持つ。

SDGsへの貢献

IIJは、将来、世の中の仕組みを変えるインフラになるであろうインターネットを、日本に普及させようとした技術者たちが設立した会社です。創業時から「インターネット技術で世界を変える」という信念にもとづき事業を行っています。

「世界を変える」ための目標を掲げたSDGsと共通する考え方を持つIIJの提供する商品・サービスとは親和性が高く、IIJは事業活動を通じてSDGsの多くの目標に貢献できると考えています。なかでも、重要課題と特に関連性の高い以下の目標・ターゲットについては、達成に向けて、よりいっそう大きな影響を与えられるよう取り組みを拡大していきます。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



IIJの重要課題と貢献するSDGs

重要課題	関連するSDGsのターゲット
 技術革新によりネットワークインフラの進化を牽引し、様々な社会課題の解決に貢献	 3.8 ユニバーサル・ヘルス・カバレッジへの貢献  7.2、7.3 再生可能エネルギーの普及とエネルギー効率の向上  8.2、8.4、8.10 資源利用の抑制と金融へのアクセス拡大を含む経済成長の両立  9.5 オープンイノベーションの拡大  13.1 気候変動による災害等に対する適応力を強化
 社会インフラを支える、安全で強靱なインターネットサービスの提供	 9.1 持続可能で強靱な地域・越境インフラ開発  11.a、11.b 都市部と農村部間の連携の強化と災害時リスク管理体制の支援  16全体 平和で包摂的な社会の推進
 多様な才能と価値観を持つ人材が活躍し、積極果敢に挑戦できる場の提供	 4.4 技術的なスキルの向上  5.b 女性のエンパワーメント促進へのICT技術活用  8.5 雇用平等と労働環境良化の推進

サステナビリティ目標

サステナビリティ目標を以下のように設定しております。

マテリアリティ	実施内容		サステナビリティ目標		
			指標	2025年度実績	関連情報
技術革新によりネットワークインフラの進化を牽引し、様々な社会課題の解決に貢献	気候変動への対応	再生可能エネルギーの利用（※1）	2030年度におけるデータセンター（Scope1・2（※2））の再生可能エネルギー利用率を85%まで引き上げ	65% （松江データセンターは再生可能エネルギー利用率100%を継続）	TCFD提言に基づく情報開示 - 指標と目標
		エネルギー効率の向上	2030年度まで技術革新の継続により、データセンターのPUE（※3）を業界最高水準の数値（※4）以下にする	・松江データセンター：1.38 ・白井データセンター：1.31 （業界最高水準PUE値1.4以下を継続）	
多様な才能と価値観を持つ人材が活躍し、積極果敢に挑戦できる場の提供	人材の育成		従業員意識調査における若手従業員のOJT評価指標「チャレンジ」、「成長」、「上司サポート」（※5）に関する評価指標の総合が3点台後半以上	・チャレンジ 3.9 ・成長 4.1 ・上司サポート 4.3	人材育成の方針
	ダイバーシティの推進		2026年度の女性管理職比率 8%以上（2027年度目標を1年前倒し）	8.8% （2026年度目標8%以上を早期に達成）	女性管理職比率推移
	多様な働き方・ワークライフバランス等の推進		男女の育休利用率 男性10%以上 女性90%以上	男性 61.8% 女性 100.0%	ワークライフバランスの実現

（※1）再生可能エネルギー：非化石証書活用による実質再生可能エネルギーを含む

（※2）Scope1・2（自社での温室効果ガス排出）：自社での燃料の使用や工業プロセスによる直接排出及び自社が購入した電気・熱の使用に伴う間接排出（GHGプロトコル定義）

（※3）PUE（Power Usage Effectiveness）：データセンター施設全体のエネルギー使用量÷IT機器のエネルギー使用量

（※4）業界最高水準のPUE値：PUE 1.4 以下（2025年3月末時点において、資源エネルギー庁はデータセンター業におけるベンチマーク指標及び目指すべき水準をPUE1.4以下と設定し、達成事業者は省エネルギー優良事業者とみなされる）

（※5）従業員意識調査は年1回実施されるエンゲージメント調査（約50項目）であり、各項目は1（そう思わない）、2（どちらかというと思う）、3（どちらともいえない）、4（どちらかというと思う）、5（そう思う）の5段階で評価がなされます。OJT評価指標「チャレンジ」、「成長」、「上司サポート」は、以下の要素を包含する設問に係る評価結果となります。

「チャレンジ」：チャレンジ支援、新しい発想・提案の受容、再チャレンジできる風土 等

「成長」：現在の仕事での成長実感、成長支援の仕組み・制度 等

「上司サポート」：上司・先輩からのアドバイス、上司満足度 等

技術革新によりネットワークインフラの進化を牽引し、 様々な社会課題の解決に貢献



基本的な考え方

IIJは、一部の研究者や専門家だけが利用していた「インターネット」を誰もが利用できる商用サービスとして提供するというミッションのもと、国内で初めてとなるインターネット接続サービスを開始しました。

以降、「メールやWebのセキュリティ対策」、「モバイルサービス価格の適正化」など、様々な社会課題の解決に貢献してきました。こうしたフロンティアスピリットはIIJにとって最も重要な、企業としての原点ともいべきものです。

今日、インターネットは、個人が利用するSNS、eコマース、動画配信サービスから、企業の情報システム、行政や金融サービス、テレワーク、遠隔医療、災害時の情報共有まで、あらゆる領域に浸透し、重要な社会インフラの1つになっています。IIJはインターネットに関連する技術開発で常にイニシアティブを取り続け、ネットワークインフラの進化を牽引することで時間と空間の制約を無くし、利便性の向上、業務効率化、社会課題解決のためのデータ活用を推進していきます。

➤ イノベーションの創出

より良いネットワーク社会を実現する技術革新を創出し続け、新たな価値と利用形態を提案

➤ 事業を通じた社会課題の解決

労働人口の減少、生産性の向上、健康と福祉の増進など、社会課題解決に役立つインターネットサービスを提供

➤ 気候変動への対応

データセンターなどでの省エネと再エネ活用によるカーボンニュートラル実現に向けた取り組みの実施、人・モノの移動に伴うCO2排出量の削減・省資源など、インターネットサービスによる環境貢献を推進

オープンイノベーション・産学官連携の拡大

IIJにおけるすべての事業の基礎となっているインターネットは、世界各国の研究者・技術者・利用者からなる人々の集まり（コミュニティ）によって生まれ、発展してきました。インターネットを更に発展させるため、IIJは国内外のコミュニティをはじめ、大学などの研究機関、公的機関、民間企業と連携し、新たなイノベーションの創出に取り組んでいます。また、自社で開発された技術や、技術の商用化によって得られた知見を積極的に公開することで、新しい技術の普及を促進しています。

インターネットに関わるコミュニティへの参画

- インターネットソサエティ・IETFへの参画

インターネットソサエティ（Internet Society）は1992年に設立された国際非営利団体で、インターネットにまつわる技術の標準化、教育、ポリシーに関する議論を主導しています。IIJはインターネットソサエティの設立メンバーとして参加し、現在はゴールドメンバー企業として活動を支援しています。



インターネットソサエティと協調する組織であり、インターネットで利用される技術の標準化の議論が行われるIETF（Internet Engineering Task Force）においても、複数のワーキンググループにIIJのエンジニアが参加し、IIJが運用するインターネットの知見にもとづいた議論を行い、技術開発に貢献しています。



➤ [Internet Society \(ISOC\)](#) □

➤ [Internet Engineering Task Force \(IETF\)](#) □

産学連携への取り組み

- IIJ技術研究所

IIJのR&DセンターであるIIJ技術研究所には高い専門性を持つ研究者が在籍し、インターネットの現状の計測・分析や、次世代の技術の研究開発を行っています。また、世界各国のインターネット研究者との共同研究や、インターンの受け入れなども行っています。

➤ [IIJ技術研究所](#) □



- 大学との共同研究

大規模な商用インフラを運用する事業者として、実環境を利用した実証実験を大学と共同で行っています。

東京大学と共同で行った「プライベートLTE」「パブリックLTE」間で通信をシームレスに切り替えるための研究では、IIJが運用している商用のフルMVNO（※）基盤が利用されました。また、東京大学、APRESIA、富士通と共同で行った「Local5G/6Gモバイルシステムのオープンソースソフトウェア開発」では5G携帯電話網の中核技術である5Gコアネットワークの国産・低コスト化に成功しました。

これらの継続的な研究や開発によって、各種産業分野におけるローカル5Gの普及が促進されと考えています。

京都大学、東北大学などが実施した「次世代公衆無線LAN技術（Passpoint）を用いた5Gデータオフローディングに関する研究開発」では、フルMVNOとしてモバイルネットワークの提供および、SIM/eSIMの提供・技術支援を行いました。

（※）MVNO：Mobile Virtual Network Operatorの略。物理的な移動体回線網を自社では持たず、保有する他の移動体通信事業者（携帯電話事業者など）から借りて移動体通信サービスを行う事業者のこと。

フルMVNO：加入者管理機能（HLR/HSS）を保有・運営することで、自社独自のSIMカードを発行するなど、より自由なサービス設計が可能になるMVNO事業者のこと。

- 国内初！東京大学とIIJ、パブリックLTEとプライベートLTEの統合連携に関する実証実験を開始
- 次世代通信規格の素地となる5G中核技術の国産・低コスト化に成功
- 次世代公衆無線LAN技術（Passpoint）を用いた5Gデータオフローディングに関する研究開発を促進

- AIに関する取り組み

生成AIをはじめとしてAI技術は様々な分野で活用が進み、社会・産業を発展させる技術としてさらなる進化が求められています。こうしたAI技術を用いるサービスには膨大な計算処理を継続的かつ安定的に実行するコンピューティング基盤が不可欠であり、計算処理量に比例して増加する電力消費をいかに効率化するか、AIサービス基盤の演算能力を向上させるうえで最も重要な課題の一つです。この課題の解決のためにはAIアクセラレータ（演算装置）の電力あたりの演算性能の向上、データセンター基盤における電力供給の高密度化が求められており、IIJは株式会社Preferred Networks、国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）と共同で「超高効率AI計算基盤の研究開発」に取り組んでいます。また、AI用途のGPU搭載サーバなど発熱量が著しく高いIT機器の利用を見据え、白井データセンターキャンパスでは「水冷Ready設計」を採用した3期棟の建設を進めています。

- IIJ、自社サービス需要拡大に対応し「白井データセンターキャンパス」3期棟を増設
- 直接水冷方式高密度AIサーバをモジュール型データセンターへ実装し超高効率AI計算基盤技術の研究開発を加速

技術・知見の公開

オープンソースソフトウェアへの貢献

インターネット上で利用されるソフトウェアの多くは、特定の企業ではなく、有志の開発者が集まってできたコミュニティによって維持されています。IIJもこうしたコミュニティが開発するオープンソースソフトウェアを数多く利用するとともに、ソフトウェアの改良などを積極的にコミュニティに還元することで、オープンソースソフトウェアの機能及び信頼性の向上に貢献しています。また、Webサーバソフトウェア「NGINX（エンジンエックス）」と組み合わせて利用するアクセス制御機能や、文書の効率的な共有・管理が行えるソフトウェアを公開するなど、オープンソースソフトウェアをもとに、利便性の向上や業務環境の改善に役立つソフトウェアやツールを独自開発する活動も積極的に行っています。

- NetBSD 
- OpenBSD 
- IIJ、世界シェアNo.1のWebサーバソフトウェア「NGINX」向けLDAP認証モジュールを無償提供

社会課題の解決や業務改善のためのソフトウェア提供

当社は、ソフトウェア開発などの成果を社会に還元する「オープンソース活動」に賛同しています。従業員がサイバーセキュリティ対策や、日頃の業務改善のために開発したアプリケーションを無償公開することもその一環であり、社会課題の解決や他社や他組織での業務環境の改善に寄与しています。今後もオープンソースソフトウェアの開発・改良によって、当社のエンジニアが社会貢献を行なうことを支援してまいります。

- IIJ、DDoS攻撃に悪用されるマルウェア「Mirai」の解析ツールを開発しサイバーセキュリティ対策を行う事業者、アナリストに向け無償公開
- IIJ、Markdown形式の文章を手軽にプレビューできるアプリケーションを開発し、無償で提供開始

技術情報の発信

- IIR（Internet Infrastructure Review）、技術ブログ、IIJ Techチャンネル

IIJの技術を定期的に発信する技術レポート誌「Internet Infrastructure Review」や、最新情報をタイムリーに紹介する技術ブログ「IIJ Engineers Blog」を通じた積極的な情報発信も行っています。また、YouTubeの「IIJ Techチャンネル」では、IIJグループの開発・運用にまつわる情報を中心に幅広い技術テーマで発信しています。



➤ [Internet Infrastructure Review](#)

➤ [IIJ Engineers Blog](#) 

➤ [IIJ Techチャンネル](#) 

- 社員による講演

IIJの技術者はセミナーや講演会等において、IIJの持つ技術力や独自研究開発、最新の技術動向について広く発信し、インターネットの発展に尽力しています。

➤ [講演活動](#)

- 技術イベントへの参画

IIJは、各種技術イベントへの参画を通じて、技術的知見の共有や対話を推進し、インターネット基盤を支える技術コミュニティの発展と人材の育成に貢献しています。

➤ [JANOG - IIJ Engineers Blog](#) 

➤ [スクラムフェス名古屋 - IIJ Engineers Blog](#) 

➤ [ICTトラブルシューティングコンテスト2025 - IIJ Engineers Blog](#) 



インターネットにまつわる諸課題への対応

インターネットの普及は社会の発展に寄与していますが、一方で様々な課題も発生しています。IIJは安心・安全なインターネット社会の実現のため、業界団体とともにイニシアティブを取って活動しています。

インターネットセキュリティへの取り組み

安全なインターネット社会の構築と利用者の保護を図るため、情報セキュリティレベルの向上やサイバー攻撃の実態調査及び防御策の検討・実証などに寄与する団体に参加し、インシデント（※）対応力の向上に努めています。

（※）インシデント：ウイルス感染や情報漏えいなど、重大事故につながる恐れがある事象のこと。

➤ [FIRST（Forum of Incident Response and Security Teams）](#) 

➤ [一般社団法人ICT-ISAC](#) 

➤ [NPO法人日本ネットワークセキュリティ協会（JNSA）](#) 

➤ [日本セキュリティオペレーション事業者協議会（ISOG-J）](#) 

➤ [一般社団法人日本コンピュータセキュリティインシデント対応チーム協議会（CSIRT）](#) 

➤ [特定非営利活動法人デジタル・フォレンジック研究会](#) 



迷惑メール抑止など、ネットワークの濫用への対策を目的とした団体に参加し、協議・対応を行うとともに、世界的な取り組みや技術をいち早くサービスにフィードバックしています。

- [M3AAWG \(Messaging, Malware and Mobile Anti-Abuse Working Group\)](#) 
- [JPAAWG](#) 
- [迷惑メール対策推進協議会 \(ASPC : Anti-Spam mail Promotion Council\)](#) 



安全・安心なインターネットのための啓蒙活動

青少年のインターネット利用に伴う事件を未然に防止し、また、被害の拡大を防ぐための活動として、インターネットの安全な利用環境の整備やメディアリテラシー向上のための啓蒙活動に参加しています。

- [安心ネットづくり促進協議会](#) 
- [情報通信における安心安全推進協議会](#) 
- [IJキッズインターネットQ&A](#)



プライバシー保護レベルの向上

GDPR（一般データ保護規則）をはじめとした世界のプライバシー保護法制のもと、日本企業のプライバシーデータ保護を盤石なものとするため、日本DPO（※）協会に理事として参加しています。

（※）DPO（Data Protection Officer）：GDPRにおいて、一定以上の要件を満たす企業に対して設置を求められるデータ保護責任者のこと。

- [日本DPO協会](#) 



データセンターの発展・省エネルギーを目指す取り組み

日本のデータセンターの国際競争力向上や省エネ化を目指し、各団体に参加しています。

- [特定非営利活動法人日本データセンター協会 \(JDCC\)](#) 
- [一般社団法人電子情報技術産業協会 \(JEITA\)](#) 



IJは、誰もが信頼できる確実なコミュニケーションインフラを目指して、インターネット技術の国際標準化や、安全なインターネット社会の構築に向けたセキュリティ活動など、インターネットの技術発展、普及に関する様々な活動に取り組んでいます。

- [IJ参加団体一覧](#)

データ駆動社会の実現に向けて

少子高齢化や人口減少、医療介護資源の不足、低い食料自給率といった現代日本の様々な社会課題に対して、また循環型経済への移行や脱炭素化の推進など世界規模で対応が進められている問題に対して、行政や企業それぞれがデータ分析やAI技術の活用を試み、課題解決に取り組んでいます。しかしながら、行政や企業といった組織の枠組み、更には産業の枠組みを越えるデータ活用はまだまだ進んでいないのが現状です。

このような状況を踏まえ、IIJは様々なデータが安全に流通し、組織や産業の領域横断的な活用により、より高度で広範な社会課題を解決することができる「データ駆動社会」の実現を目指しています。

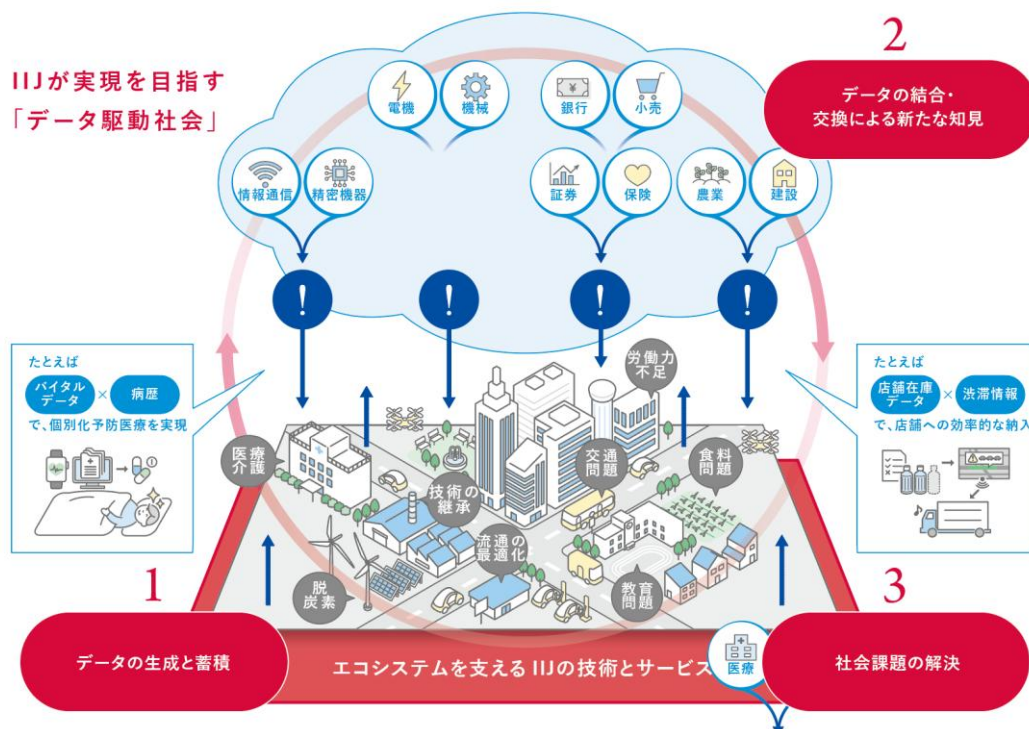
データ駆動社会

- 社会活動を通じて生成・蓄積されるデータが、データ生成者の権利を守りながら安全に流通し、そのデータ活用から得られる洞察を元に課題が解決される社会
- 多くのステークホルダーによりデータが多目的に応用され、これまで解決が難しかった様々な課題が企業・産業・国境の枠を超えて領域横断的かつ持続的に解決される社会

データ駆動社会では領域横断的にICTの積極活用が進み、例えば空飛ぶモビリティとオートパイロット、契約・決済の完全デジタル化、無人化された高度な防災対策、パーソナライズされた高度な医療や教育などがもたらされることにより、様々な面で「豊かさ」を共有できる社会・経済の実現が期待されます。

一方で、こうした社会を実現するためには、データの安全性や信頼性をどのように守るかが大きな課題となります。この課題に応えるために重要となるのが、データ提供者の意思やデータ主権を尊重しつつ、安全かつ柔軟にデータ連携を可能にする「データスペース」です。

IIJは、あらゆるものを「つなぐ」インターネットの発展を自らリードしてきたように、ネットワーク上で円滑にデータが流通するエコシステムを築き上げ、自らも有益なデータを生成しつつ、流通するデータを活用したビジネスを行い、社会を有機的に「つなぐ」役割を果たすことでデータ駆動社会の発展の担い手となり、より高度で広範な社会課題が解決される未来を目指して事業に取り組んでいます。



AI社会のデジタルインフラ構築

生成AIをはじめとするAI技術は、社会や産業のあり方を大きく変えつつあります。一方で、AIの利活用を支えるためには、膨大な計算処理を安定的かつ持続可能に担うデジタルインフラが不可欠です。IIJは、インターネットを社会インフラとして支えてきた知見を生かし、AI社会にふさわしい次世代のデジタルインフラ構築に取り組んでいます。

近年、AIの高度化に伴い、AI基盤を収容するデータセンターの都市部への集中や膨大な消費電力が課題になっています。IIJは、通信と電力を統合的に整備・最適化する「ワット・ビット連携」の考え方のもと、地域分散型データセンターやエッジコンピューティングの活用を進め、需要の増大に柔軟に対応できるインフラの実現を目指しています。その一例として、高発熱GPUサーバにも対応可能なモジュール型エッジデータセンター「DX edge Cool Cube」を提供し、短期間・低コストでのAI基盤構築を支援しています。

また、AIの社会実装においては、計算基盤だけでなく、セキュリティやガバナンスの確保も重要です。IIJは、強みであるネットワーク、クラウド、セキュリティの技術力を生かし、AIセキュリティやデータ主権の保護に配慮したAI活用環境の整備にも注力しています。

IIJは今後も、デジタルインフラの環境負荷の低減と信頼性の向上を追求し、持続可能なAI社会の実現に貢献していきます。

- [IIJ、自社サービス需要拡大に対応し「白井データセンターキャンパス」3期棟を増設](#)
- [直接水冷方式高密度AIサーバをモジュール型データセンターへ実装し超高効率AI計算基盤技術の研究開発を加速](#)
- [PFN、三菱商事、IIJがAI向けクラウドサービスを提供する合併会社Preferred Computing Infrastructureを設立](#)
- [九州電力、IIJ、QTnet、1FINITY、ノーチラス・テクノロジーズは、地域分散型デジタルインフラを構築・検証する実証プロジェクトを開始します](#)
- [AI時代の分散型デジタルインフラ実装に向けてモジュール型エッジデータセンター「DX edge Cool Cube」を提供開始](#)

宇宙分野における通信・データ基盤への取り組み

IIJは、地上のネットワークにとどまらず、宇宙分野においても通信・データ基盤を支える取り組みを進めています。

その一つとして、IIJは低軌道衛星を利用したブロードバンド通信サービス「Starlink（スターリンク）」の国内提供を開始しました。Starlinkは、山間部や離島、海上など、地上ネットワークでは通信確保が難しいエリアでも利用可能であるほか、災害発生時の非常通信手段としても活用が期待されています。これを従来から提供してきたネットワークサービスと組み合わせることで、より柔軟で強靱な通信環境の構築が可能です。

またIIJは、気象庁および国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT）が推進する、静止気象衛星「ひまわり9号・10号」の運用を行うPFI事業「静止気象衛星ひまわりの運用等事業」に参画しています。本事業においてIIJは、自社データセンターを活用した地上施設のIT・ネットワークインフラの構築および維持管理を担い、日本の気象観測・防災インフラの運営を支えています。

IIJは、インターネットの黎明期から培ってきたネットワーク技術と運用の知見を活かし、宇宙と地上をシームレスにつなぐ通信・データ基盤の整備を通じて、災害対応や安全・安心な社会の実現に取り組んでいます。

- [IIJグループ、国内法人向けにStarlinkの取り扱いを開始](#)
- [IIJ、気象庁およびNICTが推進する「ひまわり9号・10号」の運用を行うPFI事業「静止気象衛星ひまわりの運用等事業」に参画](#)

生産性の向上

IIJグループは生産効率の向上を実現するために、常に最新技術を取り入れたネットワークサービスを世に送り出してきました。少子高齢化による労働人口の減少などの影響をおさえて経済成長を持続させるために、クラウドやIoT、AIなどの技術を積極的に活用し、製造現場の自動化やオフィスのIT化推進などを通して、社会全体の生産性向上に貢献していきます。

IoTによる産業支援

産業界での労働力不足や現場業務の高度化が進むなか、設備や作業環境の状態を把握し、現場の判断や対応を支えるデータ活用の重要性が高まっています。IIJは、産業分野におけるこうした課題に対し、IoTを活用した現場データの収集・管理・活用を支援するソリューションを提供しています。

台湾の産業用コンピューターメーカー「ADVANTECH」との協業により、産業IoTに特化したプラットフォームを国内製造業向けに展開しています。メーカーに依存せず、様々な産業機械、センサーからデータをクラウドに収集し、設備リモートモニタリングや生産数の見える化を行うことが可能です。これにより、製造現場や流通・保管現場、建設現場などにおいて、設備や環境の状態を遠隔から把握・監視し、状況の可視化やデータに基づく分析を行うことで、生産性の向上や現場業務の効率化、安全性の確保を支援しています。また、エッジデバイスやネットワーク機能を組み合わせた「IIJ産業IoTセキュアリモートマネジメント」をはじめとするサービスにより、現場ごとの要件に応じた柔軟なIoT環境の構築にも対応しています。

IoTを導入した事例のひとつでは、自動車工場内の生産ラインにモバイル通信機能を持つ産業用PCを組み込み、設備稼働情報の取得と測定データを可視化・分析できるクラウド基盤を構築することで、品質および生産性の向上を実現しました。

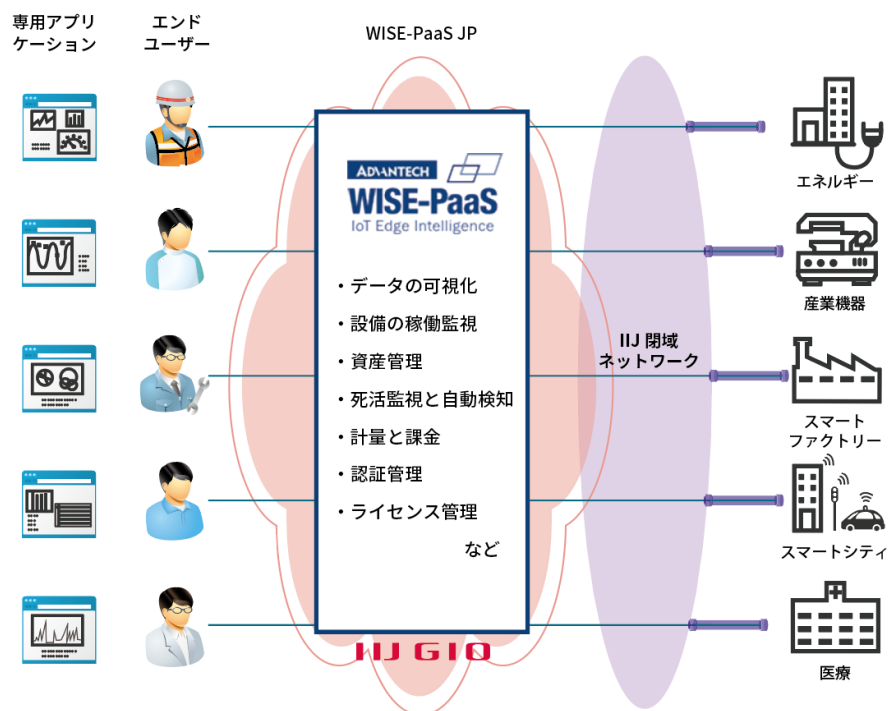
また、食品の製造、保管、販売及び提供を行う事業者に対し、食品管理現場の温度データの収集と異常監視・通知を低コストで簡単に実現するソリューションを提供しています。HACCP（ハサップ）に則った衛生管理工程の中で、冷蔵庫・冷凍庫の保管時における温度記録を自動化し、温度管理の手間やミスを削減します。

近年では、収集したセンシングデータを活用し、現場作業者の熱中症リスクを予測する機能を提供するなど、作業環境の安全確保に寄与する取り組みも進めています。さらに、IoT向けマネージド型エッジゲートウェイサービスの活用により、IoT環境の柔軟な構築やデータ保全を実現し、現場で生まれるデータを安心して活用できる基盤の整備を支援しています。

➤ IIJ IoT Business Portal

➤ 「IIJセンシングデータマネジメントサービス」において、現場作業者の熱中症リスクを予測する新機能を提供開始

➤ IoT環境の柔軟な構築とデータ保全を実現するIoT向けマネージド型エッジゲートウェイサービス「P3EG®」



クラウドによる業務効率化

企業のオンプレミス（自社運営）サーバをIIJのクラウドに集約することで、ハードウェア運用だけでなくセキュリティ対策やアプリケーション管理など、様々な運用負荷を軽減することができるオフィスITソリューションを提供しています。

自社の社員に対し、常に最新のオフィスアプリケーションを提供できるだけでなく、場所に縛られない柔軟なワークスタイルを実現することで、業務の効率化を推進します。

一方、業務環境がデジタル・ワークスペースへ変化することで、大容量・高速通信やVPN接続での安定性確保、マルウェア（※1）感染や情報漏えいなどのセキュリティ対策がより一層求められます。IIJは、様々な場所から、様々なデバイスで、様々なクラウドサービスを快適・安全に使うためのソリューションサービスやDXプラットフォームを提供し、マルチクラウドMSP（マネージドサービスプロバイダ）として、新たなサービスやソリューションを提供していきます。

これらのソリューションによりシステム運用者の負荷を軽減し、生産性向上に寄与します。また、システムから発生する膨大なアラートがシステム運用者の業務を阻害しないよう、自動フィルタリングとオペレーションの自動実行、システム監視、ジョブ管理に対応する、SaaS（※2）型の「IIJ統合運用管理サービス（UOM）」を提供しています。

（※1）マルウェア：悪意のあるソフトウェアやコードのこと。

（※2）SaaS：インターネット経由で、アプリケーションを遠隔から利用できるサービス。

- [DXを成功に導くクラウド活用ガイドレール](#)
- [IIJのデジタルワークスペース](#)
- [IIJ Omnibusサービス](#)
- [IIJ統合運用管理サービス（UOM）](#)
- [IIJ、DX実現に向けた企業クラウド戦略を支援する「マルチクラウドMSP」を推進](#)

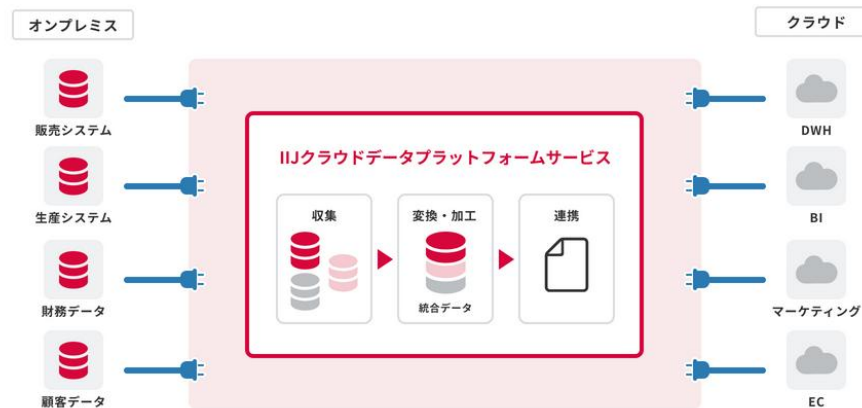


企業のDX推進やデジタルガバメント、スマートシティ構想など、社会全体でデータを活用した取り組みが進み、オンプレミスや複数のクラウドサービスなど様々な場所に分散されたデータを連携し活用することが求められています。

IIJは、クラウド運用の知見やシステムインテグレーションの実績を活かし、オンプレミスとクラウド間のデータ連携を実現する「IIJクラウドデータプラットフォームサービス」を提供しています。

システム間データ連携を低コストかつセキュアに実現するサービスを提供することで企業のデータ活用とDX促進を支援しています。

- [IIJ、オンプレとマルチクラウドのデータ連携を容易にする「IIJクラウドデータプラットフォームサービス」を提供開始](#)
- [IIJ、「経済安全保障重要技術育成プログラム」においてマルチクラウド環境での「データの保護と流通の自動化技術」の研究開発を受託](#)
- [IIJ、データ利活用の計画から実装、運用までをワンストップで支援する「IIJデータ利活用ソリューション」を提供開始](#)



機器設定・運用の効率化

IIJは、お客様先に導入されたルータをはじめとする多数のネットワーク機器に対し、初期設定と設置にかかる時間とコストの大幅な削減を実現し、機器運用を効率化する製品・サービスの開発に取り組んでいます。

IIJの自社開発ルータ「SEIL（ザイル）」シリーズを一元管理し、ユーザが自由にネットワークを構築・運用するためのフレームワークとして2003年に開発されたのが「SMF（SEIL Management Framework）」です。その後改良が進んだSMFは日米で特許を取得し、現在ではネットワーク機器を一元管理できるIIJマルチプロダクトコントローラサービスのほか、広くIIJのサービスに採用され、運用効率向上に貢献しています。

SMFに対応する機器であれば、ケーブルをつないで電源を入れるだけで、すぐにネットワークサービスを利用できるため、ネットワークエンジニアによる機器設置場所での設定作業が不要になります。



- [IIJマルチプロダクトコントローラサービス](#)
- [SEILシリーズ](#) 

子どもや高齢者、社会的弱者への支援

IIJでは地域社会における生活支援や見守り、介護・医療の拡充をIT・ネットワーク技術を活用し推進しています。また子どもの教育デジタル化におけるネットワーク環境整備や、インターネットの脅威からの保護など、子どものIT利用に関する問題を解決するサービスやソリューションを提供しています。これらの事業は、通信の恩恵を十分に享受できていない方々に向けた通信活用機会の増加やデジタルデバイドの解消につながっています。

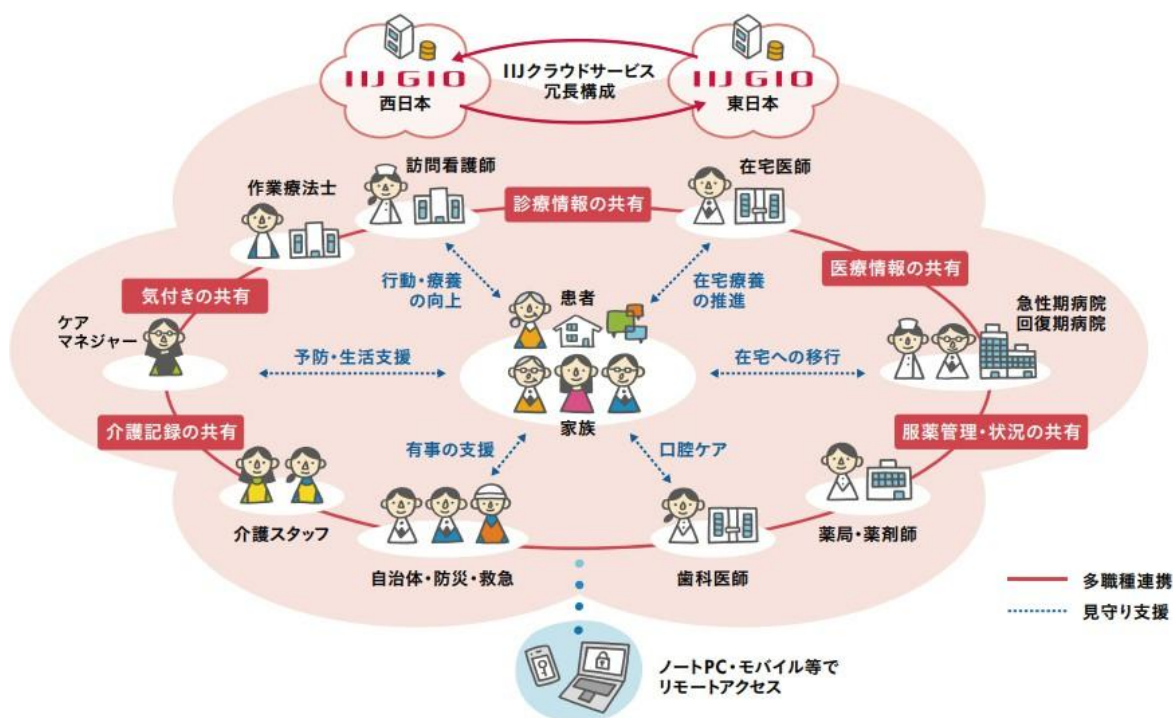
介護・援護が必要な方を支える専門職連携プラットフォーム（IIJ電子@連絡帳サービス）

IIJは名古屋大学医学部附属病院と共同研究を行い、行政が進める地域包括ケアの実現に向けた、在宅医療介護に携わる専門職の連携プラットフォームとして「IIJ電子@連絡帳サービス」を2017年より提供しています。このプラットフォームで様々な専門職が連携することにより、従来の職種の垣根を超えて効率よく活動を行うことができるのに加え、要介護者の情報を迅速・円滑に共有し、より充実した支援を提供することができます。近年では、行政による導入が進んだ結果、災害時の要援護者支援や救急連携、医療的ケア児を支える母子やヤングケアラーの支援など福祉の領域でも活用が広がっており、現在、全国76の区市町村において、29,000人以上の医療・介護・福祉関係者に利用されています。

社会的弱者に対してスマートフォン・タブレットを通じた情報提供や支援サービスの提供は広がりを見せていますが、在宅で介護を要する患者・高齢者の中には、ICT端末の操作自体が困難な方も多くいます。「IIJ電子@連絡帳」は、そうした方の生活を守る家族や専門職をICTによって繋ぐことでデジタルデバイドを解消し、誰一人取り残すことのない持続可能な社会の実現に向けて、サービス開発・機能拡充を進めています。

- 超高齢社会に備え、地域医療介護の情報連携を実現するICT基盤「電子@連絡帳」とは？
- IIJ電子@連絡帳サービス
- 地域サミット～全国IIJ電子@連絡帳推進会議～ □
- IIJ電子@連絡帳サービスを機能拡張、市区町村の「緊急通報システム」との連携により高齢者等の見守り・防災を強化

地域包括ケアを実現するプラットフォーム



共働き世帯の増加やコミュニティ意識の衰退等の環境変化に伴い、地域の人手で子どもを見守ることは困難になってきています。そのような課題を受けて、GPSで子どもの居場所や行動履歴を把握する見守り端末の活用が進んでおり、IIJは見守り端末メーカーにモバイル通信サービスを提供しています。代表的な例としてビーサイズ株式会社が提供する子ども用AI見守りロボット「GPS BoT」にIIJのSoftSIMが採用されており、子どもが学校に到着したり、通学路から大きく外れたりした場合に保護者に自動通知する機能を支えています。

また、一人暮らしの高齢者の増加が顕著になる中、遠く離れたご家族から高齢者の見守りサービスのニーズが高まっています。これを受けてIIJと中部電力が設立した合同会社ネコリコは、冷蔵庫の開閉でご家族の様子を見守る製品や、声やテキストによって、お互いのコミュニケーションをはかることができるロボットを開発・提供しています。

IIJではICTで子どもや高齢者を見守ることで、家族全員が安心して暮らすことのできる環境を提供しています。

- [IIJ、ビーサイズの子ども用AIみまもりロボット「GPS BoT」にSoftSIMを提供](#)
- [ネコリコ](#) 



児童生徒の学習用ネットワーク環境整備（IIJ GIGAスクールソリューション）

児童生徒に一人一台の端末配布や、高速ネットワーク環境の整備が推奨される文部科学省の「GIGAスクール構想」に基づき、全国の自治体や教育委員会向けに、安全で快適なネットワーク環境を提供しています。

全国で取り組みが進み2021年3月には小中学生一人一台の端末整備が実現しましたが、「遅い、つながらない」などネットワーク環境の整備不足が原因で、ICT教育の効果・利点が十分に得られていない教育現場が少なくありません。インフラ・ハード面の整備が大きな目的のひとつであったGIGAスクール構想に続く2025年度開始の次世代構想「Next GIGA」では、端末の更新に加え、デジタル教科書の普及やCBT（Computer Based Testing）の本格展開を目指して通信ネットワークの改善が求められています。IIJは、教育委員会向けの帯域確保型インターネット接続ソリューションを提供し、教育現場のICT環境の改善に貢献し、さらなるICTの利活用を支えています。



- [IIJ GIGAスクールソリューション](#)
- [「先輩、教えて！GIGAスクールのネットワーク」](#) 
- [横浜市様の導入事例](#)
- [IIJ、東京都立学校248校の帯域確保型インターネット接続環境を構築](#)
- [IIJ、千葉県教育委員会より教育情報ネットワーク「CABINET」更改案件を落札](#)
- [IIJ、沖縄県立学校全85校のインターネット接続環境を再構築](#)
- [IIJ、2025年度開始の次世代GIGAスクール構想「Next GIGA」に向けて新たな帯域確保型インターネット接続ソリューションを提供開始](#)

Webの脅威や有害サイトから子どもを守る（IIJmioみまもりバック）

IIJの個人向けモバイルサービス「IIJmio（ミオ）」では、子どもにも安心してスマホを使ってもらえるよう、オプションサービスとして「みまもりバック」を提供しています。不正アプリ対策、Web脅威対策、保護者による使用制限などのセキュリティ対策の他、子どもに見せたくないサイトをブロックするフィルター機能により、子どもが安心・安全にインターネットを利用できる環境を提供します。

- [IIJmioみまもりバック](#) 



世界の情報通信インフラ発展への貢献

インターネットの普及によって世界の経済・産業が大きく発展と利用による恩恵を享受してきた一方で、インターネットを利用できる集団とできない集団との格差が生じる、デジタルデバイドと呼ばれる問題が発生しています。IIJは、日本のネットワークインフラを支えてきた技術を用いて、世界各国の通信インフラの整備を進めることで、デジタルデバイドの解消に努め、持続可能な社会の発展に貢献していきます。



ウズベキスタン通信インフラ発展を支援

ウズベキスタンでは、様々な業界のデジタル化によるデータ通信需要の急速な増大に対して、情報通信インフラの拡充を進めており、通信品質の向上や都市部と農村部のデジタルデバイドなどの社会課題の解決を目指しています。こうした中、IIJは、豊田通商、日本電気株式会社、NTTコミュニケーションズと共同で、同国の通信環境を大幅に改善する基幹通信システムのデータセンターおよび通信インフラ整備を行う、通信インフラ発展プロジェクトを2023年から推進しています。IIJは自社で開発した省エネ型で高品質・高効率なコンテナ型ITモジュール「co-IZmo/I（コイズモアイ）」の提供、クラウドプラットフォームの構築、および国営通信事業者ウズベクテレコム（UZBEKTELECOM）のデータセンター運用担当者への教育などを行い、ウズベキスタンの持続可能な情報通信インフラの発展に貢献していきます。

- [co-IZmo/I](#)
- [豊田通商、IIJ、NEC、NTTComの4社、ウズベクテレコムから「通信インフラ発展プロジェクト」を受注](#)

東南アジアでの取り組み

IIJは、東南アジアにおいて、データを活用した社会課題の解決と持続可能な地域発展に貢献するため、IoTやクラウド、ネットワーク、セキュリティを核とした事業を展開しています。各国で異なる法規制や社会環境に対応しながら、信頼性の高いデジタルインフラを提供し、現地に根ざしたデータ利活用を支えています。

IoT分野では、交通やインフラ管理を中心に、データ収集から分析、活用までを一貫して支援する仕組みを提供しています。タイでは商用車の運行前後に実施されるアルコールチェック結果をクラウドで管理する安全運行支援、インドネシアでは車両搭載カメラの画像をAIで解析し道路損傷を検出する道路維持管理支援を行い、交通安全やインフラ管理の効率化に貢献しています。

またインドネシアでは、研究機関や現地企業と連携し、交通輸送や地図情報分野におけるIoTデータ分析やアルゴリズム開発を推進し、データに基づく社会インフラの高度化を支援しています。

さらに2025年には、IIJグループの現地法人がインドネシア国家船級協会と協力し、港湾や海事施設向けに通信回線およびセキュリティサービスを提供する枠組みを構築しました。これにより、重要インフラ分野における通信の信頼性向上とサイバーセキュリティ強化を通じ、地域の安全に貢献しています。

- [村田製作所とIIJ、東南アジアでIoTビジネスを計画する日系企業向けにデータサービスプラットフォーム「Crossborder Co-DataBiz Platform」を商用提供開始](#)
- [IIJ、村田製作所およびインドネシア国立研究革新庁などと交通輸送を中心としたIoT分野での研究開発協力に関するMOUを締結](#)
- [IIJ GS Indonesia、インドネシア国家船級協会BKIと海事施設向けの通信回線及びセキュリティサービス提供に関するMoUを締結](#)

地方創生と地域DXへの貢献

人口減少と都市化の進行により、医療へのアクセスや雇用など、多くの面で都市と地方の格差が生じています。国は、地方創生のための施策の1つとして、地域の中堅・中小企業や自治体におけるIT活用を大きく打ち出しています。IIJは、「ローカル5G」をはじめ、ITの利活用を推進することで、地域経済の発展に貢献しています。

ITによる産業振興

■ 松江データセンターパーク

島根県及び松江市は、企業誘致やエンジニアの移住支援等の施策により、IT、ソフトウェア産業分野の産業振興に力を入れています。IIJは島根県と松江市から立地計画の認定を受け、2011年にクラウドコンピューティングのためのデータセンター「松江データセンターパーク（以下、松江DCP）」を開設しました。松江DCPを通じて、地域の産業振興及び雇用の創出に貢献しており、施設見学会を通じた高校生のキャリア教育支援も実施しています。

➤ 松江データセンターパーク



ローカル5G技術の産官学共同開発と地域ネットワークの支援

5Gは、超高速・超低遅延・多数同時接続を可能とする次世代通信技術であり、ローカル5Gは特定の地域において、自治体や企業などが自ら設置・利用できる5Gネットワークです。

IIJはこのローカル5G関連の技術開発プロジェクト等に参画し、地域ネットワークの発展を支援しています。

➤ 次世代通信規格の素地となる5G中核技術の国産・低コスト化に成功

地域DXの取り組み

IIJは白井データセンターキャンパスが立地する千葉県白井市の行政、教育機関、地域の関係者の方々との相互連携を推進しており、2024年からは同市より借り受けた市内の実証圃場において、スマート農業関連のセンサーやIoT機器の技術実証、新しい通信規格の試験等を行っています。2024年11月には白井市と「包括連携協定書」を締結し、白井市の教育振興や地域DXのさらなる推進を目指して、相互協力関係を発展させています。

➤ IIJ、千葉県白井市と教育振興や地域DXなどを目的とした包括連携協定を締結

農業支援

超高齢社会の到来により、日本の農業従事者の平均年齢が65歳を超える一方、経営の大規模化が進み、農作業の効率化、省力化は大きな課題となっています。その中でICT技術を活用する「スマート農業」を普及させる取り組みが全国各地で急速に進みつつあり、IIJも、農業分野でご活用いただけるサービスの研究開発を行っています。

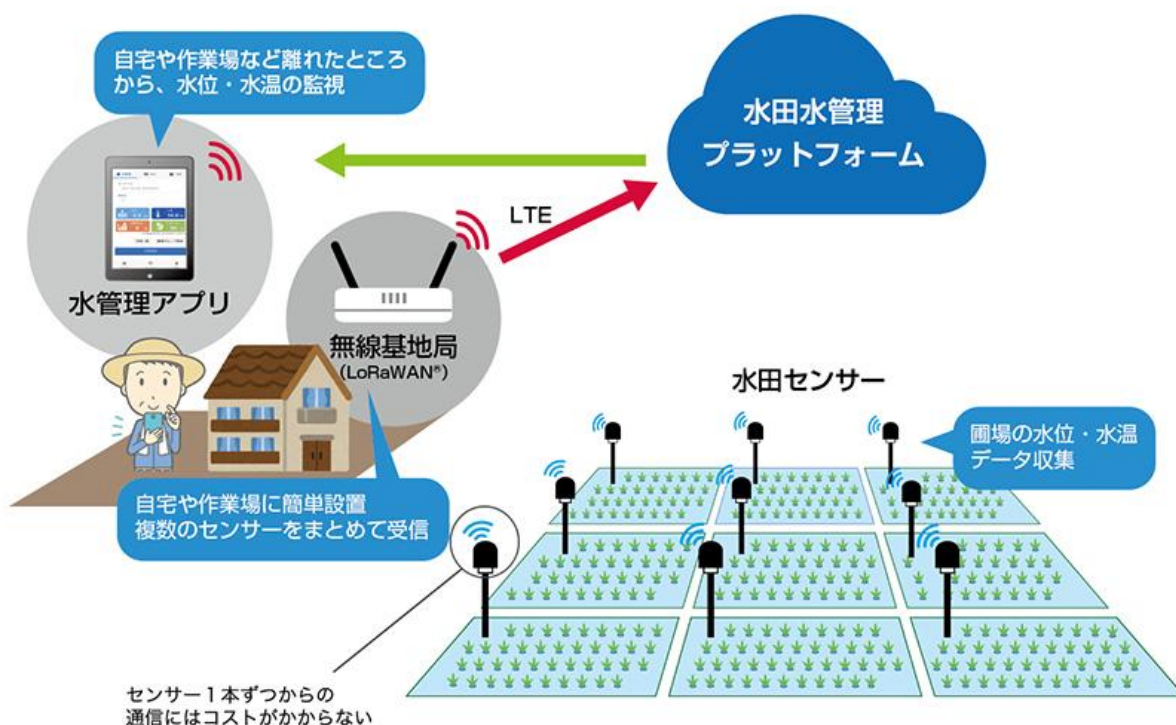
IoTで農業の課題解決を推進

IIJでは2017年から水田の水管理の省力化を可能とする「ICT水管理システム」の開発を進め、安価な水田センサーの開発に成功しました。農業従事者の高齢化や、離農を受けた管理農地の拡大や分散が進み、農業従事者の負担増が大きな課題になっていますが、この「ICT水管理システム」により、自宅や作業場にながら、スマートフォンで水田の状況把握と水量の管理運用が可能になり、農家の方の水管理にかかる労働負担を大幅に軽減しています。

また、水田に設置したセンサーから取得したデータを元に稲の生育状況を算出し、算出した生育状況に応じて水管理を自動で行う仕組みを2022年に開発しました（2024年特許取得：特許第7425846号）。2023年からは土壌水分センサーや気象センサーから取得したデータをクラウド上に収集し、可視化・分析することでみかんの収量向上を目指す実装検証を行うなど、これまで栽培暦や経験則に頼ってきた作業を、IoT技術で可視化・定量化することで、収穫量の増加や品質向上に加えて、水管理技術の継承にも貢献していきます。

- 稲作農家の「働き方改革」を後押しIoTが日本の農業の未来を変える
- IIJ水管理プラットフォーム for 水田
- IIJ、発育指数に基づいた水田の水管理を自動化する技術を開発
- IIJ、愛媛県で中晩柑・サトイモの収量向上を目指しスマート農業実装を開始

IIJが提供する農業IoT



地球規模の気候変動が進む中、農業分野はその影響を大きく受けることが指摘されています。年々深刻化する異常気象による生育不良といったリスクへの対応においては、従来の栽培ノウハウに依らない、新たな手法の導入が急務となっています。また、特に日本国内においては、農業従事者の高齢化や担い手不足が進行しており、農作業の省力化や効率化は喫緊の課題です。

Sensiphia

こうした課題を受け、IIJは、ソニーセミコンダクタソリューションズ株式会社（ソニー）とともに、スマート農業向けに土壌水分センサーおよび灌水（かんすい）ナビゲーションサービスを提供する合併会社「株式会社センシフィア」を2026年2月に設立しました。IIJの通信技術やスマート農業における知見と、ソニーのセンサー開発などにおける技術力を結集させ、農業現場の作業品質向上と効率化を支援し、気候変動に対応できる持続可能な農業の実現を目指します。

➤ [IIJとソニーによる、スマート農業の合併会社「センシフィア」を設立](#)

金融アクセス向上への貢献

インターネットの普及により、世界中の情報に誰もが簡単にアクセスできる昨今、各方面でサイバー攻撃の脅威は高まっています。金融業界でも、マルウェア感染による不正送金や悪意のあるメールの受信など、深刻な事態に直面しています。IIJは金融ISACへアドバイザーとして参加し、金融機関に対して主にセキュリティ情報・対策に関する情報提供を行い、金融取引の安全性向上に貢献しています。

➤ [一般社団法人金融ISAC](#) 

Fintech推進を通じた金融アクセス向上への貢献

IIJは2018年、各業界を代表する企業とともに、株式会社DCPの前身となる株式会社ディーカレットを設立しました。デジタル通貨の利用を促進・拡大するためには、安心して使えるプラットフォームを構築すること、既存の金融インフラと連携し利用者の利便性を確保することが必要です。DCPIは、「デジタル通貨に特化した送受・保管・交換が可能な金融プラットフォームを創り、すべての取引を安全でシンプルにする」ことを掲げ、誰もが安全に簡単にデジタル通貨にアクセスできるプラットフォームの構築に取り組んでいます。2024年8月には、DCPがシステムリリースした「DCJPYネットワーク」において、GMOあおぞらネット銀行が発行するデジタル通貨DCJPYを利用して、IIJが環境価値のデジタルアセット化とDCJPYによる決済取引を開始しました。現在では、金融や不動産など多様な業界で事業化に向けた検討が進められています。



（※）株式会社ディーカレットホールディングスは、2026年7月1日に、株式会社ディーカレットDCPを吸収合併し、株式会社DCPIに社名を変更しております。

- [株式会社DCP](#) 
- [環境価値のデジタルアセット化とデジタル通貨DCJPY決済取引を開始](#)
- [ゆうちょ銀行におけるトークン化預金の取扱に向けた検討について](#) 
- [シノケングループ、ゆうちょ銀行と協業し、デジタル通貨（ゆうちょ銀行のトークン化預金）の実証実験をスタート！](#) 

環境への取り組み方針

IIJグループは、経営理念を継続して実現し、長期かつ持続可能な成長を遂げるために、環境関連法規を遵守し、地球環境に配慮した事業活動を通じて、社会全体の環境負荷低減に取り組むことが重要と認識しております。

IIJは、国内初の商用インターネットサービスプロバイダーとして、日本のインターネットのインフラストラクチャーを創り上げ、インターネット接続サービスの提供を続けてまいりました。インターネットを基盤とする各種サービスやアプリケーションの利用で、30年程前と比較して社会や経済活動は明らかに効率化されています。IIJグループは、インターネットやクラウドコンピューティングなどネットワーク社会を支える信頼性の高いサービスを安定的に提供し続けることで、社会活動の更なる効率化と社会全体の環境負荷低減へ貢献をしてまいります。

一方、これらのサービス提供にあたり、電力の利用は不可欠であり、多くの電力が消費されるデータセンターにおいて、温室効果ガスの削減を推進しカーボンニュートラルの実現に取り組むことが求められています。IIJは自社データセンターを「カーボンニュートラルデータセンター」のリファレンスモデルとするべく、2030年に向けた再生可能エネルギーの利用率向上、およびエネルギー効率向上の目標を設定し、さまざまな取り組みを推進しています。また、サービス提供に必要な機器・サービスの外部調達についても、サプライチェーン全体での温室効果ガス低減に配慮した調達活動を推進するように努めます。

▶ IIJデータセンターのカーボンニュートラルの取り組み

IIJは、これら活動を全社的取り組みとして推進するため、社長を委員長とするサステナビリティ委員会を設置し、環境負荷低減に向けたPDCA活動を進めるとともに、ステークホルダーへの充実した情報開示に取り組んでまいります。

IIJは、2021年6月の改訂後コーポレート・ガバナンスコードの趣旨を踏まえ、上記取り組み方針に基づき、TCFD等の枠組みに基づく開示の充実を進めてまいります。

▶ TCFD提言に基づく情報開示

エネルギー効率の向上

近年、気候変動問題は国際社会が喫緊に取り組むべき重要な課題となっており、企業にも温室効果ガスの排出削減が一層求められるようになっていきます。各国のCO2排出量において、エネルギー起源のCO2が占める割合が多いことから、不必要なエネルギーの利用を減らし、効率的に利用することが重要です。

IIJは、自社におけるエネルギー使用量の低減、とりわけ、世界の全消費電力の2%を占めるといわれているデータセンターについて、省エネルギーの取り組みを積極的に推進しています。また、インターネットの特長である「人やモノの移動を減らす」サービスは、社会全体のエネルギー効率向上においても、大きな役割を果たせると考えています。

松江データセンターパークでの取り組み

IIJは、2011年に日本初の外気冷却方式モジュール型データセンター「松江データセンターパーク（以下、松江DCP）」を島根県松江市に開設しました。松江DCPでは、コンテナの中にIT機器と空調設備をモジュールとして一体化させる「コンテナ型モジュール構造」を採用し、構築期間の大幅な短縮や柔軟な構成の組み換えを実現しています。また、コンテナ型ITモジュール「IZmo（イズモ）」の活用により気温や湿度に応じた適切な運転モードが自動的に選択されることで、大きな省エネルギー効果を上げています。

また、データセンターにおける省エネルギーなどの環境改善活動を組織的・継続的に推進するため、2013年にISO14001（環境マネジメントシステム）の認証を取得しています。



この他、環境省の脱炭素先行地域への申請にあたり、IIJはデータセンターを提供する民間事業者として松江市と共同提案を行い、松江市は2023年5月に脱炭素先行地域に選定されました。

▶ 松江データセンターパーク

▶ ISO14001（環境マネジメントシステム）を取得

■ ITモジュール「IZmo」

一般的なデータセンターはIT機器から生じる熱を取り除くための空調システムに大きな電力を必要とします。松江DCPのITモジュール「IZmo」は、商用データセンターとしては初となる外気冷却方式を採用し、コンプレッサーや冷凍機の稼働を減らし、消費電力を大幅に削減しています。

また、従来のデータセンターではサーバの搬入や構築に大量の梱包材や養生材が必要でしたが、「IZmo」はあらかじめサーバを搭載したコンテナをデータセンターに運搬し、梱包材の削減だけでなく輸送時のCO2の削減にも寄与しました。

➤ [ITモジュール「IZmo」](#)

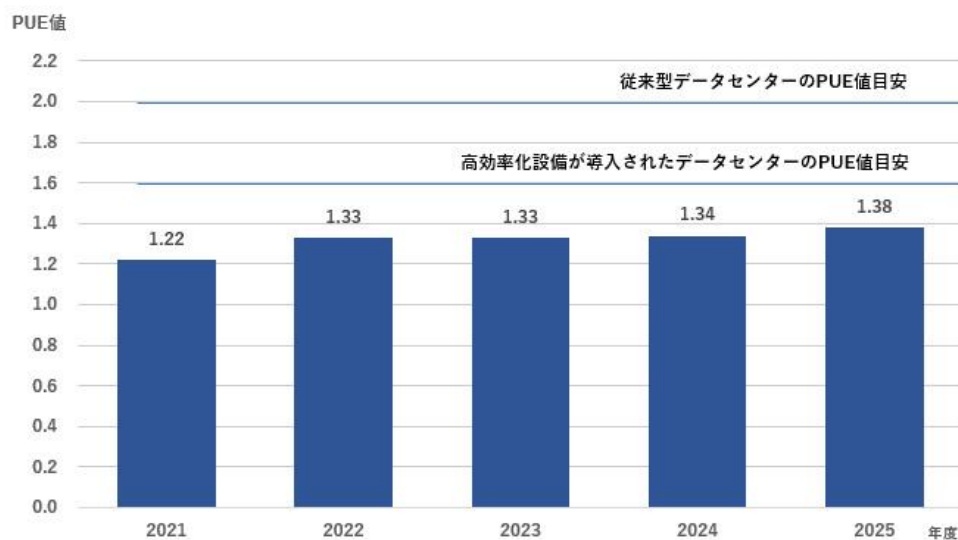
➤ [冷却効率と収容密度の向上（特許取得）](#)



■ 省エネルギーの実績

PUE（Power Usage Effectiveness）は、データセンターの電力使用効率を表す指標で、「データセンター全体の消費電力」を「IT機器による消費電力」で割って算出した数字が1.0に近いほど効率が良いとされています。日本国内では、従来型データセンターでは2.0、高効率設備が導入された新しいデータセンターで1.6程度と言われていますが、松江DCPにおいては1.3台を達成しています。さらに、2022年2月からは実質再生可能エネルギー由来の電力を導入し、2023年からは管理棟屋上および太陽光発電パネルを設置したことで、現在は再エネ利用率100%を達成しています

松江DCPの年間平均PUE実績



2013年に開発した「co-IZmo/I（コイズモアイ）」では、間接外気冷却方式を採用することでちりやほこりが多い、塩分濃度が高いといった空気質の悪い環境でも高い省エネルギー性が発揮できることから、幅広い地域での普及が期待されています。

➤ [co-IZmo/I](#)

co-IZmo/I



白井データセンターキャンパスでの取り組み

5GやIoT、AIなどの普及で想定されるデジタルデータ増加に伴う大規模な需要に応えるため、松江DCPで得られた知見を活かし、2019年5月から千葉県白井市で「白井データセンターキャンパス（以下、白井DCC）」の運用を開始しました。本データセンターキャンパスではモジュール構造をより大きな単位で実現するシステムモジュール型工法を採用し、施工に至るまでの建築生産プロセスを体系化・省力化しています。

- 爆発的なデジタルデータの増加に対応環境にも人にも優しい最新のデータセンター
- 空間モジュール（省エネに対する取り組み～外気冷却、バスダクト、三相4線UPS）
- 白井データセンターキャンパス

白井DCC



蓄電池導入による電力のピークカット・ピークシフト

白井DCCでは、非常時の電力供給源として設置しているリチウムイオン蓄電池を平常時も利用して、電力需要のピークカット・ピークシフトを推進しています。

2019年の導入時から、夏場の空調用電力の平準化に活用することを目的に検証を進め、電力のピークカットとピークシフトの実現に向けた本格検証を行った結果、年間ピーク期となる2020年8月において白井DCC全体の電力需要に対し、10.8%のピークカット効果を実測しています。

- リチウムイオン蓄電池
- 白井データセンターにおける電力エネルギー制御の検証結果について

白井DCCに設置された
大容量リチウムイオン蓄電池



システムクラウド「IIJGIO」における消費電力削減量の試算

IIJは2009年よりシステムクラウドサービス「IIJGIO」を開始し、多くのお客様に利用されています。「IIJGIO」は白井DCCおよび松江DCPをはじめとするエネルギー効率の高いデータセンターを基盤とし、大規模なサーバ・ストレージ機器によってITリソースの集約効率を高めることで、大幅な消費電力削減を実現してきました。

サービス基盤全体の年間消費電力量は約99,000MWh／年であり、これはすべてがオンプレミス環境にある場合と比較して、およそ40%の電力量（一般家庭の約15,000世帯分相当（※））の削減になっていると試算しています。IIJは今後も「IIJGIO」のエネルギー効率向上を追求し、社会のIT利用における消費電力削減に寄与することで、CO2排出削減に貢献していきます。

（※）環境省「令和3年度家庭部門のCO2排出実態統計調査」より1世帯あたり平均4,175kWh／年として計算

製品・サービスでの取り組み

－ リモートアクセスによる人・モノの移動の削減

テレワークやWeb・ビデオ会議に代表されるように、仕事の環境が急速にデジタルシフトする中、IIJグループは快適で生産性の高いデジタル空間「デジタルワークスペース」を企業に提供しています。

低遅延で安定した接続環境を提供し、電波が不安定な場所でも通信が途切れにくいVPNサービス「IIJフレックスモビリティサービス」などにより、生産性を高め、企業価値の向上に寄与しています。

また、インフラの提供を通じてデジタルワークスペースを推進し、人やモノの移動に伴う温室効果ガスの排出量を削減することで、気候変動の緩和に貢献していきます。

- [IIJのデジタルワークスペース](#)
- [IIJフレックスモビリティサービス/ZTNA](#)

－ エネルギー使用量の可視化からCO2排出量削減目標策定までを支援

スマートメーターには、一般電気事業者が電気代の料金計算に用いる検針データが30分ごとに取得できる「Aルート」の他に、電力利用状況をほぼリアルタイムに取得できる「Bルート」が用意されています。IIJは、Bルートの利用に必要な認証機器やサービスの提供を行っています。

また、エネルギー使用量の可視化に必要なIoTセンサー、ネットワーク、および可視化プラットフォームを月額サービスで一括提供し、CO2排出量算定や削減目標策定の支援をワンストップで支援するソリューション「[省エネIoTパッケージ](#)」を提供しており、製造業におけるカーボンニュートラルの実現を支援しています。

- [IIJ高圧スマートメーターBルート活用サービス](#)
- [IIJと三菱HCキャピタル、企業のDX推進を支援する可視化ソリューションで協業 製造業のカーボンニュートラルを支援する「省エネIoTパッケージ」を提供開始](#)

再生可能エネルギーの活用

気候変動の軽減に向けた温室効果ガスの排出削減のためには、省エネルギーだけでなくCO2の排出量が少ないエネルギー源を選択することも求められています。データセンターをはじめとして事業活動に大量の電力を消費するIIJは、この課題に対応する必要性を認識し、エネルギー転換への取り組みを進めています。

松江データセンターパークでの取り組み

松江DCPは2022年2月から、実質再生可能エネルギー（再エネ）由来の電力（※1）をサイト1で導入し、2023年3月からは管理棟屋上および敷地内に設置した太陽光発電パネルの運用を開始いたしました。設置した太陽光発電パネルの設備容量は、松江DCPサーバ棟の約7%にあたり、年間の発電量は約340MWhを見込んでいます。現在ではサイト2でも再エネ由来電力の導入が完了しており、これらの取り組みの結果、松江DCPでは再エネ利用率100%を達成しています。

サイト1およびサイト2で導入した電力は、トラッキング付FIT非化石証書（※2）を活用しており、RE100（※3）に対応しています。

- （※1） 電力会社の電源に環境価値証書を付加することで、実質的に再エネ100%かつCO2排出量ゼロとみなされる電力
- （※2） 再生可能エネルギーや原子力といった非化石エネルギーによって発電された電源が持つ、非化石エネルギーとしての環境価値（CO2排出量の低減効果など）を証書にしたもので、2018年5月に開設された非化石価値取引市場を介して発行される
- （※3） RE100（Renewable Energy 100%）は、事業活動で消費するエネルギーを100%再生可能エネルギーで調達することを目指す国際的な枠組み

➤ IIJ、「松江データセンターパーク」において実質再生可能エネルギーを導入

白井データセンターキャンパスでの取り組み

白井データセンターキャンパスは、オンサイトメガサイトソーラー発電設備の併設や、オフサイトの発電設備からの電力調達を進めています。また、2023年4月からは一般社団法人日本卸電力取引所の非化石価値取引会員に加入し、FIT非化石証書（※）の購入及び仲介ができたことにより、希望するお客様に対して、FIT非化石証書を活用した再エネ由来電力の提供を行っており、今後もカーボンニュートラル実現に向けた取り組みを推進します。

（※）非化石電力のうちFIT制度（固定価格買い取り制度）を通して買い取られた電気の環境価値を証書にしたもの

➤ IIJ、自社サービス需要拡大に対応し「白井データセンターキャンパス」3期棟を増設

白井データセンターキャンパスに設置した
太陽光発電パネル



社会インフラを支える、 安全で強靱なインターネットサービスの提供



基本的な考え方

IIJは創業以来、社会の需要を先取りして革新的な技術を開発し、多くのインターネット関連のネットワークサービスを生み出してきました。継続的に高められてきた技術力を活かし、社会インフラを支えるための信頼性及び付加価値の高いITサービスの開発、提供を行うことにより、ネットワーク社会が最適に運営されることに貢献していく」という経営理念にもとづき、たゆまぬ開発・運用・利用検証のサイクルを実施しています。

インターネットは、人々の生活や事業活動を支える重要な社会インフラです。常に安全かつ安定したインターネットサービスを提供し続けることがIIJの責務であり、さらにその基盤として、自然災害や事故など不測の事態が発生した際にも途切れることのない強靱なバックボーンネットワークを構築・運用することは、IIJの企業価値を高めることにもつながると考えます。

また、インターネットが急速に発達したために、セキュリティやプライバシーの保護に様々な課題が生じています。IIJはこれからも、セキュリティサービスの提供やセキュリティ人材の育成などを通して、人々の生活を脅かすサイバー攻撃への対応力向上に貢献していきます。加えて、EUにおけるGDPR（一般データ保護規則）の施行をはじめ、個人データとプライバシーの保護を推進する動きが各国で進んでいます。IIJはこうした世の中の動きに合わせて、各国・地域の経済連携協定と連動した個人データの相互流通の枠組みや標準化の整備に対応し、サービスの開発と提供を続けていきます。

➤ ネットワークの強靱化

産業、教育、暮らしの基盤として、自然災害や事故、サイバー攻撃に負けない、強靱なバックボーンネットワークの構築と運用

➤ セキュリティとプライバシー保護

すべての利用者のプライバシーとセキュリティが、当たり前」に守られている世界を目指す

強靱なインフラの提供

インターネットはいまや産業や暮らしに欠かせない重要なインフラです。このインフラが自然災害や事故、サイバー攻撃などによって断絶されれば、私たちの生活に大きな影響を及ぼします。産業、教育、暮らしの基盤となる強靱なネットワークを構築し、24時間365日安定したサービスを提供し続けることが、日本のインターネットのバイオニアであるIIJの責務と考えています。

安定的なインターネットインフラの構築

- 日本最大級の強靱なバックボーンネットワーク

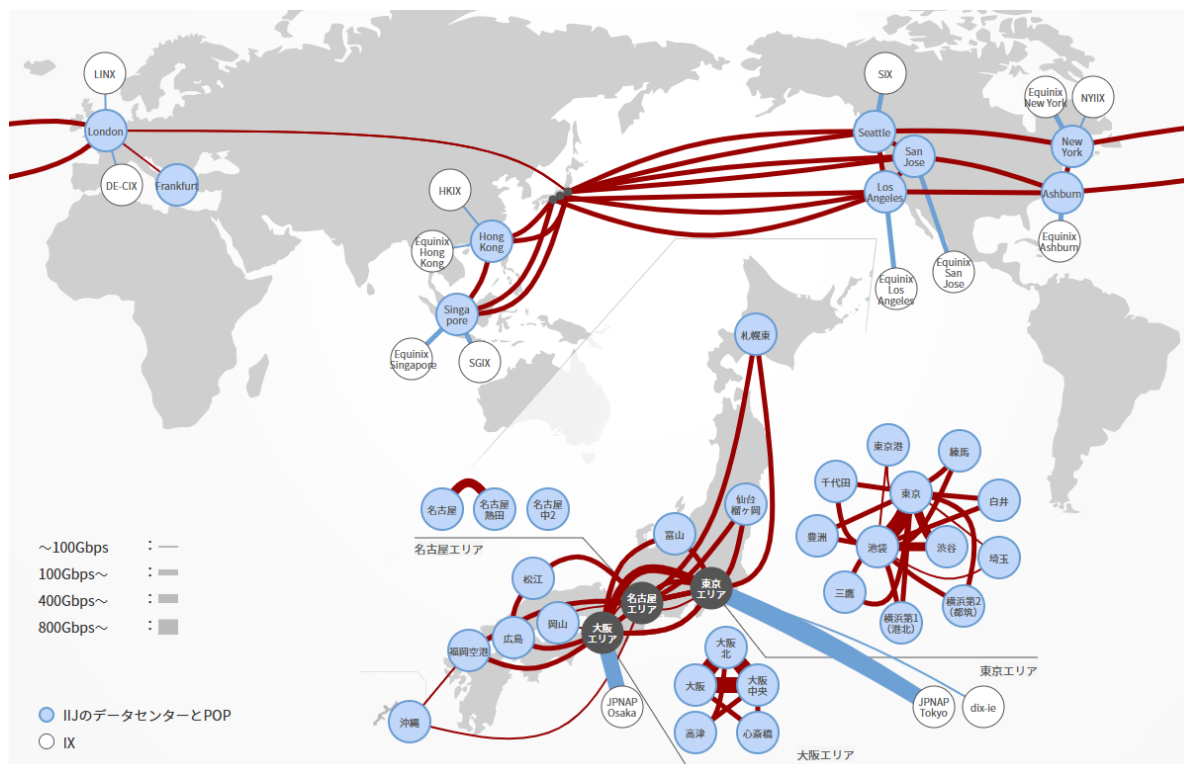
IIJのバックボーンネットワークは、国内主要エリアに多数の拠点が配置され、その拠点間は大容量の回線で結ばれています。また、日本のみならず、アジア、北米、ヨーロッパにも展開し、世界各地で海外の主要ISPと相互に接続することで、高品質で到達性の高いネットワークを構築しています。

自社のバックボーンネットワークだけでなく、インターネット全体の安定性向上のため、DDoS（※）や経路の不正操作などのサイバー攻撃、ネットワーク機器の脆弱性など、インターネット上で日々発生する様々な脅威にも対応し、世界中のインターネットコミュニティと連携しながら日夜取り組んでいます。

（※）DDoS: インターネットを通じた攻撃の1つで、悪意のある者がターゲットとなるホスト（コンピュータ等）に対して大量のパケットを送り、機能停止状態にするもの。

- バックボーンネットワーク
- IoT機器を介したDDoS攻撃発生の仕組みとバックボーンへの影響

2026年3月現在



災害などへの対応

IIJは、災害などの予期せぬ事態が発生した際でもお客様にサービスを提供し続けるため、災害対策を重視してきました。更に、東日本大震災での教訓を活かし、2011年にBCP（事業継続計画）運用体制を見直すための3カ年計画を立て、全社で取り組みました。BCP運用体制の再整備後も、過去のインシデント（※）も参考にした訓練シナリオの設計・訓練・振り返りを定期的に行い、改善を重ねています。また、従業員の危機対応意識向上のため、BCPに関する情報をイントラネット上に掲載し周知徹底するとともに、有事の際のバックアップ体制も整えています。

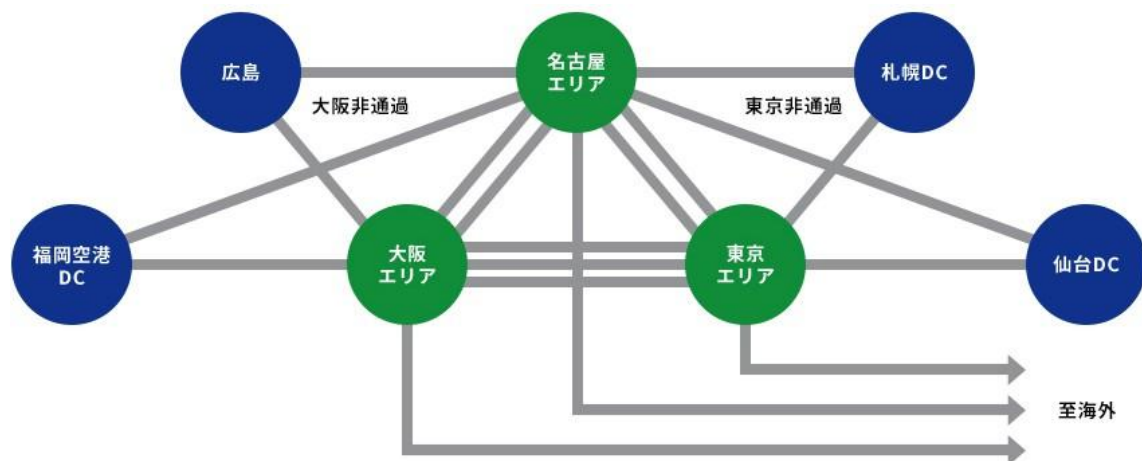
（※）インシデント：ウイルス感染や情報漏えいなど、重大事故につながる恐れがある事象のこと。

サービス・サポートの維持

IIJは様々な災害・障害を想定し、バックボーンネットワークを複数の通信回線や機器で構成する冗長化を行っています。

拠点間を繋ぐバックボーン回線として利用する回線事業者やその物理的なケーブルルートから始まり、国際区間の海底ケーブルシステムやその引き上げ場所に至るまで、可能な限り複数系統を用意することで、単一箇所の障害でサービスの停止を招かないよう様々なリスク分散を行っています。

バックボーン概略図



広域災害を想定し、ハブ拠点である東京・名古屋・大阪のいずれか1拠点が機能停止しても日本全国、海外への通信経路が確保される設計

また、東日本大震災のように甚大な災害が広範囲で発生した場合を想定し、主要ハブ拠点を東京・大阪・名古屋に分散配置する構成をとっています。仮に、そのうちの1拠点が大規模な災害で機能を停止した場合でも、残りの2拠点で通信経路を確保し、日本全国、そして海外への通信が可能です。併せて、各拠点間のルートも、日本海側ルート、内陸ルート、太平洋側ルートに分散させ、広域災害が発生した場合でもできるかぎり光ファイバーが切断されないよう設計しています。

これらにより、大規模な災害が発生してもバックボーンネットワークの機能を維持することができます。

➤ [東日本大震災から10年。あの日インターネットに起きたことを振り返る。](#)

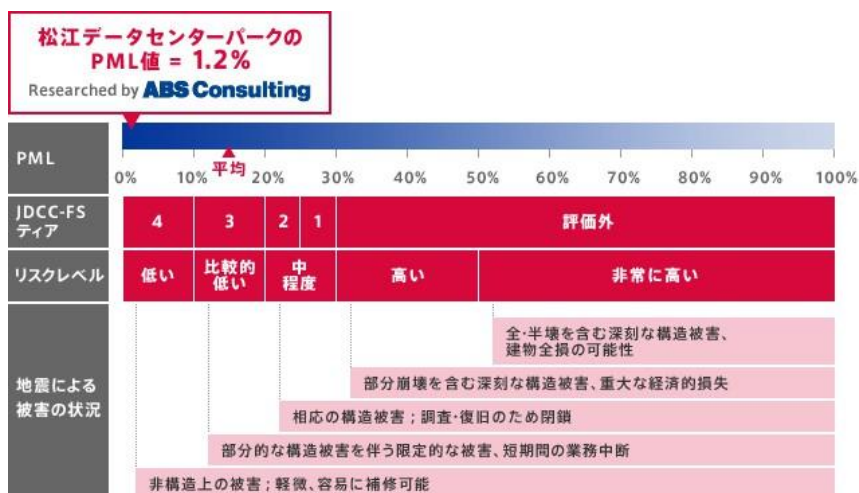
➤ [IIJバックボーン30年間の変遷](#) □

- データセンターの地震・停電対策

データセンターは、IIJの提供するサービスの基盤となるサーバや、お客様が利用するクラウドの基盤が設置された重要な拠点です。大規模震災発生時でも事業を継続できるよう、地震・停電対策を備えたデータセンターにてサービス設備を稼働しています。

IIJが保有する白井データセンターキャンパス、松江データセンターパークは、第三者による地震リスク算定で、それぞれPML（Probable Maximum Loss）6.4%、1.2%と高い評価を受けました。また、変電所から複数回線で受電することで送電線の障害に対応するとともに、停電時に備えて非常用発電機及び蓄電池を配備し、大規模災害などの有事にも事業継続ができるよう備えています。

➤ リチウムイオン蓄電池



- 有事に備える技術開発

近年、日本国内では災害が頻発化、激甚化し、さらに将来高い確率で大規模地震の発生が想定されるなど、これまでにない災害リスクの高まりが指摘されています。国の災害対策方針においては、災害時に迅速に回復可能な国土・地域・経済社会システムの構築（国土強靱化）が掲げられており、政府が推進する「公共安全LTE（PS-LTE）」に対応するサービスとして、一般ユーザによる設備混雑の影響を受けにくく、マルチキャリア及び災害時優先電話に対応した「IIJ公共安全モバイルサービス」を提供しています。

また、昨今では全国的かつ長時間に及ぶ携帯電話網の障害が発生し、利用ユーザだけでなく携帯電話網を利用しているIoT機器や電子決済端末にも影響が出ており、災害時のみならず、障害時でも通信を確保する技術の活用が求められています。IIJでは1枚のSIMカードで複数の携帯電話網に接続可能なマルチプロファイルSIMを開発し、社会インフラとして重要性が高まるインターネット通信の確保に対応しています。

- IIJ、公共機関専用の「IIJ公共安全モバイルサービス」を提供開始
- IIJ、1枚のSIMで国内2キャリアに接続可能な「マルチプロファイルSIM2.0」を開発

地域社会への支援

- 災害時のお客様支援・地域支援

IIJは災害時のライフラインとなり得る通信サービスの提供者として、また、地域社会の一員として、災害により被害を受けられた皆様への支援を行っています。これまでの災害では、被災地域の公共機関への通信機器の貸し出しや、被災地にお住まいの個人への通信料金の一部減免などを実施しました。

- IIJmioモバイルサービスにおける“令和8年岩手県大槌町の林野火災”にかかる災害救助法の適用について □
- IIJmioひかりにおける“令和8年岩手県大槌町の林野火災”にかかる特別措置について □
- The IIJ Stories — 日本を支えるIIJ篇 —

IIJが提供するセキュリティ

高度にIT化した現代社会において、情報セキュリティの確保は欠かせない課題です。IIJは、日常生活を支えるインフラであるインターネットの担い手としてこの重要性を認識するとともに、ISPとして培ってきた高い技術力と総合力でお客様に最適なセキュリティ関連サービスを提供することで、すべてのインターネット利用者のプライバシーとセキュリティが、「あたりまえ」に守られている世界を目指します。

➤ 「安全をあたりまえに」——“wizSafe”

セキュリティに関するIIJの取り組みを総称するブランド「wizSafe（ウィズセーフ）」は、インターネットの安全（Safe）を、皆様と共に（wiz=with）、熟練したエンジニア（wiz=wizard）の知恵（wiz=wisdom）で実現することを目指す姿勢を示しています。

このwizSafeブランドのもと、IIJは外部・内部における様々な脅威からお客様のシステムを守るため、複数の対策を組み合わせるマルチポイントセキュリティを提案し、実効性の高いセキュリティ戦略で企業ネットワークのセキュリティレベル向上に貢献しています。

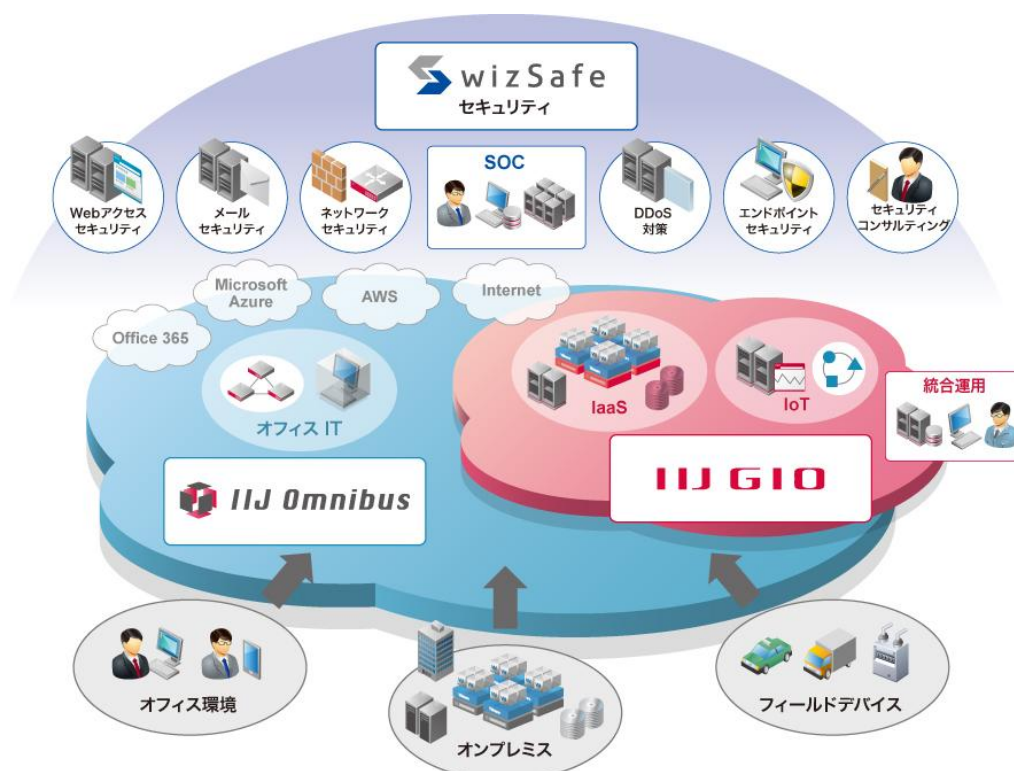
➤ [wizSafe（ウィズセーフ）](#)



高品質なセキュリティサービス

IIJは、ISPとして培ってきた高い技術力と総合力をもとに、統合運用という観点から、お客様に最適なセキュリティ対策をご提案しています。外部・内部の様々な脅威からお客様のシステムを守るため、複数の対策を組み合わせるマルチポイントセキュリティを提供します。

➤ [セキュリティ対策](#)



- お客様のネットワークを守るセキュリティオペレーションセンター（SOC）

IIJが長年培ったセキュリティに関するノウハウを活かし、ビッグデータによる自動監視と、アナリストによる高度なリスク分析を組み合わせ、お客様のITシステムで発生するセキュリティインシデントに対応するセキュリティオペレーションセンター（SOC）を運営しています。

- [SOCによる先進的な取り組み](#)
- [IIJ-SOCサービス](#)



プライバシー保護への取り組み

世界各国のプライバシー保護規制対応の支援

各種産業を支援するAIなど、最新のITは個人情報を含んだ大量のデータを扱うことが増えています。また、Webサイトの閲覧履歴追跡に用いられるcookie（クッキー）など、従来よりもさらにプライバシーに配慮した情報の取り扱いが社会的に求められています。



IIJは個人データをこれらの各国規制に対応した形で保護し安全に事業を進めることができるように支援するコンサルティングを行っています。また、EUのGDPR（一般データ保護規則）におけるデータ保護責任者やEU代理人のアウトソーシングサービス、制裁金やレピュテーションリスクの軽減のための有事対応支援サービスなど運用面でもサポートしています。

2024年には、世界各国のプライバシー保護関連規制（欧州ePrivacy指令およびGDPR、米国CCPAなど）に対応したクッキー同意管理ツール「STRIGHT（ストライト）」を開発・提供しています。

- [IIJプライバシー保護規制対応ソリューション](#)
- [世界のプライバシー保護規制対応を支援するサイト「BizRis」](#) 
- [IIJ、ブランド露出効果とプライバシー保護を両立する新しいクッキー同意ツール「STRIGHT」を提供開始](#)

セキュリティ情報の発信

IIJが日々のサービス運用や研究によって得られた知識、ノウハウを、公式ブログによる速報、及び定期発行する技術レポートを通して広く社会に還元しています。

- [wizSafe Security Signal](#) 
- [技術レポート「Internet Infrastructure Review \(IIR\)」](#)
- [Security Diary](#) 



■ 業界団体への参画

IIJはセキュリティに関する様々な団体に参画し、インシデント（※）の情報共有と協議・対応、人材育成などを通し、日本全体のセキュリティ能力の向上に貢献しています。

（※）インシデント：ウイルス感染や情報漏えいなど、重大事故につながる恐れがある事象のこと。

- [FIRST \(Forum of Incident Response and Security Teams\)](#) 
- [一般社団法人ICT-ISAC](#) 
- [NPO法人日本ネットワークセキュリティ協会 \(JNSA\)](#) 
- [日本セキュリティオペレーション事業者協議会 \(ISOG-J\)](#) 
- [一般社団法人日本コンピュータセキュリティインシデント対応チーム協議会 \(CSIRT\)](#) 
- [特定非営利活動法人デジタル・フォレンジック研究会](#) 



- サイバー捜査官の育成支援

IIJは、警察によるサイバー犯罪捜査、抑止活動を支援すべく、インターネットセキュリティの専門家として、専門知識の共有、捜査官への教育などで協力しています。

➤ [サイバー捜査官の育成支援](#)

- 国際カンファレンス「Black Hat USA」にてトレーニングコースを提供

Black Hat USAにおいて、IIJのセキュリティエンジニアチームが講師を務めています。

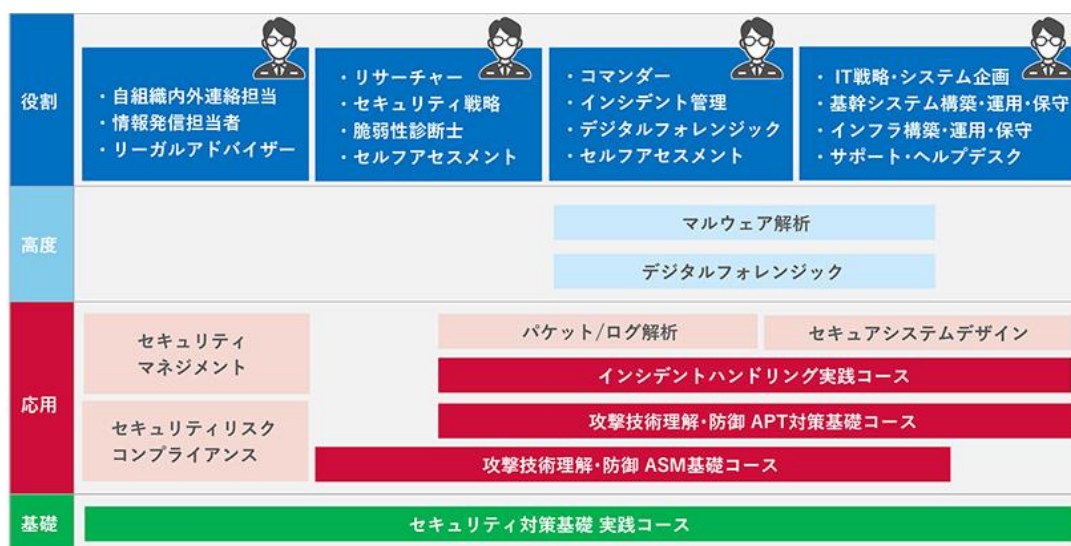
➤ [国際カンファレンス「Black Hat USA」でトレーニングコースを提供](#)

- IIJセキュリティ教育プログラムIIJセキュリティ教習所

日々、最新のサイバー脅威の動向を注視しながらセキュリティサービスを運用し、突発的なインシデントに対応しているセキュリティ専門のエンジニアが、その知見をもとにした高い知識・スキルを教授します。主に企業の情報システム部門のセキュリティ担当者やCSIRT部門担当者を対象に、基礎知識から実践を踏まえた応用知識まで、幅広いプログラムを提供し、人材不足が深刻なセキュリティスペシャリストの育成を支援しています。

本教育プログラムの一部講習は、経済産業大臣が「民間事業者等が行う特定講習」と位置付ける「情報処理安全確保支援士特定講習」として認定されています。

➤ [IIJセキュリティ教習所](#)



- 地域のセキュリティ人材育成

情報セキュリティ管理体制の強化がこれまで以上に求められている一方で、多くの地域企業では深刻なセキュリティ人材不足が続いており、人材育成が課題になっています。そのような状況に対応するため、IIJ九州支社では地域企業のお客様から出向者を受け入れ、セキュリティ人材の育成を支援しています。

➤ [IIJ九州支社、地域企業のセキュリティ人材育成を支援](#)

多様な才能と価値観を持つ人材が活躍し、 積極果敢に挑戦できる場の提供



基本的な考え方

日本で最初にインターネットの本格的商用サービスを始めたIIJは、1992年の創業以来、新しいことに積極的に挑み続ける企業文化を大切にしています。グローバル化が進み、世の中の変化がかつてなく激しくなっている現代において、今後も新たな技術や価値を生み出し、更に成長し続けていくためには、ダイバーシティを推進し、才能をいかんなく発揮できるような環境を整えることが重要です。

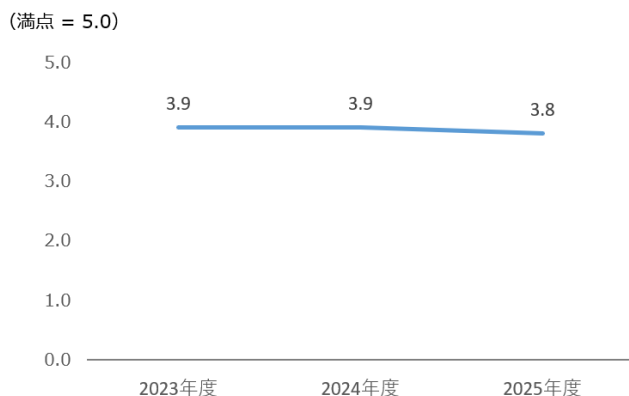
IIJには、創業当時から変わらない「個」を尊重する文化と、情報や価値観を共有し合い、何かを生み出していこうと考える「場」を自由につくる気風があります。経営理念にも「技術革新や社会貢献に積極果敢に挑戦する人材が集まり、誇りとやりがいをもって自律的に能力を発揮出来る場を提供していく」と定めています。

こうした理念のもと、IIJグループは多様な従業員の意見や想いを尊重し、それぞれの能力を発揮しながら理想の実現に向け自らチャレンジし、自由に取り組める環境を充実させることで、一人ひとりのキャリア形成をサポートしています。また心身ともに健康で安心して働ける安全な職場環境を整備することに加え、ワークライフバランスの実現を推進しています。これにより従業員とのエンゲージメントをより一層向上させていきます。

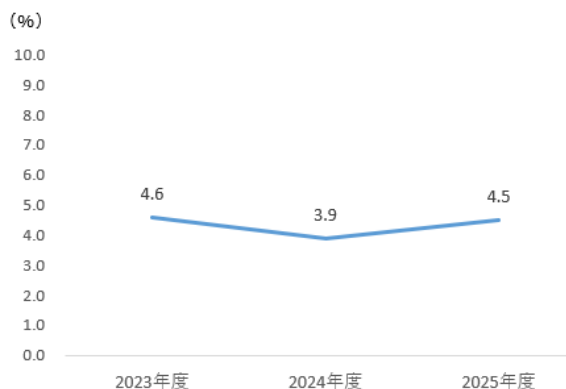
IIJグループの事業において、「創業来培ってきたインターネット関連技術」「顧客ニーズに合った多種多様なサービス群」「約16,000社の顧客基盤」等が重要な知的財産であり、これらを支える人材が競争力の源泉です。IIJに根付いた挑戦を後押しする社風が、個々人の想いや目標に合致し、その結果として付加価値と信頼性の高い新たな技術やサービスを創出し、それらを安定的に運用し提供することで、社会に貢献してまいります。

IIJグループは、このように人的資本や知的財産を尊重し伸ばしていく経営を実践し、継続することで、更なる企業価値向上を図ってまいります。

IIJ（単体）意識調査結果-総合満足度



IIJ（単体）離職率推移



IIJでは社員意識調査を年1回実施しており、総合満足度は高い水準で推移しています。また離職率に関しては業界平均である10%前後（情報通信業雇用動向調査、厚生労働省調べ）に対して低い比率で推移しています。

➤ ダイバーシティの推進

性別、国籍、障がいの有無などに関わらず、すべての従業員の価値観が尊重され、能力を発揮できる職場環境の提供

➤ 人材の育成

従業員の自己実現や学習意欲、社会貢献のモチベーションを最大限尊重し、支援する風土の維持・発展

➤ 安心・安全な労働環境の整備と ワークライフバランスの実現

心と体の健康を守る職場環境を提供するとともに、従業員の仕事と家庭生活の両立を支援

DE&I（ダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョン）方針

IIJグループは、経営理念の一つとして、「多様な才能・価値観を有する人材、技術革新や社会貢献に積極果敢に挑戦する人材が集まり、誇りとやりがいをもって自律的に能力を発揮出来る場を提供していく」と掲げています。性別・国籍・障がいの有無等の属性や新卒・中途採用の別に依ることなく、多様な人材を受け入れ、様々な視点や価値観を尊重しながら、能力重視の人材活用・登用を実践しており、今後も継続していきます。また、上記の経営理念を追求し続けることで、新たな技術や価値を生み出していきたいと考えております。

人材構成の特性

IIJグループの技術・サービス部門に従事する従業員は、2026年4月時点で全体の約70%の構成比率であり、その多くは女性比率が低い理工学を専門分野とする大学他より採用しております。また、当社は1992年の創業であり、事業立ち上げ当初は新卒採用を行わず中途採用が中心で、これより高い年齢層ほど男性従業員及び中途採用者の構成比率が高いとの構造的な特性があります。

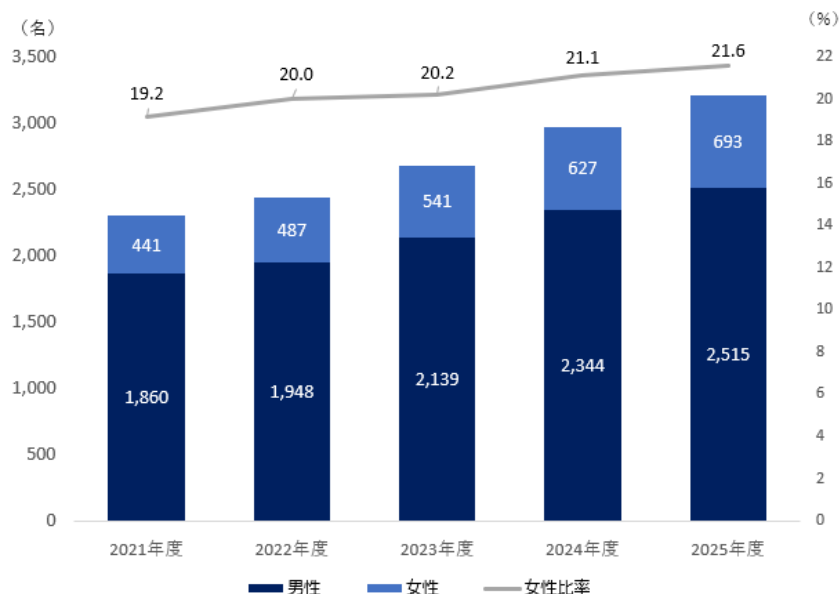
女性活躍推進

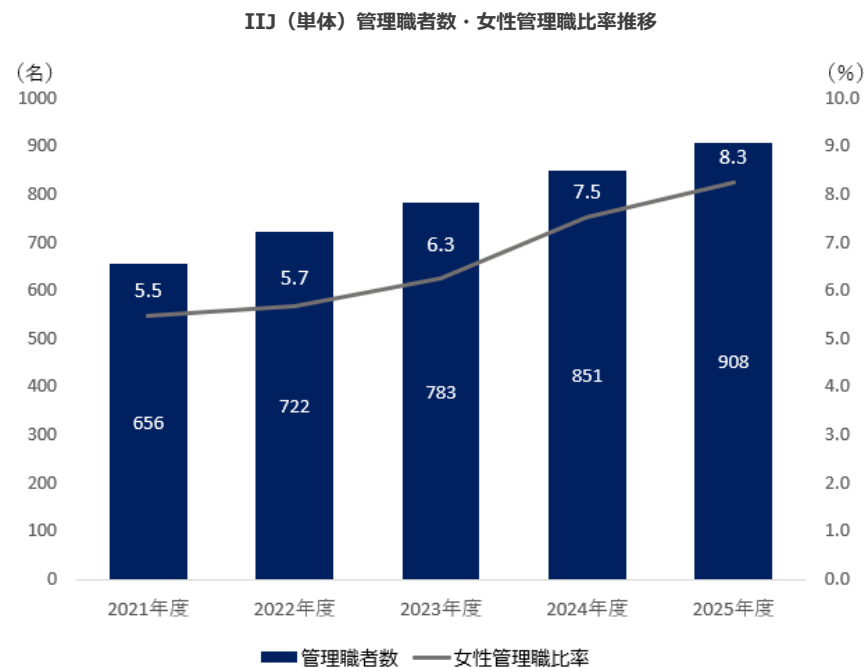
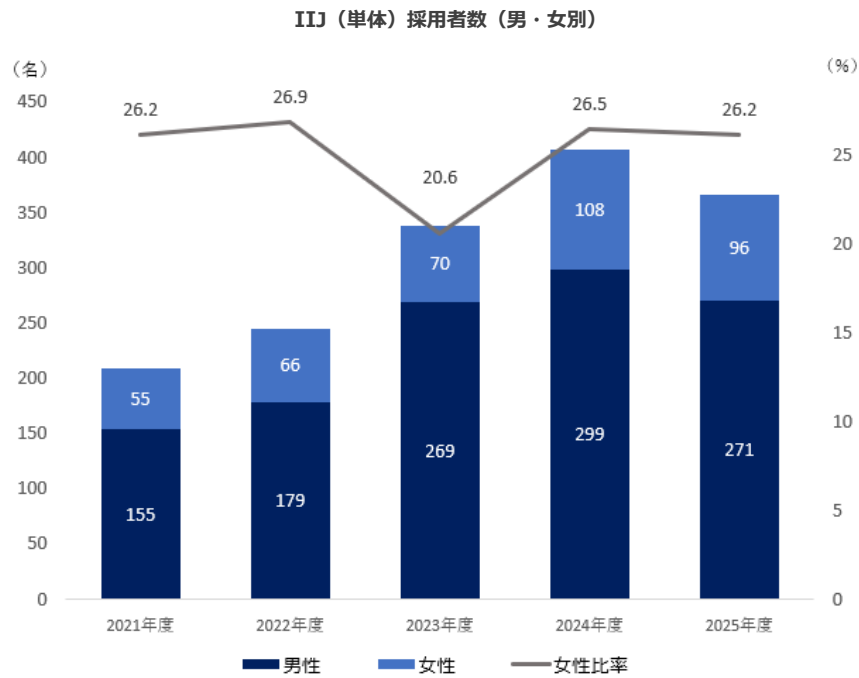
IIJでは、女性活躍推進を中長期的な会社の成長において重要な取り組みと捉え、目標を設定し、取り組みを行っています。

IIJにおける女性活躍推進の現状

近年、当社の女性採用数（新卒・中途）、女性社員比率、女性管理職比率はいずれも増加しています。2026年4月現在、当社の女性管理職比率は8.8%となり、FY26の目標8%以上を前倒しで達成いたしました。

IIJ（単体）社員数（男・女別）





女性の活躍推進に関する目標

IIJは、次世代育成支援対策推進法および女性活躍推進法に基づく一般事業主行動計画において、以下の目標を設定しています。

■ 行動計画

- 計画期間：2025年4月～2027年3月
- 女性管理職比率：2026年度 8%以上
- 新卒採用における女性比率：25%以上

➤ [女性活躍推進企業データベース（厚生労働省）](#)

女性活躍推進に関する取り組み

IIJでは、女性社員へのインタビューの社内発信やセミナーを通して女性活躍に関する意識の醸成を促しています。

- キャリアインタビューの開催

女性管理職の社員へのキャリアインタビューや座談会を開催し、社内に発信することで、女性活躍についての理解促進や自身のキャリアを考えるきっかけづくりを行っています。

- 女性特有の健康課題を知るセミナーの開催

女性特有の健康課題についてのセミナーを開催しています。特有の課題を共有して学ぶことで、より健康で安心して働ける職場環境づくりに繋がっています。

えるぼしの取得

IIJグローバルソリューションズは、女性活躍推進法に基づく認定制度「えるぼし」において、「採用」「継続就業」「労働時間等の働き方」「管理職比率」「多様なキャリアコース」の全項目の評価基準を満たす企業として最高位の「三ツ星」の認定を2019年に取得しています。



中途採用者の活躍推進

活躍推進の取り組み

人材構成の特性のなかで、2026年4月現在のIIJグループの管理職における中途採用者比率は約70%であります。中途採用者を対象としたオンボーディング施策として、入社オリエンテーション、上長面談や状況確認アンケート及び人事面談を実施し、入社後のサポートを行っています。また、入社6ヶ月後と入社1年後にフォローアップ研修を実施し、中途入社の同期との交流や会社施設見学を行うなど、会社理解を深める機会も用意しています。

外国人従業員の採用

外国人従業員の採用状況

DE&I方針に沿い、IIJグループは、国籍等に依ることのない採用を継続しています。インターネット関連の技術研究の職種をはじめとする様々な分野で、外国人従業員が勤務しています。

障がい者の活躍支援

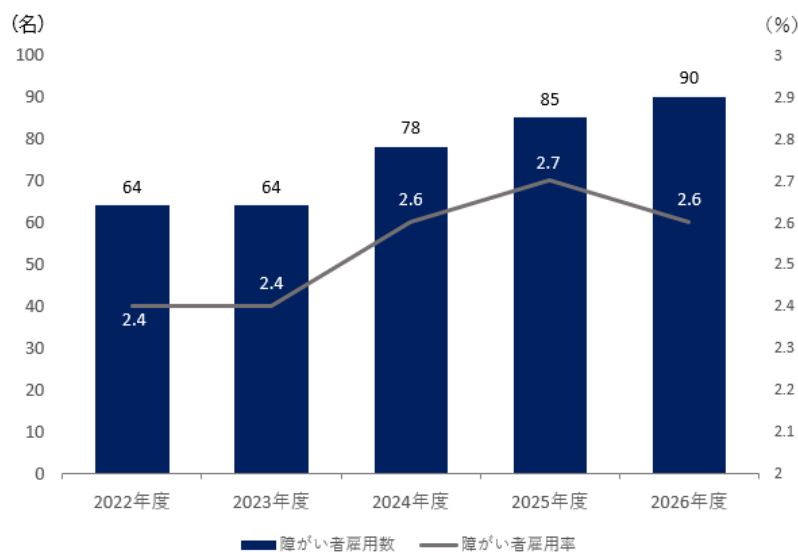
障がい者雇用と活躍支援

IIJグループは、様々な障がいを持つ方の雇用について、限定された業務に従事するのではなく、個人の障がいの度合いや能力に応じて多様な業務を担当してもらうことで、従業員全員が活き活きと働くことのできる職場環境づくりに努めています。

特に地方拠点においては、歩行に障がいのある従業員が通勤時に不便を感じる人が多いことから、自宅で勤務できる就業制度を導入しています。2026年4月現在、札幌市にあるIIJグループの事業所周辺で44名、松江市の事業所周辺では14名の従業員が同制度を利用して業務に従事しています。

2026年6月現在、障がい者雇用率は2.6%となっており、引き続きさらなる雇用推進に取り組んでいきます。

IIJ（単体）障がい者雇用数・雇用率



(※) 重度障がい者（フルタイム）は1名あたり2名分としてカウント

(※) 各事業年度の6月1日時点

➤ IT技術を活用し、障がいのある方の在宅勤務を支援

シニア人材の活躍

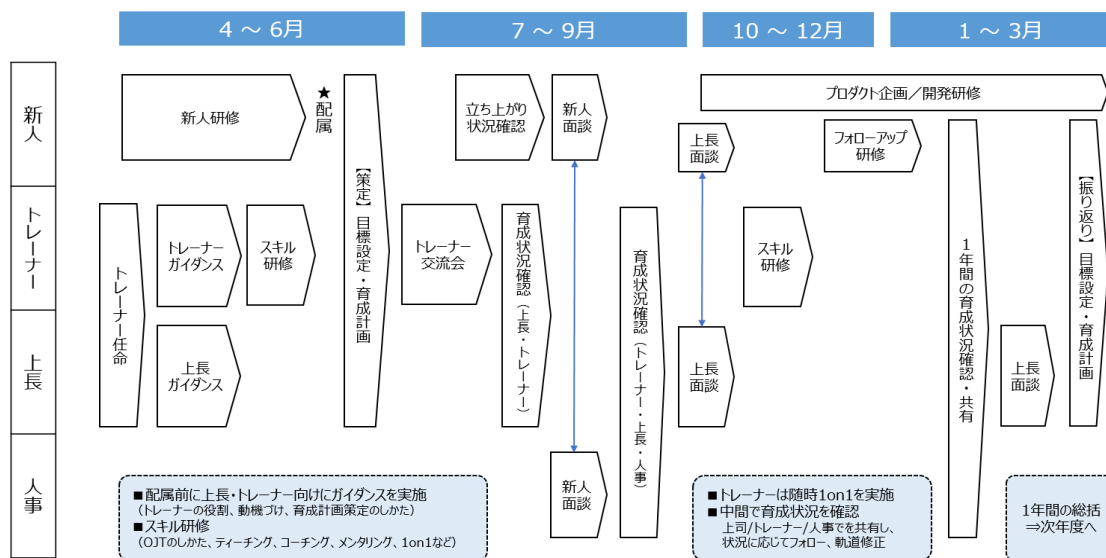
シニア人材の雇用と活躍推進

IIJは、定年退職者を再雇用する「継続雇用制度」を導入しています。満60歳で定年退職となった日の翌日から、嘱託職員として勤務を継続することができる制度で、過去5年継続してほとんどの定年退職者が利用しています。再雇用者の職務内容や労働時間などについては、会社と本人との協議により決定し、現在も多くのシニア人材が活躍しています。

人材育成の方針

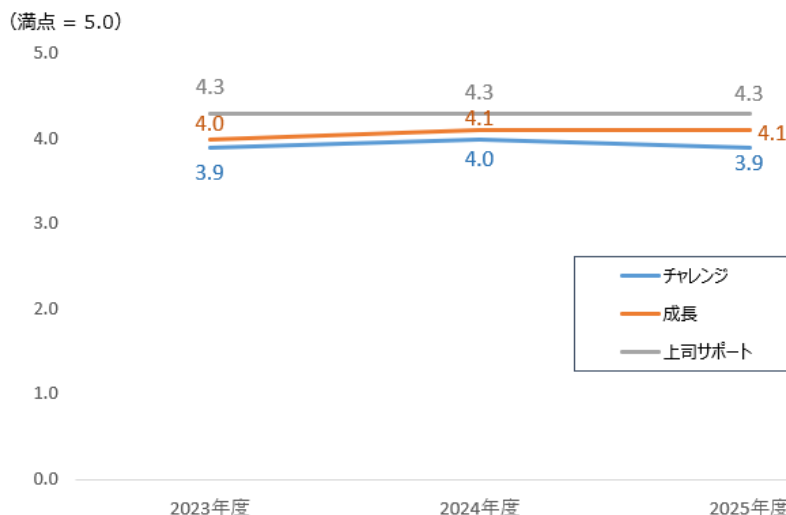
人材育成は業務を通じたOJT（On-the-Job Training）を根幹とし、従業員の年次や役割に応じた階層別研修、専門知識やスキル習得を目的とした部門別研修等にて補完しています。当社グループは、国内最大規模のインターネットバックボーン構築・運用、斬新なサービスの自社開発・運用等の業務機会を提供することが、意欲的な技術者層のモチベーション向上に繋がるものと考えております。営業職はネットワーク・システム等の知識が必要となりますが、技術基礎研修、IIJサービス理解研修やサービス理解テスト等により、これら知識の習得・定着を図っており、営業活動を通じたOJTを補完しております。営業部門主催によるトップフォーマーの営業アプローチ・成功提案事例等を共有する勉強会等もあり、多くの文系出身者の営業が活躍しております。当社の新卒従業員はこれら業務における上司からの指導に加え、OJTトレーナー研修を受講した上司以外の従業員と個々の特性・志向を勘案した能力開発目標を設定し、一年を通して早期に自律的な業務遂行ができるためのサポートを受けます。2018年度以降、毎年100名を超える従業員がOJTトレーナー研修を新たに受講し、トレーナー経験者は年々増加しております。これら人材の増加は全社的なOJTレベルの向上に繋がるものと考えております。

OJTトレーナー制度概要



当社は、若手従業員の育成が非常に重要と認識しており、OJTが有効に機能しているかを測る指標として、年次の従業員意識調査における若手従業員の「チャレンジ」、「成長」、「上司サポート」（※3）に関する評価結果を重要視しております。当社はこれらの指標の総合が3点台後半以上となるように評価結果の要因分析、改善対応に努めており、今後もそれを継続してまいります。

IIJ（単体）OJT評価指標



(※3) 従業員意識調査は年1回実施されるエンゲージメント調査(約50項目)であり、各項目は1(そう思わない)、2(どちらかというと思わない)、3(どちらともいえない)、4(どちらかというと思う)、5(そう思う)の5段階で評価がなされます。OJT評価指標「チャレンジ」、「成長」、「上司サポート」は、以下の要素を包含する設問に係る評価結果となります。

- ・ 「チャレンジ」：チャレンジ支援、新しい発想・提案の受容、再チャレンジできる風土等
- ・ 「成長」：現在の仕事での成長実感、成長支援の仕組み・制度等
- ・ 「上司サポート」：上司・先輩からのアドバイス、上司満足度等

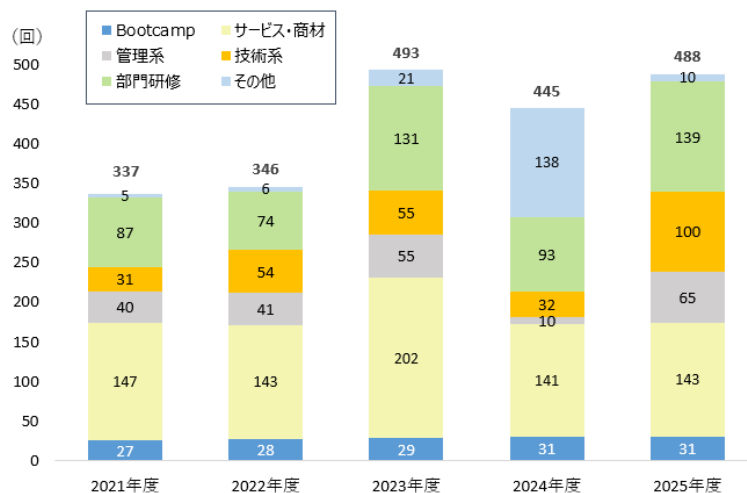
なお、これらの3指標について男女別で見ると女性の方が掲載年度において若干高い結果となっております。

当社はOJTを補完する新人研修(約1カ月間のビジネス基礎研修、技術職は追加で約1ヶ月間の技術研修等)、新任管理職・役員研修(課長・部長・役員向け組織運営・部下育成・意思決定等の研修)、階層別研修(リーダーシップ・マネジメント研修)、専門スキル開発(営業研修、技術研修、IIJサービス理解研修等)、グローバルキャリア開発(海外トレーニング制度、グローバルキャリア制度等)に加え、各部門主催による勉強会・研修に参加する従業員も多く、部門の垣根を超えた活発な人材交流とともに自律的な能力開発がなされています。

各部門主催による主な勉強会・研修

IIJ Bootcamp	様々な技術が登場した経緯や特徴の違う代替技術等に関する座学に加え、TA(Teaching Assistant) のサポートを受け、実際にツールやフレームワークに触ることにより、実践的なスキル習得を目的とした若手技術者向け勉強会
新人技術研修	各技術・サービス領域における社内第一人者が講師を務め、当社での業務遂行に必要な技術・業務知識等の習得を目的とした新卒技術者向け勉強会
IIJ Sales Bootcamp	集合研修やトレーニングコンテンツによるインプット、OJTでの営業活動の実践、成果に対する評価を体系的に連動させ、入社後1年で目指す姿・状態に到達させる新卒入社営業職向けオンボーディングプログラム
IIJサービス理解研修	インターネット接続、クラウド、セキュリティ、モバイル/IoT等のテーマ毎に、IIJサービスのラインアップ・特徴、基礎的な技術概念、業界動向等を体系的に学ぶ基礎研修
その他の部門研修	プロジェクトマネジメント研修(プロジェクト計画、リスク評価・管理、監視・コントロール手法等)、ITサービスマネジメント研修(作業品質向上、運用の継続的改善を目的とした分析方法等)、成功事例共有会等

IIJ(単体) 勉強会・研修等の開催回数



- (※) Bootcamp:技術者向けハンズオン研修
- (※) サービス・商材：主に営業・技術向けのIIJサービス・その他商材の勉強会
- (※) 管理系：管理部門主催(情報セキュリティ、財務会計研修等)の研修
- (※) 技術系：技術情報の勉強会
- (※) 部門研修(自部門向け研修)：プロフェッショナルサービス技術研修、Sales Bootcamp等
- (※) その他：外部講師による講演会等

また、キャリア申告制度(※4)や公募型の兼務制度であるセレクトジョブ制度(※5)等によるキャリア形成支援、担当業務から1年間離れて新技術の追求や新サービスのアイデア実現を目指すテックチャレンジ制度、専門領域での能力発揮を追求するエキスパート職の設置、タレントマネジメントシステムを活用した適材・適所な役割配置等の人事施策により、個々の従業員の経験・スキル等を勘案したキャリア開発・役割発揮をサポートしております。

- (※4) 従業員が今後のキャリアの方向性を年1回申告し、上司・人事部が中長期的な視点での人材育成や異動・配置等を検討する制度。
- (※5) 従業員は各部門の公募（2023年度：61部門が参加）に応募し、他部門での半年間の兼務（目安：業務時間の20%）を通じて、未経験業務へのチャレンジや部門を跨いだミッション遂行を通じて多様な経験を積むことができる制度。

人事制度

当社は社員の成果や貢献を適切に処遇する仕組みと、仕事を通じた自己実現につながる教育支援環境を整備しています。

➤ 人事制度

安心・安全な労働環境の整備とワークライフバランスの実現

IIJにとって従業員は大切な財産であり、健全な事業活動の基盤であると認識しています。

従業員の心身の健康を支える健康経営を推進し、一人ひとりが意欲と活力を高めながら、心身共に健康で安心して、安全に働き続けられる環境づくりを目指すとともにワークライフバランス実現を支援するための環境整備に積極的に取り組んでおります。

健康経営の推進

トップメッセージ

多様な才能を持つIIJの社員が高い意欲と充実感を持って働くためには、心身の健康が必要不可欠です。社員一人ひとりの健康を支えることがIIJの企業としての成長、ひいてはインターネット技術でイニシアティブをとり続けることにつながっていきます。

「自己実現する職場の提供」という経営理念のもと、IIJは社員の健康管理を経営的な視点で考え、戦略的に実践していきます。

代表取締役 社長執行役員 谷脇 康彦

健康経営優良法人

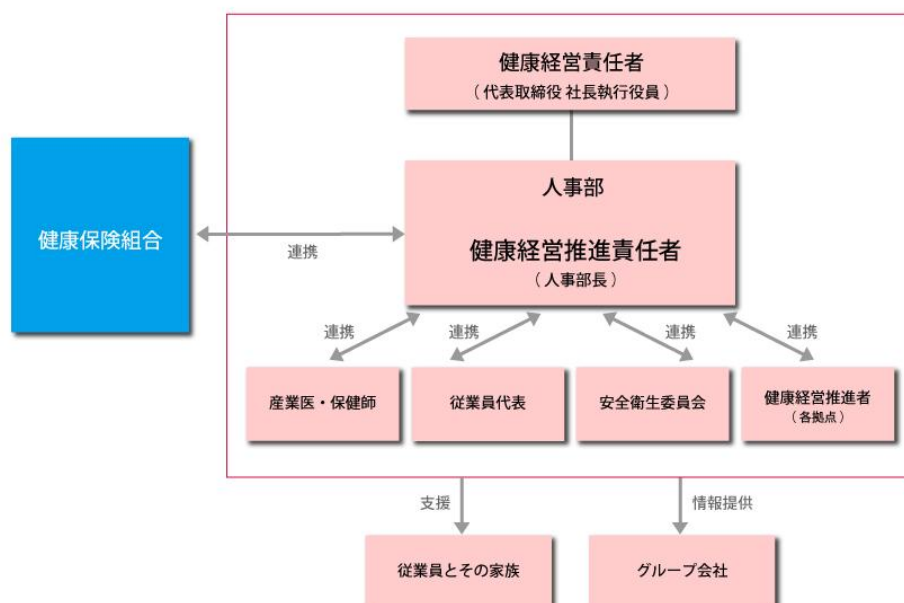


「健康経営優良法人」とは、経済産業省と日本健康会議が、特に優良な健康経営を実践している企業を認定するものです。

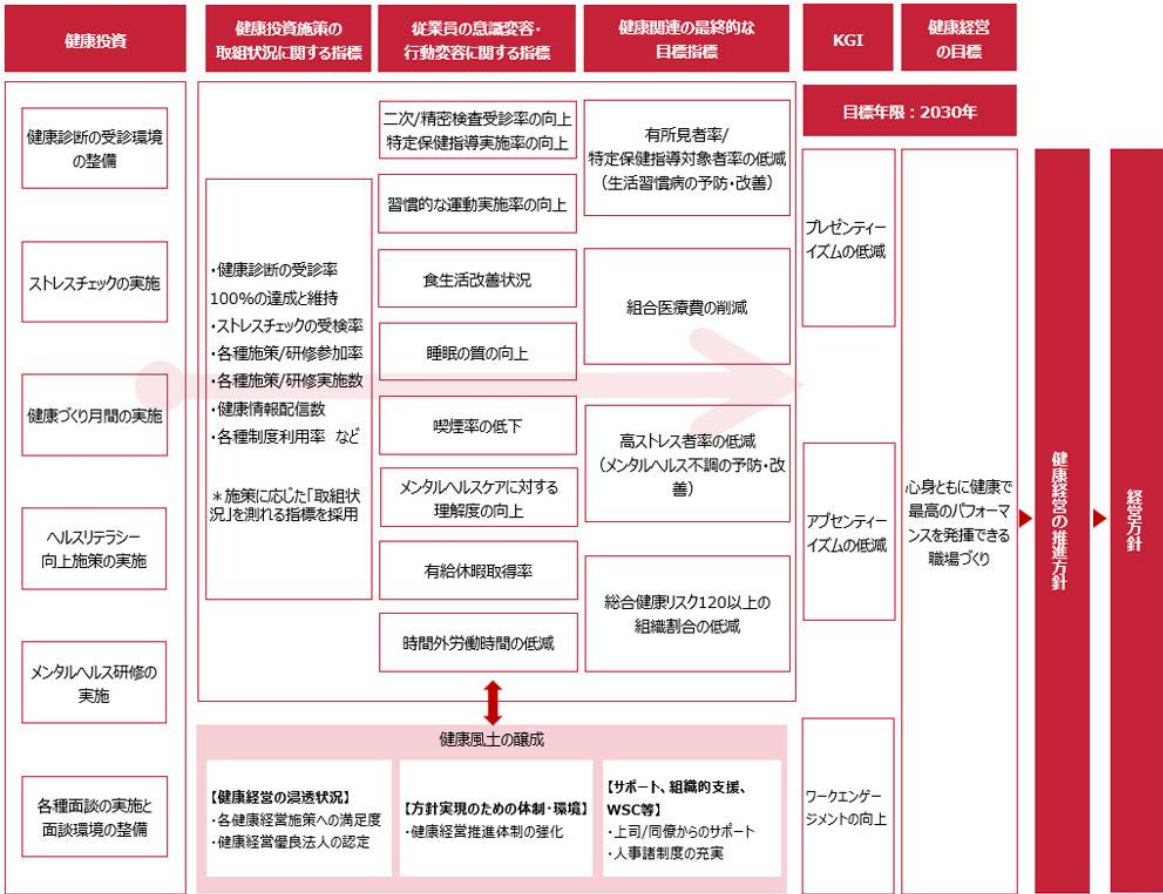
IIJは従業員の健康管理を経営的な視点で考え、健康の保持・増進につながる取り組みを戦略的に実践する企業として、「健康経営優良法人」に認定されています。

健康経営推進体制

IIJでは、健康経営責任者を筆頭に、人事部が中心となり、産業医、保健師、従業員代表、安全衛生委員会、各拠点の健康経営推進者と連携しながら全社一体となって健康経営を推進しています。



IIJでは、経営方針に基づき、健康経営の目標から健康投資までのつながりを整理し、可視化することで、施策の実効性を高めています。



健康投資の最終的な目標指標

健康投資の最終的な目標指標として、「アブセンティーズムの低減」「プレゼンティーズムの低減」「ワークエンゲージメントの向上」「社員意識調査の総合満足度の向上」「ストレスチェックの総合健康リスクの低減」を設定しています。

	2023年度	2024年度	2025年度
アブセンティーズム (※1)	1.5%	2.0%	1.9%
プレゼンティーズム (※2)	B判定	B判定	B判定
ワークエンゲージメント (※3)	—	—	3.4
社員意識調査 (総合満足度) (※4)	3.9	3.9	3.8
ストレスチェック (総合健康リスク) (※5)	84	83	82

(※1) アブセンティーズム：心身の疾病等により業務につけない状態。
測定方法：傷病による1ヶ月以上の休職者の割合

(※2) プレゼンティーズム：何らかの症状を抱えながら働いている状態。
測定方法：「Wfun（産業医科大学で開発された、健康問題による労働機能障害の程度を測定するための調査票）」による事業所判定。A～Dまでの4段階評価（Aが最高評価）。

(※3) ワークエンゲージメント：仕事に関連する心理状態を表し、活力・熱意・没頭の3つを特徴とする、ポジティブで充実した状態。

測定方法：社員意識調査にてUWES9項目版により算出（1～5の範囲で表記。5が最高評価）。

（※4）社員意識調査は年1回実施されるエンゲージメント調査（約50設問）であり、各項目は1（そう思わない）、2（どちらかというと思わない）、3（どちらともいえない）、4（どちらかというと思う）、5（そう思う）の5段階で評価がなされる。「総合満足度」は、「私は総合的に満足している」という設問についての評価結果。

（※5）ストレスチェック 総合健康リスク：「量・コントロール」「職場の支援」のスコアをもとに算出されるリスク値。職場で健康問題の発生するリスクを表す。全国平均値（100）を基準値とし、基準値を上回る程リスクが高まっている状態を表す。

健康経営への取り組み

－ 健康維持への取り組み

従業員に対し健康診断または人間ドック（年1回）、インフルエンザ予防接種を無料で実施し、個人の健康状態を管理しています。35歳以上の従業員は生活習慣病予防健診、35歳時と40歳以上の従業員は人間ドックを受診でき、受診日については特別有給休暇として認めています。さらに、直近6カ月平均で月4回以上夜勤を行った従業員に対しては年2回の健康診断の受診を義務付けています。

健康診断の結果は、産業医が全て確認を行い、治療が必要な従業員に対しては、医療機関の受診勧奨や保健指導面談を行うなどの個別フォローを実施しています。また、健康診断結果や健康状況の記録や閲覧などができるスマートフォンアプリを導入したり、女性特有の健康課題を知るセミナーや健康に関するセミナーを開催したりするなど、ヘルスリテラシー向上の取り組みも行っています。

なお、各事業拠点には休養室、AED、体重計、血圧計などの設備を設置しているほか、産業医・保健師に、定期的に健康相談ができる環境を整えています。

－ メンタルヘルスへの取り組み

心の健康づくり計画を策定し、従業員へ周知しています。同計画に基づき、労働安全衛生法に基づくストレスチェックを年1回実施し、高ストレスにより面接指導が必要と考えられる従業員に対して、希望に応じ産業医との面談を行っています。ストレスチェックの結果は、部長職以上の役職者を対象にした「ストレスチェック集団分析結果報告会」で共有することで、職場環境の改善を役職者が主導して行う仕組みとしています。

また、産業医・保健師との面談や外部カウンセラーによるカウンセリングを導入し、相談のしやすい環境を作っています。

その他、メンタルヘルスケアの一環として、メンタルヘルス研修（ラインケア・セルフケア）や、良好な人間関係構築に役立つコミュニケーション研修（アンガーマネジメント、アサーティブコミュニケーション）などを実施しています。

－ 健康増進への取り組み

年に2回（5月と11月）健康づくり月間を設け、禁煙、運動機会の増進、食生活改善、ヘルスリテラシー向上を目的とした健康増進への取り組みを行っています。

主な取り組み実績

- 禁煙週間、禁煙デーの設定、禁煙啓蒙
- 食生活改善週間の設定、情報提供
- 歩数競争大会、ラジオ体操イベントの実施
- 健康に関するセミナー（女性特有の健康課題、健康診断の見方）の開催
- クラブ活動支援
- フィットネスクラブへの費用補助 等

当社は、労働時間管理方針に基づき、労働基準法の遵守及び労働時間適正化に向けた取り組みを推進しています。残業の事前申請や各部門の残業状況レポート作成等により従業員の残業時間を随時把握し、残業時間が一定水準を超過する場合には、各部門への注意喚起やヒアリング、超過者への産業医面談等を実施しています。

年次有給休暇に加えて、アニバーサリー休暇等の特別休暇を従業員に付与し、心身のリフレッシュができるよう整備しています。また、特別休暇を含まない年次有給休暇5日以上を取得を徹底しています。

月平均残業時間

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年
月平均残業時間	28.1	27.7	26.2	24.8	24.9

有給休暇取得日数・取得率

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
年間平均取得日数（日）	11.3	12.6	13.1	12.6	12.6
年間平均取得率（%）	64.4	71.0	75.0	73.2	73.5

コミュニケーションの促進

社内チャットツールや情報共有ツールなどを整備し、従業員間のコミュニケーションの活性化を促進しています。また管理職には部下との1on1面談を推奨し、部署内のきめ細かな対話を推進しています。加えて、精神面・身体面のリフレッシュをしながら社員との交流ができるクラブ活動への支援・補助も行っています。

ファミリーデー

日頃従業員を支えている家族を職場に招待し、会社や仕事に対する理解を深めてもらうとともに、家族との交流を通じて「働きやすい・家族を大切にする職場の雰囲気づくり」を行うことを目的にファミリーデーを実施しています。社内見学や職場体験、会社に関するクイズ大会、小グループに分かれての参加者同士の交流など、様々なプログラムを用意しています。



ワークライフバランスの実現

IJJでは、従業員個々のライフステージや価値観などを尊重しつつ、能力を最大限発揮できるように、ワークライフバランスの実現を支援するための取り組みを進めています。

「育児・介護休業制度」「私傷病復職休暇」他の病気、育児、介護等においても仕事との両立が図れる諸制度を整備しております。また、従業員の業務特性や個別環境に合わせて、「フレックスタイム制度」「ずらし勤務制度」「短時間勤務制度」、場所に依存しない働き方として「リモートワーク勤務制度」等を設けています。

- 多様な勤務時間（フレックスタイム制度、裁量労働制度）

制度	概要
フレックスタイム制度	部門の業務特性に合わせて、部署ごとに設けたコアタイムに則り、勤務時間を柔軟に設定して働いています。また育児中の従業員は子が小学6年生になるまで「育児フレックスタイム制」を、介護中の従業員は「介護フレックスタイム制」を利用することができます。
裁量労働制度	労使で定めた時間を労働したものとみなし、業務の進め方や時間配分、労働時間そのものまで従業員の裁量に任せ、自身の判断で業務に効率的かつ効果的に取り組んでもらう制度です。
ずらし勤務制度	育児、介護の両立や自己研鑽の時間確保など個人ニーズに応じた柔軟な働き方が可能となるよう、時差出社ができる勤務緩和制度です。
短時間勤務制度	育児・介護中の従業員を対象に、1日あたり1時間30分（ビジネスサポート職は2時間）を限度に、所定の労働時間を短縮できる制度です。育児中の場合は、子が小学1年生の9月末（ビジネスサポート職は小学3年生修了まで）、介護中の場合は3年間利用できます。

- 多様な就業環境（リモートワーク、サテライトオフィス、フリーアドレス）

働き方改革の一環として導入したリモートワーク制度は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策として、2020年より全社へ利用を拡大しました。感染拡大が収束したのちも一定の割合でのリモートワークを導入することで、対面でのコミュニケーションによる円滑な業務遂行を担保しながら、リモートワークのメリットを享受する勤務形態を導入しています。

同じくサテライトオフィス制度を営業部門を中心に導入し、今後も効果が見込める部門を対象に拡大する予定で、従業員の働き方の選択肢を更に増やしています。

さらにオフィスにはフリーアドレスを導入しており、シームレスな職場環境を実現し、社内コミュニケーションの活性化を図っています。

➤ [採用ポータルサイト：多様な働き方](#) □

ライフステージに合わせた、さまざまな支援制度

- 育児支援制度

法令で定められた産前・産後休業や育児休業のほかに、独自で導入している配偶者特別休暇や育児フレックスなど、法令で定められている以上の制度を整備し、サポートを行っています。取り組みの結果、性別を問わず多くの従業員が、産前産後休業はもちろん、育児休業を取得し、休業後に復職をしています。当社は、2026年に次世代育成支援対策推進法に基づく「子育てサポート企業」として、3回目のくるみん認定（厚生労働大臣認定）を受けました。

男性及び女性の育児休業制度利用率を各々10%以上及び90%以上を目標に、子育てと仕事を両立しやすい環境整備を進めています。

➤ [採用ポータルサイト：子育て・介護支援](#) □



－ IIJ（単体）育児休業制度利用率及び育児休業後復職率

		2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
育児休業制度利用率 (%)	男性	24.6	33.3	53.5	61.9	61.8
	女性	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
育児休業後復職率 (%)	男性	92.9	100.0	100.0	97.0	100.0
	女性	100.0	100.0	93.3	100.0	93.3

－ 不妊治療と仕事との両立支援

不妊治療を行う従業員への支援として、従業員が安心して継続的に勤務できるよう、出生支援休暇（特別休暇）やフレックス制度、リモートワークの利用率拡大など、必要な勤務緩和を行っています。

－ 介護支援制度

従業員が介護を理由に離職することのないように、介護休業は1日単位で取得でき、かつ取得日数は対象家族1人につき最大365日までと、法令を上回る制度を導入しています。介護中の従業員は、介護短時間勤務制度や介護フレックス制度も利用でき、介護のためのリモートワークも認められています。

－ 治療と仕事の両立支援

従業員が、通院治療中においても仕事との両立ができるよう、産業医との面談で状況を確認し、短時間勤務等、就業上必要な配慮を行っています。また、私傷病で長期休職を取得したことで、有給休暇が付与されない従業員に対して、私傷病復職休暇（特別有給休暇）を付与し、安心して継続的に勤務できるようにしています。

その他、三大疾病（がん・急性心筋梗塞・脳卒中）に罹患した時に補償を行う保険や、私傷病休職中の所得補償を行う保険（GLTD長期障害所得補償保険）に加入し、病気や怪我による生活へのリスクに備えるようサポートも行っています。

－ 復職時の支援

私傷病などでの休職後、復職する際には、産業医・保健師との面談を行い、必要に応じて短時間勤務等、就業上必要な配慮を行い、スムーズな復職を支援しています。また、育児休業中の従業員のスムーズな復職を支援するため、企業主導型保育事業による保育施設と契約を締結しています。保育事業者が設置した施設を複数の企業が利用する契約となっており、従業員からの要望を受け、IIJと保育事業者との間で協議して適切と判断した場合に利用することができます。2024年4月現在、16事業者（6都県、33施設）と契約を締結しています。

従業員の資産形成の支援

IIJグループ持株会、財形貯蓄、定期的なマネーセミナー開催等を通じて従業員の資産形成を支援する仕組みを用意しており、人事による相談窓口を設置しています。

TCFD提言に基づく情報開示

TCFD（※）推奨開示項目「ガバナンス」、「戦略」、「リスク管理」、「指標と目標」に関するIIJグループの取り組み状況は以下の通りです。

（※）Task Force on Climate-related Financial Disclosures

ガバナンス・リスク管理

IIJは、経営理念を実践し、また企業価値を継続的に向上させるために、コーポレート・ガバナンスの充実と実践が重要であると考えております。当社はこれらの充足に向けて、**コーポレート・ガバナンス体制**を構築し、運営しております。そのコーポレート・ガバナンス体制の下、昨今の気候変動等のサステナビリティ関連リスク・機会への対応の重要性の高まりに対処するため、社長を委員長とするサステナビリティ委員会を設置し、全社横断的な取り組みを推進しております。気候変動関連については、「**環境への取り組み方針**」に基づき関連する取り組みを継続しており、経営企画・技術・財務・広報・人事部門等の社内横断的のメンバーにて、多様な観点から気候変動関連のリスク・機会を識別・評価・管理しております。このようなサステナビリティ委員会の取り組みの状況について、定期的に取り締役会へ付議・報告されており、また、サステナビリティ委員会にて認識されたリスクのうち、事業に重要な影響が生じうるリスクはその他事業上のリスクとともに統合的に管理され、取締役会にて継続的に識別・評価・管理を実践しております。

サステナビリティ委員会の活動状況

2026年6月末現在

委員会の開催回数	4回（2025年7月～2026年6月）
取締役会への報告	1回

上記の取り組みに加えて、データセンター部門の事業活動を適用範囲とした環境マネジメントシステムを構築・運営しており、企業などの活動が環境に及ぼす影響を最小限にとどめることを目的に定められた、国際的な環境マネジメントシステム認証（15014001:2015）を取得しております。

戦略

TCFD提言では、パリ協定の目標に基づき作成された2℃以下シナリオを含める分析を推奨しており、IIJはこの推奨に沿い、「シナリオ分析」にて2℃以下シナリオを選択しております。「シナリオ分析」は、IT技術の進歩の速さ等を鑑み、2030年時点と設定し、実施しております。シナリオ分析初年度（2021年度）はIIJのみを対象として分析を実施し、2022年度以降、事業規模や気候変動による事業影響度等の観点から、主要な子会社であるIIJグローバルソリューションズ（IIJGS）及びIIJエンジニアリング（IIJEG）を分析対象に含めております。

IIJ、IIJGS、及び、IIJEGが識別した事業に重要な影響が生じうる気候変動に関連するリスク・機会、それらへの対策、事業・戦略等に及ぼす影響については下記表の通りです。IIJは、台風・洪水等の増加、長期高温化、海面上昇等の物理リスクについては、ハザードマップを考慮したデータセンター用地の選定、ネットワーク回線・機器の冗長構成等により、事業・戦略等への影響は低いと認識しております。一方、ネットワーク関連サービスの提供にあたり、電力の利用は不可欠であり、多くの電力が消費されるデータセンターにおいて再生可能エネルギーの利用・エネルギー効率の向上等の対策を推進することが、脱炭素社会に向けた法規制強化、低炭素排出サービス需要の高まり、社会からの環境対応要請の高まり等の移行リスク・機会に対応する重要な取り組みと考えております。IIJGSは、主にWAN等のネットワークサービスを提供しており、気候変動に関連するリスク・機会等はIIJのネットワークサービスに関する事項と共通しております。IIJEGは、主にIIJ向けにデータセンターサービス等を提供しており、気候変動に関連するリスク・機会等はIIJのデータセンターサービスに関する事項と共通しております。

	事象	リスク・機会	対策	時間軸 (※)	2℃以下シナリオの 事業影響
物理 リスク・ 機会	台風・洪水等の異常気象の増加や 長期高温等の気候の変化	主な対象会社：IIJ、IIJEG		長期	小
		ーリスク - 自然災害によるデータセンター設備損壊、インターネット回線断絶等が発生し、サービス提供できないリスク - 自然災害によりエンジニアがデータセンター等での現地作業できないリスク ー機会 自然災害・気候変化への耐性が高いサービス需要の高まり	ー対策 - ハザードマップを利用したデータセンター用地の選定、回線・機器の冗長化 - 事業継続計画の策定やデータセンター相互間にてリモート監視可能な体制の構築		
移行 リスク・ 機会	脱炭素・省エネ化に関する法規制の強化	主な対象会社：IIJ、IIJEG		中・長期	大
		ーリスク - 再生可能エネルギー価格上昇により、サービス運営費用が増加するリスク - 炭素税等の導入により電力価格が上昇し、サービス運営費用が増加するリスク	ー対策 自社データセンターにおける温室効果ガス削減の取り組み方針を策定し、再生可能エネルギー利用・エネルギー効率向上目標達成に向けた取り組みを推進（進捗状況は「指標と目標」を参照のこと）		
	低炭素排出サービス需要の高まり	ーリスク 再生可能エネルギー調達ができない又は省エネが実現できないことにより、需要に対応したサービスが提供できないリスク ー機会 再生可能エネルギー採用かつ省エネ化されたデータセンターサービスやそれを利用した低炭素排出サービス需要の高まり	- 自社データセンターに太陽光発電パネルの設置や非化石証書の直接調達等による再生可能エネルギー調達手段の多様化、大容量蓄電池導入等によるエネルギー効率の向上 - 非化石証書を活用したサービス提供、AI処理基盤の消費電力低減に関する技術開発（経済産業省・NEDOの公募プロジェクト）、コンテナ型DCの提供、アイスランドでの再生可能エネルギー100%を活用したマイクロデータセンターの実証実験、AI処理基盤対応のモジュール型エッジデータセンター開発・提供等	中・長期	中
		主な対象会社：IIJ、IIJGS、IIJEG		短～長期	中
		ー機会 - クラウドサービス等のITリソース共有型サービス需要の高まり - IT活用（IoT等）による事業活動を効率化するサービス需要の高まり	ー対策 クラウド・IoTサービス開発・提供等の現戦略継続遂行		
	社会からの環境対応要請の高まり	主な対象会社：IIJ		短期	小
		ーリスク - 企業としての取り組み、その情報開示が不十分であり、顧客・資本市場からの評価が低下するリスク - 同様に、人材市場からの評価が低下し、事業運営に必要な人材が確保できないリスク	ー対策 環境関連取り組みの継続推進（環境省が進める脱炭素先行地域計画に共同提案者として参画等）、情報開示の充実、株主・投資家、ESG評価機関、顧客、学生等とのコミュニケーション		

(※) 時間軸：[短期] 2年以内、[中期] 3-5年、[長期] 6-10年

指標と目標

自社データセンターにおける温室効果ガス削減の取り組み方針

IIJグループはネットワーク関連サービスの提供による社会活動の効率化やクラウドサービスの提供によるコンピュータ資源の共有等により、社会全体での温室効果ガスの削減に貢献しておりますが、これらサービスの提供には電力の利用が不可欠です。IIJは、全電力使用量の約9割を消費するデータセンターにおいて、「再生可能エネルギー（※1）の利用」と「エネルギー効率の向上」により、温室効果ガスの削減に取り組むことが重要と認識しております。各々についての取り組み目標、及び、2025年度の実績は以下の通りです。

取り組み施策	目標	FY2025実績
再生可能エネルギーの利用	2030年度におけるデータセンター（Scope1・2（※2））の再生可能エネルギー利用率を85%まで引き上げることが目標とします。	65% （松江データセンターは再生可能エネルギー利用率100%を達成）
エネルギー効率の向上	2030年度まで技術革新の継続により、データセンターのPUE（※3）を業界最高水準の数値（※4）以下にすることを目標とします。	・松江データセンター：1.38 ・白井データセンター：1.31 （業界最高水準PUE値1.4以下を継続）

（※1）再生可能エネルギー：非化石証書活用による実質再生可能エネルギーを含む

（※2）Scope1・2（自社での温室効果ガス排出）：自社での燃料の使用や工業プロセスによる直接排出及び自社が購入した電気・熱の使用に伴う間接排出（GHGプロトコル定義）

（※3）PUE（Power Usage Effectiveness）：データセンター施設全体のエネルギー使用量÷IT機器のエネルギー使用量

（※4）業界最高水準のPUE値：PUE1.4以下（2026年3月末時点において、資源エネルギー庁はデータセンター業におけるベンチマーク指標及び目指すべき水準をPUE1.4以下と設定し、達成事業者は省エネ優良事業者とみなされる）

取り組み実績

- 自社データセンターにおける取り組み実績

IIJは事業規模の拡大、他社から賃借しているデータセンターの統廃合に伴う自社データセンターの利用増加等により、2025年度の自社データセンターでの電力使用量は前年対比20%増加しておりますが、松江データセンターの再生可能エネルギー利用率100%継続や非化石証書購入等により、Scope1・2の温室効果ガス排出量（自社の排出）は前年同水準に抑制しました。

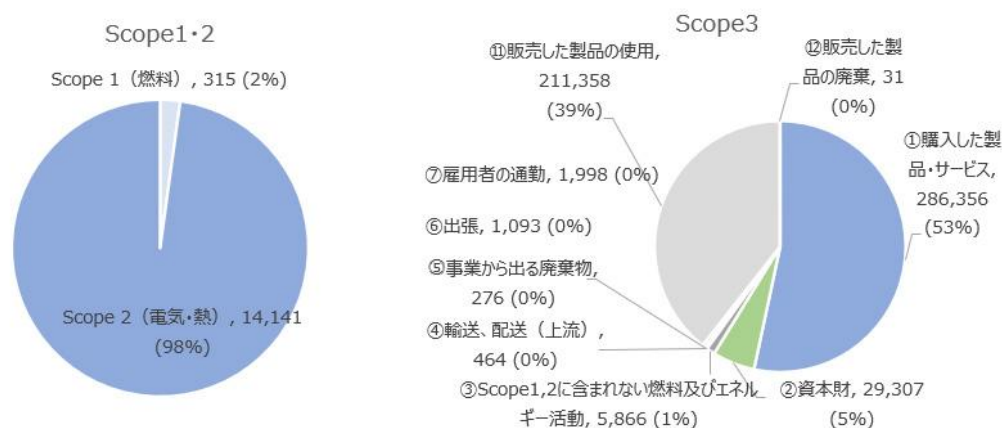
IIJ（単体）自社データセンター電力使用量とScope1・2 GHG排出量



■ 温室効果ガス排出量実績

IIJグループは、2021年度から温室効果ガス排出量の算定を開始し、2023年度から算定範囲をIIJ単体から主要な子会社IIJGS及びIIJEGへと拡大、2025年度から全連結子会社を対象といたしました。自社の排出を算定するScope1・2においては、自社データセンターの電力消費が認識されるScope2排出量が98%を占めています。サプライチェーン上流・下流の間接排出を算定するScope3においては、システムインテグレーション提供時の機器等の仕入とその販売により認識されるカテゴリ1「購入した製品・サービス」・カテゴリ11「販売した製品の使用」とサービス設備等に利用される機器等の購入により認識されるカテゴリ2「資本財」の割合が大きく、これらが間接排出の98%を占めています。同業他社の排出量との比較において、事業規模と概ね関連し、その構成割合も各社類似しています。

2025年度実績（単位：t-CO2）（※1,2） 算定範囲：IIJ及び全連結子会社



FY2025温室効果ガス排出量 内訳

	IIJ	IIJGS/EG/PTC	その他	合計
Scope1	255	8	52	315
Scope2	12,567	968	606	14,141
Scope3	335,988	111,911	88,851	536,750

IIJ単体実績推移（単位：t-CO2）

	FY2023	FY2024	FY2025
スコープ1排出量（t-CO2）	340	252	255
スコープ2排出量（t-CO2）	9,759	12,535	12,567
スコープ3排出量（t-CO2）	323,724	374,823	371,682 (※3)

（※1）算定方法：「サプライチェーンを通じた温室効果ガス排出量算定に関する基本ガイドライン」（環境省、経済産業省）

（※2）GHG排出量はマーケット基準の数値

（※3）Scope3排出量の主要な構成要素であるカテゴリ1（購入した製品・サービス）は、前年対比で活動量は増加したものの、排出原単位「3EID-産業連関表による環境負荷原単位データベース」の更新に伴う排出係数の低下により排出量が減少しており、Scope3全体の排出量減少の要因となっております。

人権の尊重

IIJグループは、課重要な社会インフラを支え、デジタル社会の発展に貢献する企業として、すべての事業活動において人権を尊重し、持続可能な社会の実現を目指します。

国際規範および適用法令に基づいて人権と労働者の権利を尊重し、あらゆる個人の尊厳を損なう行為を防ぐために適切に対処します。人権尊重の推進にあたっては、IIJグループのサステナビリティ委員会が人権に関する方針策定、及び実施状況についての管理を行い、取締役会が活動を監督します。また、国連「ビジネスと人権に関する指導原則」に基づき、人権デュー・ディリジェンスに継続的に取り組んでいきます。加えて、社内外の人権に関する知見の活用、ステークホルダーとの対話・協議を行うとともに、全ての役員・従業員に適切な啓発活動を行い、ビジネスパートナーにもIIJグループの人権方針の周知を行います。

➤ [IIJグループ人権方針](#)

ハラスメント防止に関する取り組み

2017年度よりハラスメント防止体制を定め、管理職及び一般従業員に向けて各階層別のハラスメント防止研修を定期的を実施しています。また人事部ではハラスメントに関する相談窓口を設置しており、再発防止策を含めた定期的な見直しや改善を継続的に取り組んでいます。従業員の心理的安全性を高めるため、今後もハラスメント防止への取り組みを継続的に実施していきます。

カスタマーハラスメントに対する取り組み

IIJでは、お客様に高品質なサービスを継続的に提供していくため、過剰な要求や暴言から従業員を守り、従業員が心身ともに健康で安心して働くことができる安全な職場環境の整備が不可欠であると考え、「カスタマーハラスメントに対するIIJの基本方針」を策定しました。

➤ [カスタマーハラスメントに対するIIJの基本方針](#)

DE&I（ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン）の推進

IIJグループは、経営理念の一つとして、「多様な才能・価値観を有する人材、技術革新や社会貢献に積極果敢に挑戦する人材が集まり、誇りとやりがいをもって自律的に能力を発揮出来る場を提供していく」と掲げています。性別・国籍・障がいの有無等の属性や新卒・中途採用の別に依ることなく、多様な人材を受け入れ、様々な視点や価値観を尊重しながら、能力重視の人材活用・登用を実践してきており、今後も継続していきます。また、上記の経営理念を追求し続けることで、新たな技術や価値を生み出していきたいと考えております。

➤ [DE&Iの推進](#)

サプライチェーン調達方針

IIJグループは、すべてのサプライヤーの皆様と相互理解を深め、信頼関係を築き、安全・安心なサプライチェーンの構築・維持に努力し続けることで、持続可能な社会の実現を目指します。

国内外の法令を遵守し、サプライヤーの皆様へ公正な自由競争による取引の機会を提供するとともに、サプライチェーンを含むあらゆるステークホルダーの人権を尊重します。

また、環境関連法規を遵守し、地球環境に配慮した調達活動を通じて、社会全体の環境負荷低減に取り組むことに加え、品質・安全性へ配慮し、取引を通じて知り得た機密の保持など情報セキュリティを厳格に管理します。

- IJグループ サプライチェーン調達方針

その他 方針

- マルチステークホルダー方針

IJグループの社会貢献

- IJグループの社会貢献活動

コーポレート・ガバナンスの全体像

コーポレート・ガバナンスの全体像

IIJグループの経営理念（パーパス）は以下の通りです。

- 技術革新によりネットワークインフラストラクチャーを発展させる

インターネット技術のイニシアティブを取り続け、より高速化するネットワークとコンピューティングによって新たに創出する価値を通じて、デジタル社会の未来を切り拓いていく。

- ネットワーク社会を支える仕組み（ITサービス）を提供する

世の中の変化を捉え、その変化を先取りした高品質・高付加価値なITサービスを提供し続けることで、社会・個人によるネットワーク利用を支えていく。

- 自己実現する職場の提供（多様な才能・価値観を有する人材が活躍できる場）

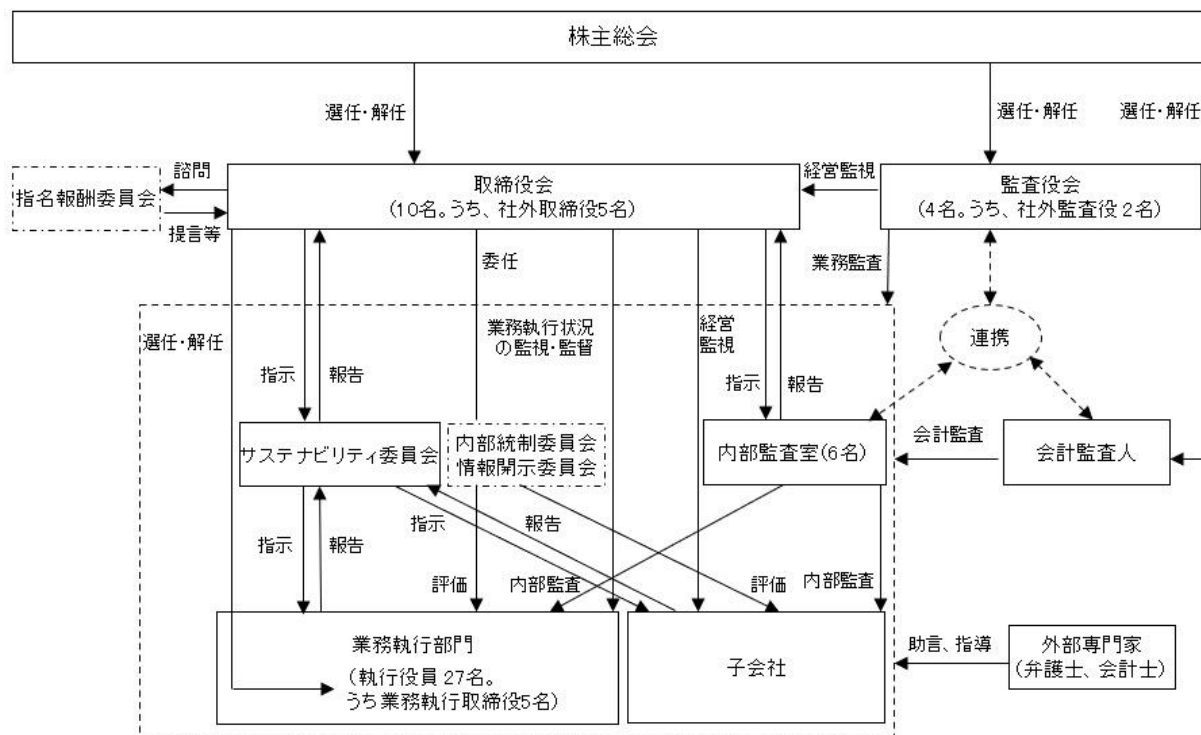
技術革新や社会貢献に積極果敢に挑戦する人材が集まり、誇りとやりがいをもって自律的に能力を発揮できる場を提供していく。社員個々人が現状に満足せず常に先の世界を考えることで社会発展に貢献し、世間からも評価されることで成長を実感できるような会社であることを目指す。

IIJグループは、経営理念を継続して実現し、また社会インフラとして必須となった日本のインターネットを支え運営するとの使命を全うし、かつ企業価値を継続的に高めていくために、コーポレート・ガバナンスの充実と実践が非常に重要と認識しています。

IIJグループのコーポレート・ガバナンス体制の概要は以下の通りです。

（2026年6月末現在）

コーポレート・ガバナンス体制の概要図



➤ [コーポレート・ガバナンス報告書（2026年6月30日更新）](#) [369KB]

➤ [定款](#) [168KB]

株主総会

IIJは、日本の会社法に基づく株式会社であり、株主総会が最上位の意思決定機関です。
会社法・定款に基づく、株主総会の主要な決定事項は以下の通りです。

項目	決議要件
取締役の選任・解任／監査役の選任	普通決議 (※1)
取締役報酬総枠の決定	普通決議 (※2)
剰余金の配当	普通決議 (※2)
定款の変更	特別決議 (※3)
監査役の解任	特別決議 (※3)
会社の合併・分割	特別決議 (※3)

- (※1) IIJ定款の定めにより、議決権の3分の1以上の出席株主（委任状を含む）での株主総会で、出席株主の議決権の過半数で決議
(※2) 議決権の過半数の出席株主（委任状を含む）での株主総会で、出席株主の議決権の過半数で決議
(※3) IIJ定款の定めにより、議決権の3分の1以上の出席株主（委任状を含む）での株主総会で、出席株主の議決権の2/3以上で決議

関連法令

IIJは、電気通信事業者として、総務省が所管する電気通信事業法を遵守して事業を遂行しています。IIJは、同法に基づき、通信の秘密の確保、役務提供条件の適切な説明、電気通信役務の確実かつ安定的な提供を確保するための事業用電気通信設備の管理などを行う必要があります。この他、IIJグループは、下記を含む国内外の関連法令に扱い、事業を行っています。

- 個人情報保護法、EUのGDPR等適切な情報管理に関する法令
- 不正競争防止法、下請代金支払遅延等防止法等取引の公正確保に関する法令
- 消費者契約法、不当景品類及び不当表示防止法、特定商取引法等の消費者保護に関する法令
- 著作権法等知的財産保護に関する法令
- エネルギーの使用の合理化等に関する法律、廃棄物処理法等環境に関する法令
- 労働基準法、労働安全衛生法等労働環境に関する法令

内部統制の枠組みについて

IIJは、1999年に米国ナスダック市場に上場し、米国Sarbanes-Oxley Act (SOX法) の施行時よりCOSO (※4) フレームワークに基づいた内部統制の構築・実践を進めてまいりました。米国上場は2019年に廃止し、現在は日本の金融商品取引法における内部統制の基本的枠組み (J-SOX) に基づき運用しています。IIJは、内部統制の構築・運用を通じて、業務の有効性及び効率性、財務報告の信頼性、事業活動に関わる法令等の遵守及び資産の保全が合理的に保証されることを目標としています。内部統制の基本的な考え方は「内部統制基本規程」をもって策定しています。

(※4) トレッドウェイ委員会支援組織委員会 (Committee of Sponsoring Organizations of Treadway Commission)

内部統制の構成要素には、統制環境、リスクの評価と対応、統制活動、情報と伝達、モニタリング（監視活動）、IT（情報技術）が含まれます。統制環境は、組織の気風を決定し組織内のすべての役職員の統制に対する意識に影響を与えるとともに、他の要素の基礎をなすものであり、IIJグループの統制の根幹として、重要であると認識しています。統制環境の基礎を為すものとして、IIJグループ全体に適用される「倫理規程」を定め、役職員に遵守せしめています。経営理念・倫理規程の実践は経営トップから役職員へ都度コミュニケーションされ、倫理規程の詳細内容とその遵守は、全グループ役職員へ年に一度周知・徹底されています。倫理規程の主要な内容は以下の通りです。

- 法律の遵守、公正な取引、利益相反の排除、政府機関等との取引への留意
- 情報の守秘、会社資産の保全
- 財務数値の報告および正確な記録
- ステークホルダーへの配慮
- 反社会勢力への排除的な対応

IIJでは、内部統制基本規程及び倫理規程を軸に、取締役会、監査役会、組織、業務分掌、職務権限、経理、情報開示、子会社等管理、内部者取引防止、内部監査、内部通報、贈賄防止（※5）、事務文書他に係る規程が制定され、役職員に遵守せしめています。これらの規程は、万が一これらに重大な違反があった場合には懲戒処分の対象となり、エンフォースメントメカニズムを備えています。

（※5）贈賄防止を徹底する観点から、贈賄防止規程を設けて、IIJグループ役職員に遵守せしめています。IIJグループは、取引パートナーに対して、贈賄行為の禁止を含む法令遵守を取引条件としています。

➤ [贈賄防止規程 \[68KB\]](#) 

贈賄防止のための取り組み

IIJグループは、国内外の事業活動において、直接的であるか間接的であるかを問わず、贈賄（不正な利益を得る目的での公務員等への金銭、その他付加価値の提供その他各国法令において贈賄として禁止されている行為をいう）を行ってはならないとする行動規範を定めており、当該規範に違反した役職員は就業規則に基づく懲戒の対象となります。

贈賄を防止するための内部統制は、IIJグループ全体を対象として構築されており、所属する役職員に対する周知・教育を実施し、本社に相談窓口を設けております。また、贈賄に関する行動規範に反する行為は、IIJグループ全体を対象とする内部通報制度の対象であります。

なお、2025年度において、贈賄に関する行動規範の違反による懲戒はございませんでした。

内部通報制度の運営

IIJグループは、企業活動における法令順守の確保並びに企業倫理の充実及び維持のため、法令の要件に基づいた窓口を設置し、内部通報制度を運営しています。内部通報制度は内部通報者の匿名性の確保や不利益な扱いの禁止等により、制度の実効性を確保しています。

財務報告に係る内部統制に関連し、各業務のプロセスは「内部統制記述書」により可視化されています。内部統制記述書の充足は各部門で点検・内部監査部門で評価され、有限責任あずさ監査法人による内部統制監査を受けています。監査法人は内部統制報告書が妥当であると監査しています。

2026年3月期内部統制監査結果の概要

財務報告に係る内部統制報告制度における開示すべき重要な不備はなし

取締役会

IIJの取締役は10名であり、うち5名が独立社外取締役です。独立社外取締役のプロファイルは以下の通りです。

(2026年6月末現在)

氏名	就任年	プロフィール
塚本 隆史	2017年	元みずほ銀行頭取等の略歴で、主に企業経営・金融の知見の観点で、経営執行を監視
佃 和夫	2020年	元三菱重工業代表取締役社長等の略歴で、主に企業経営の観点で、経営執行を監視
岩間 陽一郎	2021年	元東京海上アセットマネジメント代表取締役社長・日本証券業協会会長等の略歴で、主に企業経営・ガバナンスの観点で、経営執行を監視
岡本 厚	2022年	元岩波書店代表取締役社長等の略歴で、主に企業経営の観点で、経営執行を監視
鵜巢 香穂利	2022年	元監査法人トーマツボードメンバー等の略歴で、主にシステムガバナンスの観点で、経営執行を監視

(注) 塚本隆史氏は、IIJの取引銀行である株式会社みずほ銀行及びその親会社である株式会社みずほフィナンシャルグループの業務執行者でありましたが、2014年にその業務執行者との職責を離れ10年以上経過しており、現在は、みずほフィナンシャルグループの特別顧問との立場であり業務執行に関与されていないため、東京証券取引所の規則に則り、独立社外取締役としています。

➤ 取締役会の運営状況は[こちら](#)を参照ください。

監査役会

IIJは会社法に定める監査役会制度を導入、運営しています。監査役会は、米国証券法上のAudit Committeeと類似した役割と権限を有しています。監査役会を構成する監査役は、株主からの委任により、会社執行から独立した権限・立場で、取締役の職務執行の監査を行っています。監査役会は、以下のとおりの監査方針・目標を定めています。

主な方針・目標

- 会社法、金融商品取引法（J-SOX含む。）等を踏まえ、グループ内部統制システムの整備・運用状況を監査・検証
- 会計監査人との連携により、子会社・関連会社を含むグループ全体の財務報告の健全性保持
- 重要会議への出席、役職員へのヒアリング等を通してガバナンス課題の把握、取締役会・役員への助言・勧言

IIJの監査役は4名であり、うち2名が独立社外監査役です。独立社外監査役のプロファイルは以下の通りです。

(2026年6月末現在)

氏名	就任年	プロフィール
麻生 久美子	2024年	公認会計士としての豊富な財務・会計知識と経験に基づく専門的な見地からの監査に能力を発揮
原田 史緒	2026年	弁護士としての豊富な企業法務知識と経験に基づく専門的な見地からの監査に能力を発揮

➤ 監査役会の運営状況は[こちら](#)を参照ください。

リスク管理に係る体制

各常勤取締役が、各々の担当業務についてリスクの識別、評価、対策について責任を持つ他、リスクの種類に応じてリスク評価・対策を検討するための委員会組織（内部統制委員会、情報開示委員会、情報セキュリティ委員会等）を設置し運営しています。また、緊急時等を想定した事業継続計画を策定、運用しています。

サステナビリティ推進に係る体制

サステナビリティ推進における活動方針の策定、各テーマについての全社横断的な施策の検討及び推進、進捗・実施状況の確認及び検証、それら内容についての取締役会への付議及び報告を行う役割として社長を委員長とする横断組織として、サステナビリティ委員会を設置し運営しております。

IIJのサステナビリティに関する取り組みについては、「[IIJのサステナビリティ経営・目標](#)」にて開示しております。また、気候変動に係るTCFD等の枠組みに基づく開示及び人的資本に関する開示については、それぞれ「[TCFD提言に基づく情報開示](#)」及び「[人的資本](#)」にて開示しております。

グループ経営について

IIJは、連結子会社と協働し（一部の持分法適用関連会社を含む）、IIJグループとして密接に連携しながら事業を遂行しています。主要な連結子会社との事業連携の状況は以下の通りです。

IIJグローバルソリューションズ	IIJグループ提供サービスのうち、主にWANサービスを提供
IIJエンジニアリング	IIJ・顧客向けにオペレーションセンター、カスタマーサポート等の役務を提供
IIJプロテック	IIJ・顧客向けにIT人材を派遣
海外子会社	現地でIIJ日系顧客へネットワークサービス・SIを提供、一部海外子会社でグローバルインターネットバックボーンを運用

IIJは、グループ経営にあたり、「子会社等管理規程」を定め、以下の通り、グループ・ガバナンスを実践しています。

- 子会社全てに倫理規程、その他グループ全般に係る規程を適用
- IIJ事業責任者・管理責任者を子会社の非常勤取締役・監査役に配置し、事業連携を促進・事業管理強化を遂行
- IIJ監査役を重要な子会社の非常勤監査役に配置し、連結監査を有効に遂行
- CFO・IIJ財務会計部門による子会社の月次業績管理
- IIJコンプライアンス・広報部門他によるオンゴーイングの子会社管理業務の統制
- 従業員の出向派遣・受け入れ、グループCMS（キャッシュマネジメントシステム）の運営
- 関連当事者取引はアームス・レングス・ルールを基礎とし、取締役会にて取引実績を監視

取締役会の運営状況

取締役の選任・解任

取締役の選任・解任は、株主総会で決定されます。IIJは、代表取締役による候補者案を指名報酬委員会で諮問のうえ、取締役会で株主総会上程案を決議したうえ、株主総会に上程しています。常勤取締役候補は、各担当分野の高い能力・知見・業務経験、経営判断・統括能力、先見性・企画力、ガバナンスへの精通、優れた人格・強い倫理感・心身の健康等の「役員候補者選定基準」を満たす者から、年齢・性別を問わず、能力優先で公平に選定しています。

取締役スキル・マトリックス

IIJの現任取締役に関するスキル・マトリックスについては、以下の通りです。

- 取締役選任の方針

IIJは、経営理念の実現に向け、取締役に求める要件を明確化した「取締役スキル・マトリックス」に照らし、IIJが必要とする豊富な経験、高い専門性を有する相応しい人物により取締役会を構成することとしております。常勤取締役については、創業期からの事業立ち上げメンバーを始め、IT業界に精通した者を中心に選任しており、社外取締役については、大企業の経営トップとして豊富な経験や知見を有する者を中心に選任しております。各取締役は取締役会全体としての経験・専門性等のバランスを考慮した上で、指名報酬委員会に諮問され、妥当性を評価・検証されたうえで、株主総会・取締役会等の手続きにて、決定されます。

- 必要スキル項目の定義

スキル	要件
経営トップ	経営トップとしての企業経営経験
IT知見	IT業界における事業経験
営業	営業部門におけるマネジメント経験
テクノロジー・R&D	技術部門におけるマネジメント経験、新技術・サービス等の開発実績
グローバル	海外事業におけるマネジメント経験、海外勤務経験
財務・会計	財務・会計部門における専門性・経験
ガバナンス	コーポレート部門長経験、独立役員等の経験

■ 取締役スキル・マトリックス

(2026年6月末現在)

氏名	役職	独立 役員	経営 トップ	IT知見	営業	テクノ ロジー ・ R&D	グロー バル	財務・ 会計	ガバナ ンス
鈴木 幸一	代表取締役 会長執行役員		○	○		○	○		○
谷脇 康彦	代表取締役 社長執行役員		○	○		○	○		○
北村 公一	取締役 副社長執行役員			○	○		○		
渡井 昭久	取締役 副社長執行役員			○			○	○	○
島上 純一	取締役 副社長執行役員			○		○			
塚本 隆史	取締役	●	○				○	○	○
佃 和夫	取締役	●	○			○	○		○
岩間 陽一郎	取締役	●	○				○	○	○
岡本 厚	取締役	●	○				○		○
鶴巢 香穂利	取締役	●		○		○			○

取締役の任期

IIJの取締役任期は1年です。IIJは、1992年創業で、創業期からの事業立ち上げメンバーである常勤取締役複数人の就任期間が長い傾向があります。事業成長の途上である現時点においては、創業者である鈴木幸一氏を含む創業期からのメンバーの能力・経験他に基づいた取締役としての役割発揮に、事業強化として迎えた新任取締役を加えた取締役会体制と監査役会による監視体制での事業遂行が、企業成長に最適であると考えています。

常勤取締役の役割

(2026年6月末現在)

氏名	役職	就任年	役割・主要な兼務状況
鈴木 幸一	代表取締役 会長執行役員	1992年	Co-CEO
谷脇 康彦	代表取締役 社長執行役員	2022年	Co-CEO & COO、経営直轄機関直接所管
北村 公一	取締役 副社長執行役員	2021年	営業系部門・インテグレーション系部門・グローバル系部門所管、マーケティング統括本部共同所管、エンタープライズ営業本部長
渡井 昭久	取締役 副社長執行役員	2004年	CFO、管理系部門所管、経営戦略本部長、財務本部長
島上 純一	取締役 副社長執行役員	2007年	CTO、技術系部門所管、マーケティング統括本部共同所管

取締役会の運営状況

取締役会は原則月1回開催しており、個別決議の他に、事業業績報告（月次）・グループ会社業績を含む連結決算報告（四半期毎）、年度アクションプランの進捗（半期毎）、中期計画の進捗（半期毎）、監査役会からの監査報告（年次）、内部統制監査の結果を含む内部統制の状況（年次）、コーポレート・ガバナンスコードへの対応状況（年次）、事業リスクの状況（年次）、取締役会自己評価の状況（年次）、政策投資を含む保有有価証券の状況（年次）、関連当事者取引の詳細（年次）、企業年金等の状況（年次）他の報告がなされています。常勤取締役・社外独立取締役との間で関連な議論・意見交換がなされています。

年度	取締役開催回数/出席実績	独立社外取締役発言総数
2025年度	全12回 ・全取締役出席：10回 ・欠席：村林取締役2回	72回
2024年度	全12回 ・全取締役出席：8回 ・欠席：村林取締役1回、佃取締役2回、岩間取締役1回	76回
2023年度	全12回 ・全取締役出席：9回 ・欠席：佃取締役2回、岩間取締役1回	64回

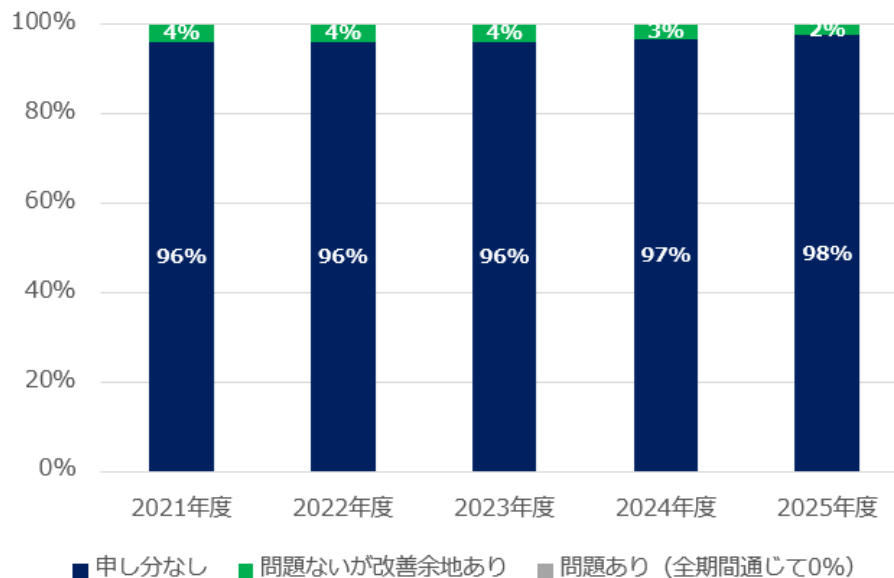
独立社外取締役と事業執行部門のコミュニケーションとして、取締役会の他に、現業部門長から独立社外取締役への事業状況報告を適時に行っています。

年度	事業状況報告実施回数	主要内容
2025年度	9回	サステナビリティ、クラウド、ネットワーク、IoT、MVNO、企業戦略、データセンター、セキュリティ、人事状況
2024年度	9回	SI事業（サービスインテグレーション含む）、クラウド、ネットワーク、IoT、国際事業、MVNO、セキュリティ、データセンター、人事状況
2023年度	9回	営業戦略、クラウド、ネットワーク、IoT、次期中期計画の策定状況、MVNO、セキュリティ、データセンター、人事状況

取締役会の自己評価

取締役及び監査役各員へのアンケート形式による取締役会の自己評価を継続して実施しています。アンケートは、取締役会での議論は必要十分か、各取締役の知識・経験を踏まえた多角的な検討がされているか、取締役会は企業戦略等の大きな方向性を示しているか、事業戦略の執行状況を効果的にモニタリングできているか、取締役会判断にあたりリスクテイクを支える環境整備は十分か等の内容を含む約30項目の設問を設定し、問題あり・問題ないが改善余地ある・申し分なしの3択にて実施しています。その結果について、年次推移も含めて評価し、各改善項目への対応も含めて、取締役会に報告しています。取締役会自己評価の結果は以下の通りです。

取締役会実効性評価



取締役会実効評価における主な改善事項	
2025年度	監査役と社外取締役との意見交換会を定例化
2024年度	サステナビリティ関連報告の拡充を実施
2023年度	大型案件などの管理方法の高度化
2022年度以前	- 社外役員を含めた情報共有ツール「III取締役会ダッシュボード」を開設し、タイムリーな情報展開及びリスクテイクできる環境整備を実施 - 投資家との対話状況に関する情報共有を拡充 - サステナビリティ関連報告の拡充を実施 - 事前資料発送日の更なる早期化 - 中期計画の進捗報告頻度を増加（年次から半期毎へ変更） - 新中期計画に係る議案上程前に取締役向け説明会を実施（計2回） - 取締役会決議事項に関するガイドライン改善（経営資源に影響を与える事象に係る数値基準の明確化） - 事前資料発送日の早期化 - 取締役会決議事項に関するガイドライン改善（事業計画・予算に影響を与える事象に係る数値基準の明確化）
継続	業績報告資料及び営業・技術状況報告資料の継続改善（取締役コメントの反映）

監査役会の運営状況

監査役の選任・解任

監査役の選任・解任は、株主総会で決定されます。監査役の選任は、監査役会の同意のうえ、株主総会に付議されます。監査役候補は、監査の実効性を確保するため、コーポレート・ガバナンス関連制度に精通しており、法令及び財務・会計に高い知見を有する者を、年齢・性別等を問わず、能力優先で公平に選定しています。なお、財務専門家、法律専門家を委嘱するよう努めています。また、監査役の任期は4年であり、解任は株主総会の特別決議により決議されます。

監査役会の運営実績、取締役会への出席状況

監査役会は原則月1回開催しており、各監査役による職務執行状況の報告、必要に応じて監査法人、役職員へ報告を求めることができます。監査役は、取締役会へ出席し、関連な議論・意見交換を通じて、取締役会の意思決定及び業務監督状況を検証しています。

年度	監査役会 開催回数/出席実績	監査役会 上程議案数	取締役会 開催回数/出席実績
2025年度	全14回 ・全監査役出席：13回 ・欠席：田中監査役1回、道下監査役1回	全58議案 ・決議事項：15議案 ・報告事項：43議案	全12回 ・全監査役出席：11回 ・欠席：田中監査役1回、道下監査役1回

監査役会の実績

監査役会は、代表取締役と定期的に会合を持ち、会社が対処すべき課題、監査上の重要課題等について意見交換しています。監査役は取締役・執行役員・部課長他へのヒアリング、子会社・関連会社へのヒアリング、内部監査室との意見交換、監査法人とのコミュニケーションや内部通報制度の運営の監視等を積極的に実施することにより、監査役監査の実効性を向上させています。

監査役会は、効率的な監査を行うため、内部監査室と定期的に意見交換を行い、内部監査の計画および結果について適時に報告を受け、密接に連携しながら、監査業務を行っています。

監査役会は、会計監査人の監査計画・重点監査項目・監査状況・監査上の主要な検討事項の検討状況・監査結果（期中レビューを含む）等の報告を受け、意見交換を行うほか、期末在庫棚卸監査への立ち会い等を行い、監査役の監査活動の効率化と質的向上を図っています。

監査役報酬の決定

IIJ監査役総報酬率は、現監査役4名に対して年額1億円以内としています。監査役報酬は、独立性確保の観点から、業績連動を行わず、固定報酬（金銭報酬）のみとしています。

年度	監査役数	監査役報酬総額
2025年度	4名	48百万円（うち社外監査役 12百万円）

指名報酬委員会の運営状況

指名報酬委員会の構成メンバー

IIJの指名報酬委員会は任意の委員会であり、代表取締役2名・独立社外取締役5名で構成されています。

代表取締役 会長執行役員	代表取締役 社長執行役員	独立社外取締役				
(委員長) 鈴木 幸一	谷脇 康彦	塚本 隆史	佃 和夫	岩間 陽一郎	岡本 厚	鶴巢 香穂利

指名報酬委員会の役割

取締役の指名・報酬関連事項は、指名報酬委員会に諮問され、妥当性を評価・検証されたうえで、株主総会・取締役会等の手続きにて、意思決定しています。また、指名報酬委員会の各委員は、取締役会の議論等を通じて、取締役の適任性を評価しています。

指名報酬委員会の開催実績

年度	実施回数	諮問内容
2025年度	2回	2026年度取締役選任及びスキル・マトリックスの状況 2026年度取締役各員の固定報酬 2025年度実績及び中期計画業績進捗に基づく取締役賞与
2024年度	3回	2025年度取締役選任及びスキル・マトリックスの状況 2025年度取締役各員の固定報酬 2025年度取締役業績賞与の方針・各員の業績賞与 - 新中期計画に連動した中期インセンティブの導入 - 社長執行役員等の選定
2023年度	1回	2024年度取締役選任及びスキル・マトリックスの状況 2024年度取締役各員の固定報酬 2024年度取締役業績賞与の方針・各員の業績賞与 2024年度以降の取締役報酬体系（中長期業績連動報酬の導入案を含む）

取締役報酬の設計

取締役報酬の基本的な考え方

IIJグループは、事業対象とする市場は継続的に拡大し、その事業環境のなか成長途上の企業グループであるとの自己認識のなかで、経営理念の持続的な充足のために、長期視点での事業展開が重要であると考えています。業務執行取締役の報酬についても、過度に短期志向の業績連動ではなく、固定・業績連動とのバランスが取れ、かつ長期的な企業価値向上を目指すうえで、一定の配分の株式関連報酬が効果的であると認識しています。また、監督機能を担う非常勤取締役及び社外取締役については、その職責に鑑み、基本となる固定報酬（金銭報酬）のみを支払うこととしております。

取締役報酬の基本的な考え方

2024年6月に、当社は、従前の取締役報酬制度（※）を刷新し、固定報酬（金銭報酬）、株式報酬型ストックオプションの代替としての在籍条件型報酬（Ⅰ.譲渡制限付株式報酬）、単年度業績連動報酬（Ⅱ.譲渡制限付株式報酬）及び中期業績連動報酬（Ⅲ.譲渡制限付株式報酬）からなる新たな取締役報酬制度を導入しております。当社は金銭報酬の報酬限度額を年額6億円以内（うち、社外取締役は年額500万円以内）、譲渡制限付株式報酬の報酬限度額を年額7億円以内、交付株式数の上限を年140,000株以内としています。

（※）従前の取締役報酬制度（非常勤取締役及び社外取締役を除く）

- ・ 固定報酬：金銭報酬
- ・ 非金銭報酬等：退職慰労金の代替としての株式報酬型ストックオプション
- ・ 単年度業績連動報酬等：譲渡制限付株式報酬

譲渡制限付株式報酬の内容

－（Ⅰ）在籍条件型譲渡制限付株式報酬制度

業績に連動しない報酬であり、一定期間当社の取締役等の地位にあることを条件として譲渡制限を解除する譲渡制限付株式を付与するもの。

－（Ⅱ）単年度業績連動型譲渡制限付株式報酬制度

一定期間（原則として1事業年度を対象期間とする）の業績目標及び業績成長の達成度に応じて当該期間の終了後に譲渡制限付株式を付与するもの。事業成長と企業価値向上に連関する指標として、連結売上高及び連結営業利益の前年度比率及び目標達成率を採用しており、各係数で掛け合わせて基準報酬に対する支給率を算定し、評価期間の開始時の株価等に基づき交付株式数を算定。

－（Ⅲ）中期業績連動型譲渡制限付株式報酬制度

中期計画と同一の期間を対象期間とし、対象期間中における各事業年度の業績目標及び業績成長の達成度に応じて支給率を算定し、中期計画の対象期間の初日の株価に基づいて決定される数の譲渡制限付株式を、評価対象事業年度終了後に付与するもの。評価対象事業年度毎に基準報酬に対する支給率を算定し、中期計画の期間の開始時の株価等に基づき交付株式数を算定。

中期計画の達成度を評価し支給率を算定するために以下の指標等を採用しております。

－＜最終事業年度を除く評価対象事業年度における指標等及び評価ウェイト＞

連結売上高（30%）、連結営業利益（30%）、エンゲージメント指数（15%）及び所管業績貢献（25%）

－＜最終事業年度における指標等及び評価ウェイト＞

連結売上高（30%）、連結営業利益（30%）、エンゲージメント指数（15%）及び所管業績貢献（25%）並びに支給率最大化のための必要条件として、ROE、時価総額及びESG経営指標

業績連動報酬の交付株式数の算定方法

単年度業績連動報酬及び中期業績連動報酬の交付株式数は各々以下の算式にて算定されます。

交付株式数 = 基準報酬 × 支給率 ÷ 基準株価

基準報酬は、月額固定報酬の4か月分を目処として、指名報酬委員会への諮問を経て定めます。支給率は前述の指標等に基づき、0%～100%（ただし中期業績連動報酬の最終事業年度にあっては0～125%）の支給率となります。基準株価は、対象期間の初日の前営業日の東京証券取引所における当社の普通株式の終値（同日に取引が成立していない場合は、それに先立つ直近取引日の終値）を使用します。ただし交付時株価が基準株価の二倍を超えた額である場合、交付株式数は上式で計算される交付株式数に、基準株価の二倍を乗じて交付時株価で除した数とします。

達成状況に応じた無償取得（クローバック）及び追加付与

中期計画最終年度において、1年及び2年目の各種目標の達成状況及びそれに応じた支給率が大幅に低下する場合は、指名報酬委員会の答申を踏まえ、当社は、中期業績連動報酬として既に交付した譲渡制限株式の一部を無償取得するものとします（クローバック）。また、中期計画最終年度において、1年及び2年目の各種目標の達成状況及びそれに応じた支給率が大幅に向上する場合は、指名報酬委員会の答申を踏まえ、中期業績連動報酬として最終年度において算出される付与株式数について一定の追加付与を行うことができるものとします。

III業務執行取締役の報酬割合イメージ

➤ 業績連動報酬 支給なしの場合

固定報酬：金銭	固定報酬 （在籍条件型）：RS
86%	1～2カ月分目途 14%

➤ 業績連動報酬 支給ありの場合

固定報酬：金銭	固定報酬 （在籍条件型）：RS	固定報酬 業績連動報酬：RS	中期 業績連動報酬：RS
52%	1～2カ月分目途 9%	0～4カ月分目途 17%	0～5カ月分目途 22%

※上記イメージ図における割合（%）は、固定報酬（在籍条件型）は月額報酬2カ月分相当、単年度業績連動報酬は月額報酬4カ月分相当及び中期業績連動報酬は月額報酬5カ月分相当(上限値)支給された場合の概算数値

取締役の報酬等の総額について

2025年度	報酬等の 総額 （百万円）	報酬等の種類別の総額（百万円）				対象となる 役員の員数 （名）
		基本報酬	在籍条件型 報酬 （株式報酬）	単年度 業績連動報酬 （株式報酬）	中期 業績連動報酬 （株式報酬）	
取締役 （うち社外取締役）	379 (36)	299 (36)	38 (-)	25 (-)	17 (-)	12 (5)

（※1）在籍条件型報酬、単年度業績連動報酬及び中期業績連動報酬は、譲渡制限付株式報酬制度に基づく当事業年度における費用計上額を記載しています。

（※2）非金銭報酬等は、従前制度の株式報酬型ストックオプションとしての新株予約権の費用として当事業年度において計上した額を記載しております。

中期計画の立案と実行

市場状況・技術動向・顧客需要・競合状況等を鑑みたうえで、3年又は5年のサイクルでの中期計画を立案・遂行・管理することで、経営の舵取りを行っております。中期計画の立案過程では、事業環境、競合他社の動向、経営資源、資本コスト等を踏まえた事業ポートフォリオが決定され、各事業戦略・技術開発ロードマップ・投資計画等の具体化がなされます。中期計画の進展・進捗状況は、各担当部門にてKPI等により管理され、取締役会・経営会議等にて各分野別の進捗状況や市場環境の変化等について報告され、計画達成に向けた議論・検討がなされます。

- [IIJグループ 中期計画 FY2024-FY2026及び中長期ビジョン](#)
- [投資についての考え方](#)

取締役会等における定期報告

	週次	月次	四半期毎	半期毎
中期計画	—	—	●	○●

(※) ○：取締役会、●：経営会議等

単年度業績予算とアクションプラン

単年度業績予算は、経営として達成すべきターゲットイメージを全社に示達したうえで、それに沿う形での各部門作成の個別予算積み上げをベースに、立案されています。また、各部門は予算達成に向けたアクションプランを合わせて作成しています。業績進捗は週次で経営幹部により進捗状況のレビューがなされ、事業状況の変化に応じたアクションプラン修正等の指示がなされます。また、業績の進捗については、月次の取締役会で報告・議論され、アクションプランの進捗状況については、半期毎に取締役会にて報告され、計画達成に向けた議論・検討がなされています。グループ会社においても、計画達成に向けた議論・検討がなされています。

取締役会等における定期報告

	週次	月次	四半期毎	半期毎
単年度業績予算・実績	●	○●	○●	○●
アクションプラン	—	—	●	○●

(※) ○：取締役会、●：経営会議等

経営会議等における意思決定について

業務分掌規程・職務権限規程により、各部門・管理者の役割は明確化され、適切に権限移譲がなされ、全社的な意思決定の効率化を実現しています。週次で経営会議を運営し、経営幹部による議論のうえで、事業状況の変化に則した経営判断を行うとともに、新サービスの開発の進捗管理や方向性の修正等、事業運営における適時適切なフォローアップを継続して行っております。

経営会議における決裁・報告事項

種別	内容
方針決裁	取り組みの方向性・方針・戦略等を承認するもの。 例) 新規事業・新規サービス開発、既存事業／既存サービス更改方針、事業プランの策定、新制度の導入、重要なルール改定 等
支出決裁	権限規程に基づき、金銭の支出承認を行うもの。
報告事項	方針決裁・支出決裁後の案件進捗、及び、別途定める報告事項に準じてその進捗（計画比実績、課題、今後の見通し等）について報告・議論するもの。

役職員への研修

IIJは、各役職員が求められる役割を高いレベルで発揮できるよう、役職員の役割・グレード別に求められる要件を定め、必要なタイミングで、必要スキル・知識を習得できる研修制度を構築しています。主な研修制度は、以下の通りです。

- 新人研修、新任課長研修、新任部長研修、新任役員研修
- 階層別研修（リーダーシップ・マネジメント研修）
- 専門スキル開発（営業研修、技術研修、IIJサービス理解研修等）
- グローバルキャリア開発（海外トレーニー制度、グローバルキャリア制度）
- 自己啓発支援（資格支援制度、ビジネススキル研修、英語研修）
- ハラスメント研修、メンタルヘルス研修、キャリア研修
- コンプライアンス研修（倫理規程、贈収防止、インサイダー取引の禁止）

（※）コンプライアンス研修は全役職員（契約社員・派遣社員含む）が対象

内部監査の状況

IIJは社長直轄の独立した組織として内部監査室を設置しています。内部監査室は、財務数値の正確性の確保、コンプライアンスの充実、業務効率の増進を目的として、内部監査計画を策定しています。内部監査室は内部監査報告書を作成し、社長・被監査部門長に報告し、改善指摘事項がある場合、改善計画の内容及び改善状況を確認します。内部監査室では、経営課題や重要性に応じ以下のような分類を設け、複数の観点から複数の部署・子会社を対象とした内部監査を実施しています。

- 業務監査（テーマ監査、組織構造分類別監査、定期監査）
- J-SOX内部監査

内部監査室は監査役との連携強化を図るため、監査役会への陪席、監査役への定期的なレポーティング及び監査役との定期的な意見交換を行なっています。

年度	内部監査室と監査役の連携
2025年度	• 監査役会への陪席：14回/14回 • 監査役との意見交換：25回
2024年度	• 監査役会への陪席：14回/14回 • 監査役との意見交換：24回
2023年度	• 監査役会への陪席：13回/13回 • 監査役との意見交換：37回

情報セキュリティへの取り組み

情報セキュリティへの取り組み

IIJは、情報資産を適切に取り扱うための行動規範として、[情報セキュリティ基本方針](#)を策定しています。役職員（契約社員・派遣社員含む。）は、入社時の情報セキュリティに係る教育を通じて、基本方針及び関連規程への理解を深めています。

IIJは、情報セキュリティ責任者（CISO）、CRO、CPOを配置するとともに、情報セキュリティ委員会を設置、また情報セキュリティの統制部門を中心とした検知・分析・封じ込め・復旧・報告までのセキュリティインシデント対応体制を構築しています。これら体制により、情報セキュリティに係る運営状況を正確に把握し、必要な施策を遅滞なく実施しています。役職員の情報セキュリティに係る基本方針及び関連規程への遵守状況を確認するため、内部監査（年1回）・外部監査（ISMS（※1）：年1回）を実施しています。

（※1）ISMS認証取得

なお、2025年4月に公表した法人向けメールセキュリティサービスにおける情報漏えいをうけ、当該サービス設備において再発防止に向けたセキュリティ対策及び監視体制の強化に取り組んでおります。また、サービス全体における再発防止を目的に社長直轄プロジェクトを発足しました。今後、本プロジェクトを中心に、IIJサービス全体のセキュリティレベルの高度化に取り組んでまいります。

個人情報保護への取り組み

IIJは、個人情報の重要性を鑑み、[個人情報保護方針](#)を策定しています。役職員（契約社員・派遣社員含む。）は、入社時の個人情報に係る教育を通じて、方針及び関連規程への理解を深めています。

個人情報の取り扱い部門には個人情報の管理責任者を配置し、適切な個人情報の取得・利用・管理等を実施しており、個人情報の照会、修正及び削除等の希望については、すみやかに対応しています。役職員の個人情報保護に係る基本方針及び関連規程への遵守状況を確認するため、内部監査（年1回）・外部監査（プライバシーマーク（※1）：2年に1回）を実施しています。

（※1）IIJは、JISQ15001の規格に準拠した個人情報保護マネジメントシステムを構築、運用し、プライバシーマークを取得しています。

拘束的企業準則（Binding Corporate Rules : BCR）（※1）の承認取得

IIJは、EUの個人データ保護法「一般データ保護規則（GDPR）」（※2）に則ってIIJグループの個人データ保護方針を文書化したBCRに関し、ドイツのプライバシー保護監督機関より承認を取得しました。BCRの承認取得により、IIJグループが提供する全サービスは欧州と同等のプライバシー保護レベルにあると見なされ、IIJグループ内においてEUの個人データを国境をまたいで、適法に流通させることができます。

このほか、IIJはAPEC CBPR（越境プライバシールール）認証（※3）を取得しています。CBPR認証の取得により、IIJは適切な個人情報保護が行われている組織であると見なされ、クラウドサービスはじめIIJサービスを利用するお客様は、APEC域内（CBPR参加国：米国、カナダ、メキシコ、韓国、台湾、シンガポール、フィリピン、オーストラリア、日本）で、個人データの移転を法的に安全な状態でスムーズに行えることになります。

（※1）EUの個人データ保護法「一般データ保護規則（GDPR）」に則り、欧州経済領域（EEA）より取得された個人データを保護するための方針と、その個人データをEEA域外のグループ会社に共有する場合のルールを定めるもの

（※2）EEAにおける個人データの「処理」と「移転」について遵守すべき義務を規定する法律

（※3）企業等の越境個人データの保護に関して、APEC（Asia Pacific Economic Cooperation：アジア太平洋経済協力）プライバシー原則への適合性を認証する仕組み

データガバナンスへの取り組み

IIJは、データガバナンスの強化を目的に副社長を議長とするデータガバナンス会議を開催しております。データガバナンス会議では、データガバナンスに関連する内部統制システムの運用状況等についてサービス事業の主管部門より報告を徴収し、そのリスク評価を多面的かつ包括的に行い、それぞれの部門等に対して助言を与えるとともに、社長に対して勧告を出すことを役割としています。

NTTグループ及びKDDIの出資経緯等について

2026年3月現在、NTT(株)（以下、NTT）及びNTTドコモビジネス(株)（以下、NTTドコモビジネス）の間接保有を含めて所有する当社株式数及び議決権比率は20,387,000株及び11.5%で、KDDI(株)（以下、KDDI）が所有する当社株式数及び議決権比率は20,387,000株及び11.5%であり、両社グループは同率にて当社の第一位の株主にあたります。当社グループは、NTTグループ及びKDDIから通信回線等の調達を行っており、また、主としてネットワークサービスにおいて事業競合する立場にあります。

NTT及びNTTドコモビジネスとの間では、1996年1月の当社の資本強化のための第三者割当増資におけるNTTの資本参加、1997年9月のインターネットマルチフィード(株)のNTT（その後、NTTの組織改編によりいずれもNTTドコモビジネスに株主が変更。）との合併設立、2003年9月のクロスウェイブの会社更生手続開始による財務損失を補うためのNTT及びNTTドコモビジネスを主要引受先とする第三者割当増資との資本取引がありました。2023年3月31日時点のNTTグループによる当社株式の株式所有割合は25.9%であり、NTTは当社のその他の関係会社に該当しておりました。

KDDIとの間では、1994年6月の当社の資本強化のための第三者割当増資におけるKDDIの資本参加等の資本取引があり、2023年3月31日時点のKDDIによる当社株式の株式所有割合は0.9%でありました。

NTTの当社株式の一部処分の方針を受け、2023年5月18日付けで、当社はKDDIと資本業務提携契約を締結のうえ、KDDIがNTTから当社株式18,707,000株を譲受けしました。2023年5月19日付けで、当社は東京証券取引所の自己株式立会外買付取引（ToSTNeT-3）にて自己株式の買付けを行い、NTTは3,928,500株を売却致しました。また、この他にNTTは当社株式の一括の売却を行い、これらの結果、両社グループの所有する当社株式数及び株式所有割合は上記の通りとなり、NTTは当社のその他の関係会社に該当しなくなり、国際財務報告基準（IFRS）における関連当事者ではなくなりました。

NTTグループ及びKDDIとの商業的な関係について

当社は、インターネット接続サービス等の提供にあたり、アクセス回線、国内及び国際バックボーン回線、WAN回線、モバイル通信回線及び設備、データセンター施設設備等について、NTTグループ及びKDDIの提供するサービスを多く利用しております。NTTグループ及びKDDIとのこれらの商取引の経済条件は、出資関係にあることによる特別の取り決めは存在せず、通常の商慣習の範囲にあります。

NTTグループ及びKDDIは、当社が提供するモバイルサービスを含むインターネット接続サービス、WANサービス、セキュリティ関連等のアウトソーシングサービス及びシステムインテグレーション等の事業領域で、当社と競合するサービスを提供しております。当社グループとの間で一部の案件で一定の競合が生じることはありますが、出資関係にあることによる特段の取り決めは存在せず、当社グループとして自主性をもった経営を行っております。

2026年3月期における当社のNTT及びNTTドコモビジネスからの売上高は6億円、KDDIからの売上高は3億円でありました。

(2026年6月26日現在)

鈴木 幸一（すずき こういち）

1946年9月3日生

■ 略歴、地位及び担当

- ・ 1992年12月 設立に伴い当社取締役
- ・ 1994年4月 当社代表取締役社長兼CEO
- ・ 2013年6月 同代表取締役会長兼CEO
- ・ 2021年4月 同代表取締役会長兼Co-CEO
- ・ 2024年4月 同代表取締役 会長執行役員兼 Co-CEO（現任）

■ 所有する当社の株式数（※）

7,427,521株



谷脇 康彦（たにわき やすひこ）

1960年9月11日生

■ 略歴、地位及び担当

- ・ 1984年4月 郵政省（現、総務省）入省
- ・ 2013年6月 内閣審議官・内閣サイバーセキュリティセンター（NISC）副センター長
- ・ 2016年6月 情報通信国際戦略局長
- ・ 2017年7月 政策統括官（情報セキュリティ担当）
- ・ 2018年7月 総合通信基盤局長
- ・ 2019年12月 総務審議官（郵政・通信）
- ・ 2021年3月 総務省退官
- ・ 2022年1月 当社顧問
- ・ 2022年6月 同取締役副社長
- ・ 2024年4月 同取締役 副社長執行役員
- ・ 2025年4月 同代表取締役社長執行役員兼Co-CEO & COO（現任）

■ 所有する当社の株式数（※）

12,120株



 北村 公一（きたむら こういち）

1954年5月12日生

■ **略歴、地位及び担当**

- ・ 1978年4月 新日本製鐵(株)（現、日本製鉄(株)）入社
- ・ 2004年6月 新日鉄ソリューションズ(株)取締役
- ・ 2009年4月 同常務取締役
- ・ 2012年4月 同専務取締役
- ・ 2016年6月 同取締役副社長執行役員
- ・ 2020年4月 当社専務執行役員 ビジネスユニット長補佐
- ・ 2021年4月 同専務執行役員 ビジネスユニット長
- ・ 2021年6月 同専務取締役 ビジネスユニット長
- ・ 2024年4月 同取締役 専務執行役員 ビジネスユニット長
- ・ 2025年4月 同取締役 副社長執行役員 エンタープライズ営業本部長（現任）

■ **所有する当社の株式数（※）**

16,743株



 渡井 昭久（わたいあきひさ）

1965年9月30日生

■ **略歴、地位及び担当**

- ・ 1989年4月 (株)住友銀行（現、(株)三井住友銀行）入行
- ・ 1996年8月 当社出向
- ・ 2000年2月 同入社
- ・ 2004年6月 同取締役CFO
- ・ 2010年4月 同常務取締役CFO
- ・ 2015年4月 同財務本部長（現任）
- ・ 2021年4月 同専務取締役CFO
- ・ 2024年4月 同取締役 専務執行役員CFO
- ・ 2025年4月 同取締役 副社長執行役員CFO（現任）
- ・ 2025年4月 同経営戦略本部長（現任）

■ **所有する当社の株式数（※）**

74,542株



 島上純一（しまがみ じゅんいち）

1967年4月17日生

■ 略歴、地位及び担当

- ・ 1990年4月 ㈱野村総合研究所入社
- ・ 1996年9月 当社入社
- ・ 2007年6月 同取締役
- ・ 2010年4月 同常務執行役員
- ・ 2015年4月 同専務執行役員 CTOネットワーク本部長
- ・ 2015年6月 同取締役CTO
- ・ 2016年4月 同テクノロジーユニット長
- ・ 2020年6月 同常務取締役CTO
- ・ 2024年4月 同取締役 専務執行役員 CTO
- ・ 2025年4月 同取締役 副社長執行役員 CTO（現任）

■ 所有する当社の株式数（※）

56,670株



 塚本 隆史（つかもと たかし）

1950年8月2日生

社外

独立役員

■ 略歴、地位及び担当

- ・ 1974年4月 ㈱第一勧業銀行（現、㈱みずほ銀行）入行
- ・ 2004年4月 ㈱みずほコーポレート銀行常務執行役員欧州地域統括役員
- ・ 2009年4月 ㈱みずほフィナンシャルグループ取締役社長
- ・ 2011年6月 ㈱みずほ銀行取締役頭取
- ・ 2011年6月 ㈱みずほフィナンシャルグループ取締役会長
- ・ 2013年7月 ㈱みずほ銀行取締役会長
- ・ 2014年4月 みずほフィナンシャルグループ常任顧問
- ・ 2017年4月 同名誉顧問
- ・ 2017年6月 当社取締役（現任）
- ・ 2023年7月 ㈱みずほフィナンシャルグループ特別顧問（現任）

■ 所有する当社の株式数（※）

15,000株



 佃 和夫 (つくだ かずお)

1943年9月1日生

社外

独立役員

■ 略歴、地位及び担当

- ・ 1968年4月 三菱重工業(株)入社
- ・ 1999年6月 同取締役
- ・ 2002年4月 同常務取締役
- ・ 2003年6月 同代表取締役社長
- ・ 2008年4月 同代表取締役会長
- ・ 2013年4月 同取締役 相談役
- ・ 2019年6月 同特別顧問
- ・ 2020年6月 当社取締役 (現任)
- ・ 2021年6月 三菱重工業(株)名誉顧問

■ 所有する当社の株式数 (※)

4,500株



 岩間 陽一郎 (いわま よういちろう)

1943年9月15日生

社外

独立役員

■ 略歴、地位及び担当

- ・ 1967年4月 東京海上火災保険(株) (現、東京海上日動火災保険(株)) 入社
- ・ 1996年6月 同取締役
- ・ 2005年4月 同専務取締役
- ・ 2005年6月 東京海上アセットマネジメント投信(株) (現、東京海上アセットマネジメント(株)) 代表取締役社長
- ・ 2010年6月 (株)日本証券投資顧問業協会 (現、(一社)日本投資顧問業協会) 会長
- ・ 2018年5月 日興アセットマネジメント(株) (現、アモーヴァ・アセットマネジメント(株)) 社外取締役兼取締役会議長
- ・ 2021年6月 当社取締役 (現任)

■ 所有する当社の株式数 (※)

5,000株



 岡本 厚（おかもと あつし）

1954年3月26日生

社外

独立役員

■ **略歴、地位及び担当**

- ・ 1974年4月 (株)岩波書店 入社
- ・ 2008年4月 同編集局部長
- ・ 2010年6月 同取締役
- ・ 2013年6月 同代表取締役社長
- ・ 2022年6月 当社取締役（現任）

■ **所有する当社の株式数（※）**

3,100株



 鶏巢香穂利（とうのす かおり）

1961年12月24日生

社外

独立役員

■ **略歴、地位及び担当**

- ・ 1985年4月 (株)富士銀行（現、(株)みずほ銀行）入行
- ・ 2001年6月 監査法人トーマツ（現、有限責任監査法人トーマツ）入所
- ・ 2006年6月 同パートナー
- ・ 2015年11月 デロイトトーマツ（同） ボードメンバー
- ・ 2018年6月 有限責任監査法人トーマツ ボードメンバー
- ・ 2022年6月 (株)かんぽ生命保険 取締役（現任）
- ・ 2022年6月 当社取締役（現任）

■ **所有する当社の株式数（※）**

1,100株



（※）2026年3月31日時点の所有株式数であります。

IIJグループの社会貢献

IIJグループは日本のインターネットをリードし支えてきた技術を活かし、また多様な能力や価値観を持つ人が活躍できる社会の実現という理念に基づき、事業を通じて社会課題の解決に向き合うだけでなく、事業活動の枠を超えた取り組みによっても、持続可能で人々が生き生きとくらすことができる社会の実現に貢献していきます。

未来のネットワーク社会への貢献

IIJは国内初のインターネット接続事業者として創業し、高い技術力で日本のインターネットを牽引し続けてきました。国内外の技術コミュニティ参画をはじめ、産官学連携によってインターネット業界全体の発展に貢献しています。また、自社で開発した技術やサービスの運用によって得られた知見をもとに、次世代の技術者育成を推進し、ネットワーク社会のさらなる発展を支援しています。

IIJアカデミーでのネットワークエンジニア育成

インターネットとネットワークサービスは世の中に広く普及し、社会インフラ・企業の事業基盤として不可欠でトラブルや停止の許されないものになりました。また、将来の多様化していく情報処理技術の活用においても、高品質で信頼性の高いネットワークの利用が大前提となります。一方で、そのようなネットワーク・システムの安定運用を支えるエンジニアの不足は大きな課題となっています。そこでIIJは創業30周年プロジェクトとして、ネットワークスペシャリストを育成する「IIJアカデミー」を立ち上げました。IIJが創業以来培ってきたインターネットサービス開発・運用の知見をベースに、実践的な知識・スキルを習得できる学びの場を提供し、未来のネットワーク社会とIT産業の根幹を支える高度な技術を持つIT人材を育成することを目指しています。

➤ [IIJアカデミー](#)



学生・生徒のためのインターネット・IT学習支援

IIJは学生や生徒がインターネットやITへの理解を深める目的で、様々な学習支援を行っています。

2024年からは日本経済新聞社と連携した中高生に向けた教育プログラム（日経電子版 for Education）を開始し、新しい学びの創出をテーマにインターネットの歴史やサイバーセキュリティの学習コンテンツの提供、またデータセンターの見学授業を行っています。

また、一部の大学や専門学校ではIIJ社員によるインターネットの基礎知識やネットワーク技術・IoT技術についての講義を実施しているほか、小学生から高校生までを対象にIIJ本社オフィスでの訪問学習を受け入れており、インターネット、およびIIJの事業やITエンジニアの仕事内容についての理解促進に向けた活動を行っています。



ゲームを使ったサイバーセキュリティ授業



データセンターの見学

- 日経電子版 for Education
- 中高生女子向けの職場体験ツアー「Girls Meet STEM 2025」に参画
- 仙台高等専門学校にてインターネット技術のセミナーを実施
- 訪問学習活動の支援



スマート農業の出前授業

APNICによるインターネットの地域発展活動

世界各地域のインターネットの普及と発展を支援するため、企業活動の枠を超えた取り組みを行っています。代表的な例では、APNIC（Asia Pacific Network Information Centre）の理事（APNIC EC）としてのIIJ松崎吉伸氏の活動です。APNIC理事会であるAPNIC ECメンバーとしての活動を通じて、アジア太平洋地域のインターネットの安定運用に貢献しています。

- [APNIC EC（理事）にJPNIC理事松崎吉伸氏が再選出 - JPNIC](#)



ITエンジニアに役立つ技術情報の公開

IIJのエンジニアが日々のサービス開発・運用の現場から得た知見や最新の技術情報を社内外のエンジニアに向けて公開しています。技術レポート誌「Internet Infrastructure Review」、技術ブログ「IIJ Engineers Blog」、YouTubeチャンネル「IIJ Techチャンネル」などのオウンドメディアを通じ、積極的な情報発信を行うことでインターネット技術コミュニティの活性化を推進しています。

- [Internet Infrastructure Review](#)

- [IIJ Engineers Blog](#)

- [IIJ Techチャンネル](#)



その他のトピック

- 詳細は[活動レポート](#)をご覧ください。

インターネットの安心・安全への貢献

インターネットの普及により生活や社会が便利になった一方で、インターネット技術を介したサイバー攻撃やプライバシー侵害など、企業や個人を脅かす問題も発生しています。IIJは安心・安全なインターネット社会の構築のため、長年培ってきたセキュリティサービスの開発・運用の知見を活かし、人材の育成・指導、セキュリティ情報の発信による啓蒙活動に取り組んでいます。

サイバー捜査官の育成支援

警察では、サイバーセキュリティ分野における知見向上を目的に、情報通信技術に関する高度かつ専門的な知識を有する民間事業者等の技術者を「サイバーセキュリティアドバイザー」として登用する制度を採用しています。IIJセキュリティ本部の齋藤衛は、現在、関東管区警察局、兵庫県警察、島根県警察、北海道警察からの委嘱を受け、それぞれのアドバイザーに就任し、専門的な見地から講演や研修を実施するなどサイバーセキュリティ対策をサポートしています。

また、IIJではセキュリティオペレーションセンター（SOC）において、サイバー犯罪対策に携わる警察官の受け入れを行って



います。IISOCではセキュリティアナリストを育成するためのIIS独自の研修プログラムを構築しており、研修プログラムの受講や、SOCでの業務に携わることでサイバー関連事案の捜査に有用な知識の習得を支援しています。

- IISのセキュリティ本部長、関東管区警察局サイバーセキュリティアドバイザーに就任
- IISのセキュリティ本部長が兵庫県警より感謝状を受贈
- IISのセキュリティ本部長が島根県警察本部長より感謝状を受贈

国際カンファレンス「Black Hat USA」でトレーニングコースを提供

1997年から続く世界で最も権威と実績があるセキュリティカンファレンスの1つ「Black Hat USA」において、2018年よりIISのセキュリティエンジニアチームが講師を務めました。本カンファレンスのトレーニング講師に選出されるのは日本人として初めてのことで、その後も世界中のセキュリティエンジニアを対象に、インシデント対応のための総合演習などを提供しています。



- IISのセキュリティエンジニア、セキュリティの国際カンファレンス「Black Hat USA 2019」においてトレーニングコースを提供
- セキュリティの国際カンファレンス「Black Hat USA 2018」において、IISのセキュリティエンジニアが日本人で初めてトレーニングを提供 □

セキュリティエンジニアの感謝状受贈

IISセキュリティ本部の鈴木博志が、サイバーセキュリティ業界活動への貢献を評価され、一般社団法人JPCERTコーディネーションセンター（※）より感謝状を受贈しました。

（※）国内のサイバー攻撃の被害を低減するために、インターネットを介して発生する侵入やサービス妨害等のコンピュータセキュリティインシデントについて、日本国内に関するインシデント等の報告の受け付け、対応の支援、発生状況の把握、手口の分析、再発防止のための対策の検討や助言などを、技術的な立場から行なう一般社団法人。



- セキュリティ本部鈴木博志：
国内セキュリティアナリストのスキルアップを目指す技術情報共有カンファレンス「Japan Security Analyst Conference」のプログラム選考委員としての功績が評価

プライバシー保護活動への貢献

欧州のGDPR（一般データ保護規則）をはじめとした世界のプライバシー保護法制におけるIISの知見を活かし、日本企業のプライバシーデータ保護活動を支援するため、一般社団法人日本DPO（※）協会に理事として参加しています。



またIISは、日本DPO協会の認定教育事業者として、2022年12月13日より、プライバシー保護人材を育成するためのDPO協会認定教育プログラム「IISプライバシー研修」を開設しています。

（※）DPO（Data Protection Officer）：GDPRにおいて、一定以上の要件を満たす企業に対して設置を求められるデータ保護責任者のこと。

- 日本DPO協会 □

その他のトピック

- 詳細は[活動レポート](#)をご覧ください。

芸術文化を通じた豊かな社会への貢献

IIJは、上野を中心に毎年開催される「東京・春・音楽祭」への協賛や東京大手町での「トワイライトコンサート」の開催など、長年にわたりクラシック音楽を通じて文化芸術の振興、地域社会への貢献を続けてきました。また、最新のストリーミング技術を使った4K映像・ハイレゾ音源のライブ配信など高品質な動画や音楽の配信にチャレンジし、より多くの方に音楽の豊かさを届けています。

「東京・春・音楽祭」の協賛および動画配信サポート

IIJが協賛する、「東京・春・音楽祭」は、2005年に日本からオペラのニュー・プロダクションを世界に発信する「東京のオペラの森」として始まり、第5回目の2009年からは「東京・春・音楽祭」と名前を変え、毎年春に上野公園を舞台に開催されている、国内最大級のクラシック音楽の祭典です。東京文化会館での「ワグナー・シリーズ」や、オーケストラ公演、国内外で活躍するアーティストによる公演のほか、美術館や博物館を会場とした「ミュージアム・コンサート」など、様々なコンサートが開かれます。IIJは、地域の商店街や多くの企業とともに、この音楽祭を応援するのに加え、動画視聴サイトでのコンテンツ配信やチケット販売サイトのシステム運営もサポートしています。



- [東京・春・音楽祭](#)
- IIJは、「東京・春・音楽祭」を応援しています。
- IIJ、「東京・春・音楽祭2025」においてライブ・ストリーミング配信をサポート

トワイライトコンサートの開催

「トワイライトコンサート」は、三井住友銀行と「東京・春・音楽祭」の協力のもと、IIJが2008年から開催している無料コンサートです。大手町のオフィス街で「ゆうべの音楽」をテーマにした演奏によって、慌ただしい一日の終わりにやすらぎの時間を届けています。



- [TWILIGHT CONCERT](#)

ベルリン・フィルの「デジタル・コンサートホール」の支援

IIJは、ベルリン・フィル・メディアと「ストリーミングパートナー」としてスポンサーシップ契約を結んでおり、同社が運営するベルリン・フィル・ハーモニー管弦楽団の映像配信サービス、「デジタル・コンサートホール」を支援しています。このポータルでは、年間約50回の定期演奏会を、ライブ中継およびオンデマンド再生で提供しています。



- [ベルリン・フィル「ストリーミングパートナー」](#)

代表取締役 鈴木幸一の音楽支援活動による文化功労者受勲

文化功労者は、日本において、文化の向上発達に関し特に功績顕著な者を指す称号です。鈴木は、「東京・春・音楽祭」の実行委員長として長年にわたり文化芸術の振興に努めるとともに、企業の社会貢献としての文化芸術活動への支援の促進にも奔走するなど、その功績が認められ、2020年に顕彰されました。



- [当社代表取締役 鈴木幸一が令和2年度の文化功労者に選出されました](#)

その他のトピック

- 詳細は[活動レポート](#)をご覧ください。

誰もが笑顔で活躍できる社会への貢献

IIJでは、パラリンピックを目指して活動するスポーツ選手の支援活動を行っています。また、チャリティスポーツイベントの協賛や災害にあわれた方の支援を通じて、社会の様々な困難を抱える方々のサポートを行っています。

パラフェンシング選手、笹島選手の競技活動支援

IIJは、2016年からパラフェンシング競技と仕事を両立する笹島貴明選手を支援しています。笹島選手は新卒でIIJに入社したのち、スノーボードでのケガで車いす生活をおくることになりましたが、受傷後に東京都が主催するスポーツ選手発掘事業に参加し、パラフェンシングに出会いました。競技を開始してわずか1年で日本代表となり、現在まで強化選手としてパラリンピック出場を目指して世界各国を転戦しています。

競技に専念する選手が多いなか、笹島選手は広報部で広報誌編集などの業務に従事し、加えて全国の学校や自治体向けの講演活動でパラアスリートとしての経験を伝えたり、パラフェンシングの体験会を実施したりするなど、業務や競技以外の活動にも精力的に取り組んでいます。



- [笹島貴明選手プロフィール](#)
- [パラフェンシング笹島貴明の“Allez（アレ）”！](#)

災害被災者の通信支援と災害・紛争地域への通話支援

個人向けにモバイルや光回線のインターネット接続サービスを提供している「IIJmio」は、地震や台風などの災害で被災されたお客様を対象に、通信容量の付与などの減免措置を実施しています。また甚大な災害や紛争が発生している海外地域に連絡が必要なお客様が、国際電話の通話料金を気にすることなく情報収集・安否確認ができるよう通話サービスを無償化するなどの支援を行っています。



- [IIJmioひかり電話のウクライナへの国際電話の通話料無償化について](#)
- [IIJmioひかり電話のトルコへの国際電話の通話料無償化について](#)

MVNO普及による低廉なサービスの環境整備への貢献

モバイルサービスは端末の普及台数が1人1台を超えて利用されており、人々の生活や経済・社会活動に不可欠な基盤となっています。IIJは、個人向けMVNO（Mobile Virtual Network Operator）サービスである「IIJmio」において、従来よりも低価格の顧客満足度の高いサービスを提供し、より多くの方がモバイルサービスを利用できる環境整備を推進してきました。

IIJ MVNO事業部の佐々木太志は、MVNO黎明期よりサービスの企画・開発や移動体通信事業者との交渉を担当するとともに、MVNO業界を代表する関係団体の構成員やオブザーバとして活動してきました。こうした活動によってMVNOの普及とモバイル市場の競争活性化による低廉なサービスの環境整備の貢献が評価され、2023年、第68回前島密賞奨励賞を受賞しました。



- [日本におけるMVNOの普及等の貢献により第68回「前島密賞奨励賞」を受賞](#)

シオヤレクリエーションクラブ

IIJは2017年より障がい者と健常者の垣根なく、誰もが一緒に参加できる陸上教室を提供する「NPO法人シオヤレクリエーションクラブ（SRC）」を支援しています。

障がいを持つ子どもがほかの兄弟と揃って遊びやスポーツに参加できる機会は多くはありません。SRCは「今までできなかったことを可能にしたい」という思いから、障がい者と健常者が一緒に活動できる陸上教室やレクリエーションの場を提供しています。現在、小学生から社会人まで約90名が所属（うち7割が障がいを持った方々）、中にはパラリンピックを目指して活躍する選手もいるなど、SRCの活動の更なる発展が期待されています。



➤ [NPO法人シオヤレクリエーションクラブ](#)

PTC社主催のチャリティゴルフによる特別支援学校への支援

IIJのグループ会社である、シンガポールのPTC SYSTEM（S）PTE LTD（PTC社）は、2014年より毎年チャリティゴルフを開催しています。

チャリティゴルフは、シンガポールの特別支援学校であるMetta Schoolの支援を目的としており、Metta Schoolでは軽度の障害や自閉症と診断された生徒の自立を促進しています。



IIJキッズインターネットQ&A

スマートフォンの安心安全な使い方など、インターネットの仕組みや正しい利用について、子ともと保護者が一緒に理解を深めることができるサイトを公開しています。

➤ [IIJキッズインターネットQ&A](#)



NIPPON ITチャリティ 駅伝への協賛

IT業界をはじめ、うつ病、ひきこもりで悩みを抱えている人が増加する中、社会的に立場の弱い未就労者を救うために企画された「NIPPON ITチャリティ 駅伝」にIIJは協賛しています。

➤ [ITチャリティ 駅伝を通じて就労支援に貢献](#)



その他のトピック

➤ 詳細は[活動レポート](#)をご覧ください。

活動レポート一覧

➤ 詳細は[こちら](#)よりご覧いただけます。

会社情報

会社概要

2026年3月31日現在

名 称	株式会社インターネットイニシアティブ Internet Initiative Japan Inc.
本 社 所 在 地	〒102-0071 東京都千代田区富士見2-10-2 飯田橋グラン・ブルーム Tel : 03-5205-6500 E-mail : info@iij.ad.jp URL : https://www.iij.ad.jp/
設 立 年 月 日	1992年12月3日
資 本 金	23,123百万円 (単体)
従 業 員 数	連結 5,533人 単体 3,174人
事 業 内 容	インターネット接続サービス、WANサービス及びネットワーク関連サービスの提供、 ネットワーク・システムの構築・運用保守、通信機器の開発及び販売
上場証券取引所	東京証券取引所プライム市場 (2022年4月4日移行、証券コード：3774)
主 要 株 主	KDDI株式会社、NTT株式会社／NTTドコモビジネス株式会社、 伊藤忠テクノソリューションズ株式会社、鈴木 幸一
主 要 取 引 銀 行	三井住友銀行 みずほ銀行 三菱UFJ銀行 三菱UFJ信託銀行

連結業績概況 (国際財務報告基準(IFRS))

2026年3月期

売 上 収 益	3,454.0億円
営 業 利 益	348.4億円
親会社の所有者に帰属する当期利益	241.9億円

役員

2025年6月26日現在

取締役／監査役

代表取締役	鈴木 幸一 谷脇 康彦
取締役	北村 公一 渡井 昭久 島上 純一 塚本 隆史 (非常勤) *1 佃 和夫 (非常勤) *1 岩間 陽一郎 (非常勤) *1 岡本 厚 (非常勤) *1 鶴巢 香穂利 (非常勤) *1
監査役	飛田 昌良 田中 正子 麻生 久美子 (非常勤) *2 原田 史緒 (非常勤) *2

(*1) 独立社外取締役 (*2) 社外監査役

執行役員

会長執行役員	鈴木 幸一 (Co-CEO)
社長執行役員	谷脇 康彦 (Co-CEO & COO)
副社長執行役員	北村 公一 渡井 昭久 (CFO) 島上 純一 (CTO)
専務執行役員	川島 忠司 米山 直志 (CIO) 越智 俊城
常務執行役員	鯉坂 慎 山井 美和 丸山 孝一 立久井 正和 墨矢 亮 (CISO、CRO、CPO (※3)) 大西 丈則 矢吹 重雄 荒木 健 城之内 肇 井手 隆裕 染谷 直 日山 孝彦
執行役員	白崎 博生 波多野 剛 齋藤 衛 黒澤 憲太郎 中 嘉一郎 林 賢一郎 山家 秀樹

(※3) CISO: Chief Information Security Officer、CRO: Chief Risk Officer、CPO: Chief Privacy Officer



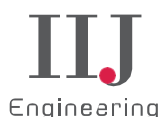
支社／支店／営業所

関西支社	〒541-0041 大阪府大阪市中央区北浜4-7-28 住友ビルディング第2号館 Tel: 06-7638-1400 Fax: 06-7638-1401
名古屋支社	〒450-0003 愛知県名古屋市中村区名駅南1-24-30 名古屋三井ビルディング 本館4F Tel: 052-589-5011 Fax: 052-589-5012
九州支社	〒812-0039 福岡県福岡市博多区冷泉町2-1 博多祇園M-SQUARE Tel: 092-263-8080 Fax: 092-263-8100
北海道支店	〒060-0004 北海道札幌市中央区北二条西4-1 札幌三井JPビルディング 18F Tel: 011-218-3311 Fax: 011-218-3312
東北支店	〒980-0021 宮城県仙台市青葉区中央4丁目4-19 アーバンネット仙台中央ビル 11F Tel: 022-216-5650 Fax: 022-216-5651
横浜支店	〒222-0033 神奈川県横浜市港北区新横浜2-15-10 YS新横浜ビル 8F
北信越支店	〒930-0856 富山県富山市牛島新町5-5 タワー111 10F Tel: 076-443-2605 Fax: 076-443-2606
中四国支店	〒730-0022 広島県広島市南区松原町2番地62号 広島JPビルディング 16階 Tel: 082-568-2080 Fax: 082-568-2088
沖縄支店	〒900-0015 沖縄県那覇市久茂地1-7-1 琉球リース総合ビル 2F Tel: 098-941-0033 Fax: 098-941-0034
新潟営業所	〒950-0912 新潟県新潟市中央区東大通1丁目3番1号 INPEX新潟ビルディング 4階 Tel: 025-244-8060
豊田営業所	〒471-0025 愛知県豊田市西町4-25-13 フジカケ鉄鋼ビル 5F Tel: 0565-36-4985

■ グループ会社一覧

プロバイダー事業から各種アウトソーシング、ネットワーク・システム・インテグレーションなど、ネットワークに関するサービス全般を提供いたします

連結子会社



株式会社IIJエンジニアリング

ネットワークの運用管理、テクニカルサポート、コールセンターなどのアウトソーシング受託
〒101-0041 東京都千代田区神田須田町1-23-1 住友不動産神田ビル2号館15F
Tel : 03-5205-4000 E-mail : info@ij-engineering.co.jp URL : <https://www.ij-engineering.co.jp/>



株式会社IIJグローバルソリューションズ

WANサービスの提供をはじめとする、国内ネットワーク・アウトソーシングサービス関連事業及び国際ネットワーク関連サービスを提供
〒102-0071 東京都千代田区富士見2-10-2 飯田橋グラン・ブルーム
Tel : 03-6777-5700 E-mail : info@ijglobal.co.jp URL : <https://www.ijglobal.co.jp/>



ネットチャート株式会社

LAN関連を中心としたネットワーク構築事業
〒222-0033 神奈川県横浜市港北区新横浜2-15-10 YS新横浜ビル8F
Tel : 045-476-1411 E-mail : info@ncj.co.jp URL : <https://www.ncj.co.jp/>



株式会社IIJプロテック

法人向けのシステム運用、サービスサポート業務を中心に幅広くアウトソーシング事業を展開
〒102-0071 東京都千代田区富士見2-10-2 飯田橋グラン・ブルーム
Tel : 03-5205-6766 URL : <https://www.ij-protech.co.jp/>



株式会社センシフィア

農業向け高精度水分センサーの開発・販売、灌水ナビゲーションサービスの提供
〒162-0813 東京都新宿区東五軒町6-22 フロントプレイス飯田橋
Tel : 03-5205-6890 URL : <https://www.sensiphia.com/>



株式会社トラストネットワークス

金融決済サービス（ATM運用サービスなど）の企画・運営
〒102-0071 東京都千代田区富士見2-10-2 飯田橋グラン・ブルーム
Tel : 03-5205-6490 E-mail : info@trust-networks.com URL : <http://www.trust-networks.com/>



IIJ America Inc.

米国におけるISP事業及び当社の米国インターネットバックボーン網の構築と運用
55 East 59th Street, Suite 18C, New York NY 10022, U.S.A.
Tel : 1-212-440-8080 E-mail : info@ij-america.com URL : <https://www.ijamerica.com/>



IIJ Europe Limited

高品質なサービスと付加価値の高いSIの提供を通じ、欧州に拠点を持つ日系企業のIT導入を支援
1st Floor 80 Cheapside London EC2V 6EE, U.K.
Tel : +44(0)20 70072 2700 E-mail : info@eu.ij.com URL : <https://uk.ij.com/jp>



IIJ Global Solutions Singapore Pte. Ltd.

シンガポールにおけるインターネット接続サービス、ネットワークやシステムの構築・運用保守、クラウドサービスの提供等
160 Paya Lebar Road #03-07 Orion @ Paya Lebar Singapore 409022
Tel : +65-6773-6903 E-mail : sales@ap.iiij.com URL : <https://www.iiij.ad.jp/global/singapore/>



PTC SYSTEM (S) PTE LTD

主としてシンガポールにおいて、ストレージ・サーバー関連のシステム構築を中心としたソリューションを提供
10 Kallang Avenue #07-12 Aperia Singapore 339510
Tel : +65-6282-0255 E-mail : sales@ptesys.com URL : <https://ptesys.com/>



艾杰（上海）通信技術有限公司

中国におけるネットワークあるいはシステムの構築および運用保守、クラウドサービスの提供等
邮编200031 上海市徐匯区淮海中路1045号淮海国際広場4202-4203室
Tel : +86-21-8026-1899 E-mail : gschina-sales@iiijgschina.com URL : <https://cn.iiij.com/cn>

持分法適用関連会社



インターネットマルチフィード株式会社

インターネット相互接続（IX）サービス、IPv6ローミングサービスなどを提供
〒101-0047 東京都千代田区神田3-6-2 アーバンネット 神田ビル10F
Tel : 03-6262-0940 E-mail : info@mfeed.ad.jp URL : <https://www.mfeed.ad.jp/>



JOCDN株式会社

動画配信のためのCDN（Content Delivery Network）サービスを提供
〒102-0071 東京都千代田区富士見2-10-2 飯田橋グラン・ブルーム
Tel : 03-5205-6586 E-mail : info@jocdn.co.jp URL : <http://www.jocdn.co.jp/>



株式会社DCP

デジタル通貨の取引・決済を行う金融サービス事業を展開
〒102-0071 東京都千代田区富士見2-10-2 飯田橋グラン・ブルーム
URL : <https://www.dcpjy.com/>

■ 沿革

日本のインターネットは、IIJと共に始まり、発展してきました

サービスの歴史

■ 1993.11

インターネット接続サービスを開始

国内初

インターネットの商用接続サービスを国内で初めて開始しました。それまで、一部の大学や研究機関に限定されていたインターネットの利用が、これを機に一般の企業や官公庁などに拡大していきました。

■ 1994.5

ダイヤルアップIPサービスを開始

国内初

電話回線とモデムでインターネットにつないでいた当時に利用された接続方式。現在でも使用されている技術です。

■ 1994.11

ファイアウォールサービスを開始

国内初

インターネットの普及にともなったセキュリティ上の脅威の増大を背景に開始。現在は当然のように利用されているセキュリティ機能です。

■ 1996.12

個人向けサービス「IIJ4U」の提供を開始。

■ 1997.11

米国でISP事業を開始。

国内初

■ 1998.4

IPマルチキャスト配信サービスを開始。

国内初

■ 1998.8

企業向けアクセスルータ「SEIL（ザイル）」の開発・販売を開始。

■ 1999.6

サービス品質保証制度（SLA）を導入

国内初

インターネット接続サービスの品質を、お客様に保証する制度を導入しました。

■ 1999.8

IPv6の商用実験サービス（トンネリング型）を開始

国内初

IPv4の枯渇問題にいち早く取り組み、IPv6の通信を行う仕組みを開発しました。

■ 2000.2

クラウドサービスの先駆けとなる「BPS」を開始。

■ 2001.5

JPNAPサービスを開始。（インターネットマルチフィード株式会社）

■ 2001.9

個人向けサービス「IIJmio（ミオ）」の提供を開始。

■ 2001.11

IPv6/IPv4デュアルスタックサービスを開始。

国内初

■ 2003.2

独自開発ルータSEIL（ザイル）をコントロールするシステム「IIJ SMF」（SEIL Management Framework）を開発。（特許番号：特許第3774433号）

■ 2007.8

「SMF-LAN」に関する特許権を取得。（特許番号：特許第3996922号）

■ 2008.1

モバイル通信サービス「IIJモバイル」を開始

通信キャリアから無線通信の設備を借り受け、独自の付加価値とともにサービスを提供するMVNO事業を開始しました。

→ 1992

IIJグループの歩み

■ 1992.12

(株)インターネットイニシアティブ企画として設立。

■ 1992.12

Internet Societyに設立メンバーとして参加。

■ 1993.5

(株)インターネットイニシアティブ（IIJ）に社名を変更。

■ 1994.2

特別第二種電気通信事業者に登録。

■ 1995.1

動画配信サービスの提供を行う(株)アイアイジェイメディアコミュニケーションズを設立（2005年にIIJに吸収合併）。

■ 1995.11

アジア太平洋地域の国際バックボーン構築を行う(株)アジア・インターネット・ホールディングスを設立（2005年にIIJに吸収合併）。

■ 1996.3

米国におけるISP事業を行うIIJ America Inc.を設立。

■ 1996.11

SIやシステムアウトソーシング事業を行う(株)アイアイジェイテクノロジーを設立（2010年にIIJに吸収合併）。

■ 1997.9

NTTグループなどと共同で、IXサービスを提供するインターネットマルチフィード（株）を設立。

■ 1998.2

テクニカルサポートやアウトソーシングサービス事業などを行う(株)ネットケアを設立。

■ 1998.4

次世代のインターネット技術を研究開発するIIJ技術研究所を設立。

■ 1998.10

広域LANサービスを提供する(株)クロスウェイブコミュニケーションズを設立（2003年12月に第3者へ営業譲渡）。

国内初

■ 1999.8

米国ナスダック市場にて株式公開（2019年4月 上場廃止）

■ 2005.2

欧州最大のIX事業者団体“Euro-IX”に参画（インターネットマルチフィード（株））。

国内初

■ 2005.12

東京証券取引所マザーズにて株式公開。

■ 2006.2

コナミ（株）と共同で、デジタルエンタテインメント事業でのシステム業務を行う(株)インターネットレボリューションを設立。（2022年3月に(株)コナミデジタルエンタテインメントへ営業譲渡）

■ 2006.8

LAN関連のネットワーク構築事業を行うネットチャート(株)を設立。

■ 2006.12

東京証券取引所市場第一部へ上場。

■ 2007.6

個人向けISP事業を行う(株)ハイホーを子会社化（2017年12月に第3者へ営業譲渡）。

■ 2009.7

中小企業向けサービスブランド
「LaIT（ライト）」を開始。

■ 2009.12

システムクラウドサービス 「IJ GIO（ジオ）」を開始

2000年に開始した「iBPS」で培ったノウハウを
もとにクラウドサービスの提供を開始しました。

■ 2011.4

松江データセンター パークを開設

国内初

外気冷却コンテナユニットによるデータセンター。
クラウドサービス「IJ GIO」の
省電力なファシリティとして利用を開始しました。

■ 2012.3

米国でクラウドサービスを提供開始。

■ 2012.8

コンテナ型データセンターモジュール
に関する特許権を取得。
(特許番号：特許第5064538号)

■ 2013.1

中国でクラウドサービスを提供開始。

■ 2013.4

バックボーンネットワークを欧州へ拡張し、
世界一周して接続。

■ 2014.3

シンガポールでクラウドサービスを提供開始。

■ 2015.4

DSD5.6MHzハイレゾ音源
によるライブ・ストリーミング
公開実験に成功。

世界初

■ 2015.5

インドネシアでクラウドサービス「Biznet GIO
Cloud」を開始。

■ 2015.9

ネットワーククラウドサービス 「IJ Omnibus（オムニバス）」を開始

ネットワークとネットワーク機能の仮想化を実現す
るクラウドサービスの提供を開始しました。

■ 2016.10

タイでクラウドサービス「Leap GIO Cloud」を開
始。

■ 2017.4

ベトナムでクラウドサービス「FPT HI
GIO CLOUD」を開始。

■ 2018.3

フルMVNOのサービスを 提供開始

国内初

■ 2019.3

4K映像・ハイレゾ音源の インターネット・ライブ・ ストリーミング配信に成功

世界初

■ 2019.5

白井データセンターキャンパスを開設。

■ 2019.7

eSIM対応のデータ通信サービスを開始。

国内初

■ 2020.11

5Gスタンドアローン方式のeSIMを開発。

国内初

■ 2022.9

自社開発のSASE「IJセキュアアクセス
サービス」を開始。

■ 2023.6

マルチプロファイルSIMを開始。

■ 2023.7

白井データセンターキャンパス 2期棟の
運用開始。

■ 2024.8

環境価値のデジタルアセット化と
DCJPYによる決済取引を開始。

■ 2025.6

「松江データセンターパーク」で
システムモジュール棟の運用開始

→ 2026 ←

■ 2007.7

金融決済サービスの企画運営を行う
(株)トラストネットワークスを設立。

■ 2007.7

タイヘイコンピュータ(株)へ出資。
ポイント管理サービスをASP提供。
(2011年5月に(株)トリニティに社名変更)
(2026年5月に平田機工(株)へ株式譲渡)

■ 2008.6

IJ技術研究所を拡大し、
(株)IJイノベーションインスティテュートを設立
(2022年4月にIJに吸収合併)

■ 2010.9

国内及び国際ネットワーク関連サービス
を提供する(株)IJグローバルソリューションズを
設立。

■ 2012.1

中国に現地法人を設立
(IJグローバルソリューションズ)。

■ 2012.4

海外におけるSI事業を行う(株)IJエクスレイヤを
設立(2014年にIJに吸収合併)。

■ 2012.4

ネットワークの仮想化技術の研究開発を行う
(株)ストラトスフィアを設立(2015年7月に
IJとACCESSに事業を継承し、解散)。

■ 2012.7

タイに現地法人を設立
(IJグローバルソリューションズ)。

■ 2013.4

IJエクスレイヤの英国法人を
IJ Europe Limitedに社名変更。

■ 2014.10

(株)ネットケアを(株)IJエンジニアリングに
社名変更。

■ 2014.12

システム開発や運用、アウトソーシング事業を行う
(株)竜巧社ネットウエアを子会社化。

■ 2015.1

インドネシアにBiznet Networksと合併会社を
設立。

■ 2016.2

タイにTCC Technologyと合併会社を設立。

■ 2016.11

ベトナムに現地法人を設立。

■ 2016.12

日本テレビ放送網(株)と動画配信サービスの
提供を行う合併会社JOC DN(株)を設立。

■ 2018.1

デジタル通貨の取引・決済を担う(株)ディーカレ
ットを国内有力企業各社との合併会社として設立。
(2026年7月に(株)ディーカレットホールディン
グスが子会社である(株)ディーカレットDCPを吸
収合併し、(株)DCPに社名変更)

■ 2020.1

(株)竜巧社ネットウエアを
(株)IJプロテックに社名変更。

■ 2021.4

シンガポールのSI企業、PTC SYSTEM (S)
PTE LTDを子会社化。

■ 2021.8

クラウド事業者(IaaS)として欧州の監督機関
より「拘束的企業準則(BCR)」の承認取得。

世界初

■ 2022.4

東京証券取引所プライム市場に移行
(証券コード：3774)

■ 2022.9

クラウド事業者(IaaS)として、APEC CBPR(越境
プライバシールール)の認証を取得。

■ 2022.12

IJ創業30周年。
記念施策としてIJアカデミーを開設。

■ 2024.4

IJ Global Support Centerをマレーシアに開設。

■ 2024.4

中国江蘇省無錫に新拠点を開設。

■ 2025.1

Preferred Networks、三菱商事と「株式会社Preferred
Computing Infrastructure」を設立

■ 2026.3

ソニーセミコンダクタソリューションズとの合併会社
(株)センシフィアを設立

URL : <https://www.ij.ad.jp/ir/gloss/>

